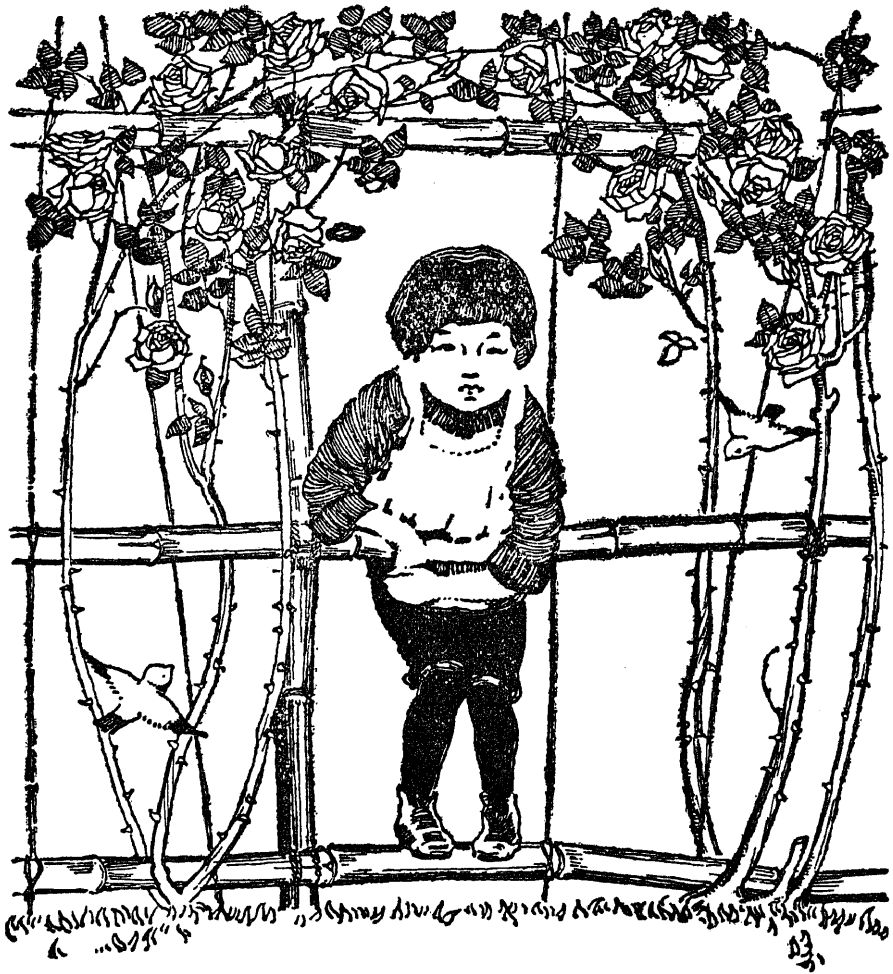


育教の兒幼

號九・八第 號月九 卷二十三第



內校學範師等高子女京東

會協園稚幼本日

東京音樂學校内 日本教育音樂協會編

子供の舞踊

菊判洋裝美本
卷一、二各册
定價金六拾錢
送料各六錢

本書は幼年の兒童が興味をもつて舞踊し得る資料を輯録したもので、歌詞は「エホンシヤウカ」「新尋常小學唱歌」よりこれに適當したものを採擇した。編纂並に振付は、印牧季雄・澁井二夫・土川五郎・戸倉ハル・三浦ヒロ・宮寺嘉一（五十音順）の六先生を煩して成つたものである。幼稚園・小學校・各家庭に一本を推薦する。

内容一般 ユキ・ウサギ・ナミ・アサガホ・マリナゲ・サクラ・スナバホリマセウ・コヒノボリ・キンギョ・ナハト・ビ・ダルマサン・汽車ノタビ・オウマ・雨・ママゴト・サ、舟・ギツコン・バツタン・オヤスミ・オヒサマ・ネズミノ・モチヒキ・五一・ダイサン・ミヅアソビ・ヘイタイ・マメマキ・カケツコ・ボチ・タン・ポボ・ジドウシヤ・ピアノ・オニゴツコ・テフテフ・カヘル・ヒカウキ・十五ヤ・ヒヨコ・ブランコ・オサル・エンソク・チュウリツブ・ワタシノ・オウチ・ハナ・ハヤオキ・オツキサマ・人形ノ兵隊・ナシヨナルガードマーチ（以下略）

エホンシヤウカ

（新幼稚園唱歌） 春・夏・秋・冬ノ卷

各卷各册 金參拾五錢 送料金二錢

東京市神田區仲猿樂町三〇番地

發賣所

音樂教育書出版協會

電話 九段(33) 代表四二二六・四二二八
番號四二二七・四二二九
振替 東京六四七七〇

人生のスタートに於ける育児の常識と解決

奈良女子高等
師範學校教授

桑野久任先生著

菊判洋裝函入
紙數六〇〇頁

定價
送料

四圓五拾錢
二十二錢

最新刊

育児講話

父たる人、母たる人、教育者たる人の味讀すべき名著

第一章 育児及兒童

- 一、育兒の定義
- 二、育兒の必要
- 三、育兒の目的
- 四、育兒の方法
- 五、育兒の效果
- 六、育兒の責任
- 七、發育の時期
- 八、發育の諸人
- 九、兒童と成人
- 三〇、兒童は寶

第二章 胎兒

- 一、胎兒の形態と發育
- 二、胎兒の生理
- 三、妊娠の確證
- 四、妊娠の時
- 五、胎兒の養育
- 六、胎兒の胎動
- 七、胎兒の產科
- 八、多產
- 三、胎兒の誕生
- 一、誕生の前兆

第四章 乳兒

- 一、その豫定日
- 二、誕生の準備
- 三、誕生(外九節)
- 甲、乳兒の營養材料
- 乙、乳兒の身體
- 丙、乳兒の發育
- 丁、乳兒の死亡率
- 戊、乳兒の生理
- 己、乳兒の發育
- 庚、乳兒の身體
- 辛、乳兒の發育
- 壬、乳兒の身體
- 癸、乳兒の發育
- 甲、乳兒の身體
- 乙、乳兒の發育
- 丙、乳兒の身體
- 丁、乳兒の發育
- 戊、乳兒の身體
- 己、乳兒の發育
- 庚、乳兒の身體
- 辛、乳兒の發育
- 壬、乳兒の身體
- 癸、乳兒の發育

第五章 幼兒及少年

- 一、幼兒の身體
- 二、幼兒の發育
- 三、幼兒の形態及生理
- 四、幼兒の精神
- 五、幼兒の言語
- 六、幼兒の行動
- 七、幼兒の社會
- 八、幼兒の教育
- 九、幼兒の訓練
- 一〇、幼兒の娛樂
- 一一、幼兒の休息
- 一二、幼兒の睡眠
- 一三、幼兒の食料
- 一四、幼兒の衣服
- 一五、幼兒の衛生
- 一六、幼兒の安全
- 一七、幼兒の健康
- 一八、幼兒の幸福
- 一九、幼兒の未來
- 二〇、幼兒の希望

東京高等師範學校教授

廣井京太先生著

姿勢教育 (五版)

定價 三、一〇
送料 二〇

東京市神田區 目黒書店發行 振替 八〇 東京 九



の 兒 幼 卷 二 十 三 第

— (目 次) —

□ 繪

爆彈三勇士(お茶の水人形座)
各國人形

同志

幼兒保育と小學教育

保育上に於ける幼兒の自由に就いて

託兒所保姆の任務

觀察のさせ方(二)

幼稚園に於ける談話

人形に依る「おはなし」の演出に就て

「幼兒の教育」六月號を讀みて

幼兒詩の問題

世界人形行脚記(五)

夏の幼稚園

東京市昭和幼稚園

倉橋惣三……………(一)

淺黃俊次郎……………(二)

和田 實……………(八)

朝原梅一……………(三)

堀 七 藏……………(六)

新庄能子……………(二)

菊池ふじの……………(元)

大塚喜一……………(五)

多田鐵雄……………(毛)

高市次郎……………(空)

白根美智子……………(充)



教 育 第 八 ・ 九 號

日本大學附屬幼稚園の夏季學園

夏の兒童遊園地

「幼稚園の特技製作」に題す

傳説三ツ

夏休み後の保育衛生

九月の園庭

園藝年中行事

園藝曆（九月 長月）

遊戲―首ふり人形

童話

ミルクのおばちゃん

フットボール

人形芝居脚本

爆彈三勇士

金太郎

この夏

山田 仲子……………(三七)

末田 マス……………(三九)

倉橋 惣三……………(四一)

廣瀬 興……………(四六)

及川 ふみ……………(四八)

富本 光郎……………(五二)

大岩 金……………(五九)

土川 五郎……………(六三)

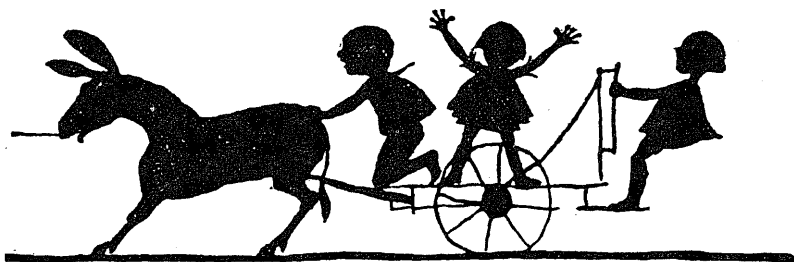
高島 巖……………(七〇)

水谷 年恵子……………(七二)

菊池 ふじの……………(七三)

青柳 節子……………(七三)

倉橋 惣三……………(七三)



育教の兒幼 輯編會協園稚幼本日

會長

東京女子高等師範學校長

吉岡郷甫

主幹

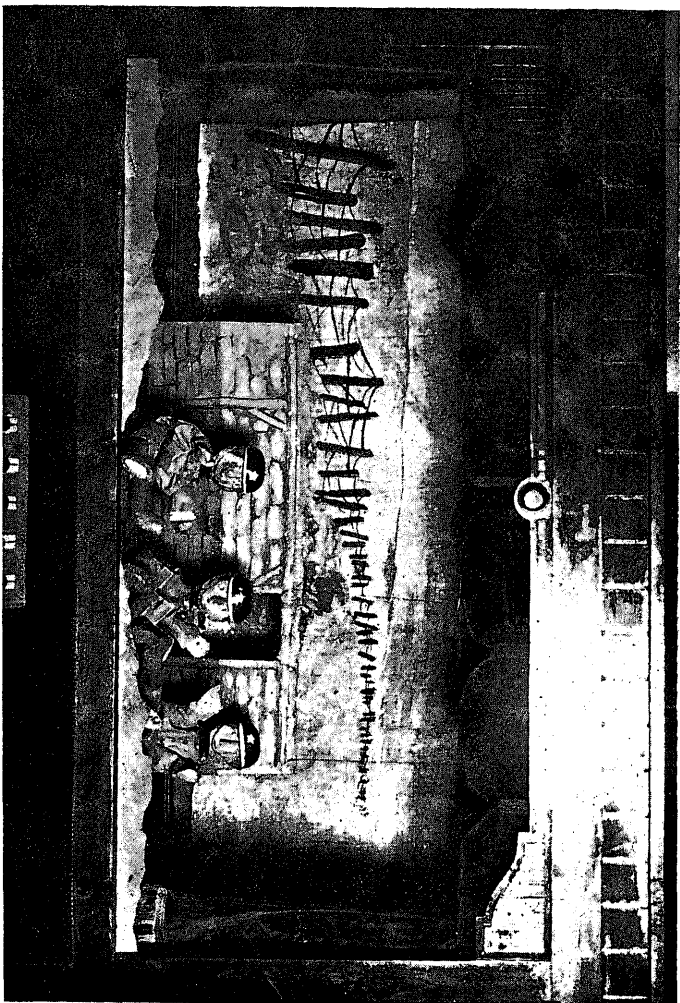
東京女子高等師範學校教授
附屬幼稚園主事

倉橋惣三

日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼児教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ケ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
- 一、幼児教育ニ關スル研究及ヒ調査
- 一、幼児教育ニ關スル講演會及ヒ講習會ノ開催

- 一、雜誌發行(毎月一回)
- 一、幼児教育ニ關スル圖書刊行
- 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
- 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 會長 一名 會務ヲ總理ス
- 主幹 一名 會長ヲ輔佐シテ會務ヲ掌理ス
- 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
- 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ケ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
- 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス



爆 彈 三 勇 士 (お茶の水の人形座)



、スレッドにトツネンボの目人二らか右目列二りゝ列上——明説眞寫
 等利太伊、逸獨、國米は他、形人西蘭佛の去過が形人ためはな套手
 。形人の國各の

幼 児 の 教 育

昭和七年九月

同 志

園は狭い。組の室は更に小さい。保姆室の机は、方何尺にすぎぬ。

しかも今、あなたと同じころを以て、幼き子らのために盡してゐる同志は、世に決して少なくない。訪れ交はして相語る近き友の他に、多分あなたの思ひよりぬ多くの同志が、西に東に、南に北に、同じ働きを働いてゐる。

あなたが、日々の保育に軽く疲れた時、日本の地圖をひろげて、どこでもいゝ指を置いて御覧なさい。そこにはすぐに同志の所在を見出すであらう。さらに、その指を右へでも左へでも動かして御覧なさい。それはすぐ、太い同志線を描き得るであらう。それが済んだら、又、その指をあなたの位置へ戻して御覧なさい。あなたの指さきに新しい力が籠つて、きつと何ものか強いものを感じずにはゐられまい。

相識り、相見る機會があつてもなくても、あなたは之等の同志と共に、天下に志を行ひつゝあるものである。殊に今日は、その同志の数が、恐らく今までに嘗て無かつた勢を以て、年々歳々増加してゐる。あなたは、その大勢裡に事を行ふてゐるのである。

秋高く天廣し、幼き子らの笑顔を中心として、同志は、あなたに力をあはせんとし、又、あなたの力を求めてゐる。

幼児保育と小學教育

東京女高師附屬小學校 淺 黄 俊 次 郎

は し が き

み空の虹を見る時に われの心はおどるなり

生れし初しかりき 成人^{ちやうど}し今日もなほ然り

老いての後もしかあらん さらずば生きて何かせん

子供は成人^{ひと}の父なれや われこそ願へわが世をば

おのづからなるつゝしみに 日ごとくを結びてん

大詩人ワーズワースのこの有名な短詩「虹」は、教育者として、又親としての私の愛誦禁じ得ないものです。幼な子が奇しき心もて虹を見て躍り喜ぶさまが、如何にも生命の根元であることを暗示して、子供心を最もよく謳つてゐます。

いつはりの世もまだしらぬ幼子は

心やきよきかぎりなるらん

兒童の禮讃、これに増すものがまたとありませうか。教育者ならざる 明治大帝と彼の詩人こそは、眞の大教育者でなくて何でありませう。私はこの大帝の一句の中に、又かの詩人の短句の中に、貴い／＼重大な意味を見出したのです。

この心こそは誠に我々が幼児、兒童に接して常に持合せたい心なのであります。

私は幼稚園保育の實際については、殆んど語るべき何程のことも持ち合せてゐません。しかし、小學校教育特に幼稚園と關係深い小學校の低學年教育の體驗から見ていさゝか幼稚園の保育について希望を持ち、又幼稚園保育の延長としての小學校低學年の教育を反省し、考慮し、主張し、改善すべき幾多の實際問題を持つてゐるのであります。

故にそれらの點に關する二三の事柄について、小學校と幼稚園の連絡といふ意味をも含めて、いさゝか申し述べて見たいと思ひます。

一、小學校低學年の新教育

私も卒先して、小學校低學年（一、二年）の教育法の革新を實驗し、大いに之を全國の教育界に提唱し指示してゐるのがありますが、全體的に見て、近年は小學校もこの低學年教育法の改善といふことが、最も眞剣に考へられるやうになつて來てゐるのであります。然らばどういふ目指して改善しやうとするのかといひますと、低學年兒童の身體及び心意によく合ひ、兒童の活動——生活の自然に合致する指導から、合自然的に育て上げなければならぬ、即ち生活を指導する教育法を執らなければいけないといふのであります。旺盛なる兒童の活動——生活の中で獲得した知識や技能であつてこそはじめてその兒童の身についたものになる、即ちその子の生活のため、成長のための眞の糧となるものであるといふことを次第に覺つて來たのです。

そこで改善された低學年教育法では、家庭の延長としての低學年教育法とか、幼稚園の延長としての低學年教育法といふことになつて來てゐるのです。これは非常に眞面目な教育態度であると私は考へます。子供の身體、心意、生活の發達の自然に合致する教育法を執つて以つて「人」に育て上げて行かうとするのです。で、入學早々から色々な知識を教へ込

んで、子供をびくつかせたり、偉がらせたりするやうな不自然な舊式教育法な捨て、幼稚園や家庭風の指導におりたわけです。

かうなつて來た指導精神の根本には、「神は接木や接芽をなし給ふことはない」し、「神はいと小さき不完全な物をも其の中にある自己發展の法則によつて、一步一步と間斷なく發達させ給ふ」のであるといふこと、或は「萬物は各々其の本質を發揮すべき運命を持つて居る。之を發揮するのが萬物の天職である。換言すれば其の有限なる存在の中に神なる統一者を現はすことが萬物の運命であり、またその天職である」といふやうな大教育フレーベルの思想も多分に存するのであります。

小學校低學年の教育が、かくの如く漸次兒童本位になり、幼稚園や家庭の保育に接近して行きつゝあることは、幼稚園保育があくまでもその使命に安住して、以つて保育の實を達成せられる上に非常によいことではないかと考へるのであります。

卒先實施してゐるわが女高師附屬小學校の低學年教育法も、次の如き要領を以つて、天下の小學校に提唱大いにこれ努めてゐるわけであります。

低學年教育ハ低學兒童ノ特殊性ニ立脚シテ其ノ生活ヲ指導シ、尊重シ、社會ヲ陶冶シテ、獨立ノ個人並ニ社會人タルノ素地ヲ養フヲ以テ要旨トス

生活ノ指導ハ合自然ノ方法ニヨリ、直觀ニ發スル一系列ノ活動ヲ輔導シ、以テ生活ノ總合的全體教育ヲ行フ。其ノ形式ハ遊戲及ヒ作業トシ、作業題材ハ兒童ノ生活環境内ニ於ケル自然ノ事物現象、文化的社會的ノ事物現象ヨリ採ル。遊戲題材ハ兒童ノ自發活動ヲ尊重シ、身心ノ發達ニ適合セシム。

全體教育ノ指導課題ハ次ノ如シ

(一) 直観 (二) 説話 (三) 作業 (四) 發表 (五) 遊戲

學級ハ之ヲ兒童ノ共働社會トラシメ、教室ハ之ヲ兒童ノ生活場所タルニ適セシム。

教師ハ始業ヨリ終業ニ至ルマテ絶エス兒童ト共ニ生活シ、共働ス。

學校生活ノ時間的區分ハ兒童ノ活動狀態ヲ考慮シ、其ノリズムニ適合セシム。

各教科ハ特ニ教科トシテハ取扱ハス。

二、幼稚園の立場と家庭及び小學校

小學校が舊式な一齊教授の自己便宜から、園兒に文字を覚えさせて貰つては困ると苦情を言ふとか。これは私の考へるに小學校の大なる心得違ひであります。お勘定や數の觀念、言葉や事物觀念については何等苦情を申さず、特に文字にだけに苦情を言ふのはわからない話です。尤も、幼稚園を小學校入學の準備場所の如くにし、力めて色々な知識を注入強制するとか、保育料徴收の手前、何か教へ込まなければ家庭が心もとないであらう、などゝ心得違ひして、まるで舊式小學校の如くに幼兒を机腰掛に縛りつけ勝ちな幼稚園があるとすれば、それは小學校の苦情どころか幼稚園そのものゝ保育がなつてゐないといふことになりませう。

しかし、今日の文化の進んだ家庭や都會に生活する幼兒は、片假名文字ぐらひは入學以前に生活として覚えて了ふのであります。幼兒の能力としても、言葉及文字の觀念は數觀念よりはずつと早く持ち得るのであります。生活の發達は全く環境に即する、言葉や文字は生活に即して覚え込まれる。で、文字を覚えるか覚えないかといふことは大部分その環境の

如何にあるのでありますから、能力としては殆んど問題がないのです。家庭で幼児を育てゝ見てさうです。一年生に入つて始めて、イロハのイから教へ込むべきだなどゝ考へてゐるのは、全く子供の能力の發達を識らない舊式な考へなのであります。

また、小學校としては、幼稚園をふんだ子供とふまない子供とを一緒に取扱ふのは困る、といふかも知れません。しかし、私共は殆んど困つてゐないのです。なぜなら、子供の眞の持ち前を發揮させて、その子供を活かすと共に他の子供に作用させて、クラスの子供の社會を高めて行くやうな教育法を執るからであります。

家庭によつては、未だに、幼稚園に入れた方がよいか入れない方が子供の爲かについて、疑ひ迷つてゐる向があります。「生意氣になり易い」とか、「子供が伸び／＼育たぬ」とかと心配されるらしい。いたづら盛り、ぢつとしてゐるのが何より苦しい時代の幼児ですから、何かを覚えさせようなどゝは餘り考へずに、大氣の中で心ゆくばかり毎日遊ばせ、叫ばせ、踊らせ、跳ねさせるのが本當ではないでせうか。教へるために仕組まれた遊戯といふものは、なか／＼子供の眞の活動にはなり得ないものです。子供同志の發案や思ひつきで活動する遊戯を主體にして、その中に入つて輔導して見守るといふ態度が本當ではないかと考へます。私どもの低學年の遊戯生活の指導も、大體さういふ態度を執つて居ります。何事も場所と物と機會に適應して活動するのが幼児、兒童の特殊性です。して見れば場所と物と機會を恵むこと、即ち環境の經營といふことが何より先決的な指導ではないか、と私は考へるのであります。

故に小學校の低學年としては、自發活動性に富んだ子供、創意に富んだ子供、仲間とよく遊べる子供が望ましいわけです。ヤンチャでも活動性に富んで、よく遊べる子供ほど、私は指導して仕甲斐があるのであります。

三、子供は足から

心と頭と手を一致させる教育法を、大教育者ベスタロツチが強く主張されましたが、幼児の保育については、私は心よりも、頭よりも、手よりも、先づ足を丈夫にすべきではないかと考へます。子供の足の發達をはからずには、殆んど身體の發達が望めません。なんで心と頭と手の發達をや、です。

足、足、足の發達が第一ではないでせうか。特に都會地の幼児には、どの點から考へて觀ましてもこの「先づ足！」でなくてはならないと信じます。この足を丈夫にすることは、心と頭と手とからだとをすく／＼と伸び茂らせる土臺であると信ずるのです、文明都會の生活は人間に足を忘れさせ、足の發達を奪ひました。土臺の弱い上に築く心と頭と手、それは見込みがありません。「可愛い兒に旅をさせろ」は心の鍛錬、「弱い兒に旅をさせろ」は健康の鍵だと思ひます。

足、足、足、足を丈夫にさせるやうな育児の着眼、私はあくまでこれを望んで止まないのです。私の恩師である某中学校長が、過日私に申されますには、「東京の幼稚園や小學校では、教育上、「なま土踏み場所」といふやうな特殊の設備が是非要るだらう」

とのことでした。そして

「子供がなま土も踏まないで、それでよく成長するかネ？」

との反問でした。誠にうがつた着眼であると思つた次第です。

「心身の健全なる發達は足から」といふ私の持論は、草露を踏み、なま土を踏んで足の發達が望ましいのですが、とにかく、幼児の保育上、特に健康の増進上、室内での心と頭と手の作業にも増して、一段と子供の足から丈夫にしてやるやうな方法が執られなければならないと考へるのであります。

保育上に於ける幼児の自由に就いて

目白幼稚園 和田 實

「幼児は自山でなければならぬ」と云ふ思想は保育上の通念として、現在では、凡ての保姆に因つて許されねばならぬことゝなつて居る様である。従つて、干涉するな、壓迫するな、強要するな、威喝するな、自力で立たしめよ、自由に遊ばせよ、訓練も自力的でなければならぬ。躾けも壓制してはならぬ。惡癖矯正も自力に俟たねばならぬ。農村振興も自力更生を必要とする如く幼児の活動も凡て自力に因つて自己發展をす可きである。と云ふことで、共同遊戯をして居るときでも嫌になればドシ／＼列を離れる、離れたかと思ふと、少し遊戯の興味多きを見て、また入る。入つて來て眞面目に遊戯をせず隣や前の子供にふざけたり、輪を亂したり、列を亂したりなどしても、之を制することなく、所謂、自由に放任して置く」と云ふのが、現在若い卒業したての保姆に多く見受ける通弊である。ヤンチャな子供がお代官的な横暴を振つて友達を苛めても、之を制するに權威を持つてすることが出来ない。従つて、一幼児のヤンチャンが他の幼児に感染して、組の統制は益々亂れて來て、まとまりがつかない。何か命令したいことがあつても、「僕、嫌！」と宣言されては最早手も足も出せないで、夫れなり有邪無邪にしてもう。新に、良習慣を作ることにも出来なければ、決して不良な習慣を矯正することなど思ひもよらぬと云ふ様なことが、經驗淺き保姆さん方に往々にして見られる現在である。困つたものである。先日某視學、殊に、幼稚園教育に注意して居られる某視學の云はれたのには、「近頃の若い保姆は唯、徒に理想を直に實行しやうとして、現在、預つて居る子供と理想の子供との相異點に頓着しないから、従つて、子供の管理と云ふものが無茶苦茶で、統制するところがない。子供と保姆との間も、相互的に依後信賴と云ふ様な様子はなく、子供は、唯、刹那

的な衝動的動作に逐はれて、暴ばれ廻る中で、頓と兩者間に教育的關係を思はする様な活動がない」と云つて居られたが誠に穿つた批評だと思つた。現在預つて居る子供は理想の子供ではない。色々の缺點もあれば惡癖もある。過去の教育の缺陷もあれば性來の短所も暴露して居る。是等の子供を預つて、是等の缺陷を矯めると同時に其長所を發見して之を伸ばすことも考へて遣らねばならぬ。是が保育者の責任であり、仕事であらねばならぬ。従つて、保姆が保姆としての修養を積む際には、斯る實際に即した保育の方法を研究し、修養して置かねばならぬ筈であるが、現在の保姆養成所に於ける保姆の養成方法が、何うも之に副はぬ憾みがあるのではあるまいか。即ち、保育法其ものが、理想的な子供を理想的な状態にのみ置いて考へた所の理想的保育法で、實際の子供を無視した架空的た保育法を教ゆるの弊があるのではあるまいか、是が、吾人が、現在の保姆養成に對する缺陷の一つと考へる所のものである。本誌七月號の保姆養成に關する意見中にも明かに、二三の方が之を指摘して居られる所を見ても、確かに之は一般保姆養成上の缺陷に相違ない。

元來、幼兒の活動上に於ける「自由」は其遊戲的活動に屬する範圍に限らる可きもので、訓練上の問題に對しては自ら別種の問題たらざるを得ないのであるが、此處の限界なり區別なりを明かに會得して居る人の少ないのが斯る混雜を來した原因ではあるまいか。然して、此區別なり限界なりを明瞭に教へないのは明かに保育法教授其のものゝ不完全を意味するものと云はねばならぬ。保姆養成に従事するものゝ、大に努力しなければならぬ所として、吾人は前號の寄稿家諸君に感謝する次第である。吾人も、日々、多數の保姆を養成しつゝあるので、爾今、此點には大に注意する續りであるが、新進の保姆諸君も、徒に空想にのみ憧がれないで、眼前の實際に直面して、適切な方法如何と云ふことを研究されんことを希望する次第である。

訓練上の問題としては何故自由を尊重することが出来ないかと云ふことは訓練の目的を考察することに因つて理解出来なければならぬ。何故と云ふに、本來、文化生活其のものは決して、野生其儘ではない。否、寧ろ、文化的行動を採らし

むる爲めの躾け方と云ふものは、子供本來の野生的行動を種々なる文化形式に規制して始めて成立するものである。然して、此規制即ち躾け方は決して子供の自然の行動中に自然に成立するものではなくて、用意周到なる保育者の誘導に因つて漸く成立するものであるから、巧妙にして熟練せる幼児教育者に因つて躾けられたる子供は、何等の苦痛も壓迫も感ずることなしに、何時の間にやら、優良なる躾方を経て、理想の子供となることが出来るでせうが、凡ての幼児教育者が皆斯る優良教育者であり得ないばかりか、家庭に於ける母親としては、時には全然、育児、保育の知識に缺如して居るものがないとは云はれませんから、其躾けの方法には、随分無理もありませう。従つて、躾け方に關する限りに於ては全然自由にのみすることは出来ない筈であります。そんな無理な躾け方はしなないがよいと云ふ人もあるかも知れませんが、夫れでは教育の目的を部分的に放棄することになるので、議論になりません。況して、家庭教育が不完全で、幾多缺點を持つて、幼稚園に初めて入つて来る數多の幼児を取扱はねばならぬ幼稚園の先生としては、ヘルバルトではないが如何にして是等野生に等しき幼児を管理して、如何にして其陶冶性を發揮せしむ可きか即ち、幼児をして教育され得る最良の狀態に在らしむる爲めには先づ之を如何に管理したらよいかと云ふことが、當面の最大急務でなければならぬ筈であります。是が新入園児を始めて受取つた保姆の最初の活動であつて、保育法實行の第一段階と云つても差支ないものでせう。新進の保姆諸君は果して、之に就いて何んな用意がありますか、養成所に於ける保育法の講議中の何處に是等の論議がありましたか。保育法のノートの再検査を必要とします。

理想的方法としての訓練には勿論、自由な自力發展を目標として居るには相違ありませんが、既に、不良な狀態に陥つて居る子供ありしたら、之を他の子供に悪い影響あらしめぬ爲めに、又其子供の將來を矯正する爲めの準備としても先づ、之を適當に取締る必要があります。其爲めには必ずしも子供の自由のみを尊重して居る譯には行きません。此場合に於ては保姆は充分其威嚴を示して、嚴格に命令を出さなければなりません。故に、事件が訓練に關する限りは必ずしも

子供の自由のみを尊重する譯には参りません。此處の道理が理解できたら何處迄が自由な遊戲の範圍であり、何處からは躰け方として見なければならぬかと云ふことが自然明瞭となるのではないかと思はれます。

既に、不良の状態に陥つて居る子供に對しては、先づ之を取締つて、其不良の状態を暴露させずに置くことが必要です。此爲めには教育者の威嚴を以て、其非違を遂げしめぬ様、又は強制的にも他の子供同様一定の規制に従はしむることが必要であります。子供の聞き譯がなくて、我儘無理に押し通す子供が時にはあるとしても斯る状態を何時迄も續けさせて居ては保母としての役目は果せぬ次第であります。之を適當に誘導して速かに聞き譯のある子供たらしめねばなりません。

遊戲中に列を亂したり、ふざけたりするのも、明に訓練上の問題で、遊戲上の問題ではありません。従つて是等不眞面目な子供に對しては相當な制裁があつて然る可きであります。況して、友達を苛めたり、保育者の命令を輕んじたりする様な不良状態に對しては嚴格な威嚴の本に教權の確立を期すると共に、更に、根本的に之を矯正する方法を考究す可きであります。

數十人の子供を一人で世話して居ると云ふことは、所謂、手落即ち不行屆の點が出来ることは止むを得ないことですが是が困難の問題を起す原因であると云ふことは是非もないことであります。「若い保母は管理が下手だ」と云はれるのも此點が大にあると思ひます。殊に、スローモーションな吾々は多數の子供中に取締る可き子供のあることに氣付きながら其機を逸して、訓練の機會を逃がして仕舞ふことも、往々にしてあります。是は全く保母の技量の未熟を證するもので、實習不足、經驗不足を物語るものとして認識しなければなりません。是等技量上の未熟は一々經驗に因つて練磨しなければなりませんから、新進の保母諸君は一日も早く實習することを心掛く可きであります。

次に、遊戲上の自由にしても、其意義は幼兒の發達程度に因つては、形式的に決して、一樣ではありません。一二歳の

嬰兒にあつては、其遊戲は極めて衝動的で、刹那的欲望に連れて變化の流れが刻々に變つて行きますが、三四歳となれば幾分其變化が少くなり、一つ遊戲に對して可なり長い注意を集中することが出來ますし、五六歳ともなれば時には大人の勘え兼ねる長い時間をも一定の遊戲に夢中となり、所謂、遊戲三昧に入ることゝ出來るのであります。斯る状態となつた時の自由は非常な尊さを持つて居るものではありませんが、原始期の衝動的遊戲時代の行動には然したる自由の價值はありません。是等は一に幼兒の發達程度に關係することゝ、一概に形式的に論斷する譯には行きません。即ち、自由な遊戲の中にも價值あるものと價值のないものがある譯であります。従つて、價值のない自由なら、保育者の都合に因つて之を干渉し、中止せしめた處で、何等の損害もない譯で、斯る無價值な自由を尊重する謂は無い筈であります。然らば如何なる状態にあるときが最も價值のある時かと云へば、夫れは幼兒の主觀的興味如何にあります。即ち、幼兒の興味が其遊戲に於て最も高潮して居るときが、最も自由の價值のあるときであります。換言すれば遊戲上に於ける幼兒の自由は興味と共に存在しなければならぬと云ふことであります。是が即ち遊戲の性質として自由と興味を認められる次第であります。

託兒所保母の任務

朝 原 梅 一

一
託兒所の保育の普通考へられて居る幼稚園の保育と違つて居る主なる點を二三あげますなら、(1)保育の時間が長いこと、(2)幼兒の家庭が勤勞階級であること、(3)幼兒は他の幼稚園の幼兒の様に訓練されて居ないこと、(4)幼兒の年齢が不揃ひであること、(5)保育料は幼稚園よりも安くて、三錢乃至五錢等の日納であつてその徴收に骨が折れること、(6)託兒所では幼兒の保育のみならず、その家庭生活をも向上させる様に家庭の人達を導かねばならぬことなどを數へることが出來ます。

この様に幼稚園保育と異つた事柄を擧げたのを見たばかりでも、氣の弱い保母さんは、もう託兒所の保母になるのは御免蒙ると考へられるでありませうが、全くその通りでありまして、而も多くの託兒所は官公立は別として私設事業になりますと俸給が安いのであります。だから本當に託兒所の保母になるには一大決心が必要であり、またそれに従事されて居る方に對しては敬意を拂はなければなりません。設立者(經營者)は此邊を好く察してこの様に長い時間を保育するに保母さんが疲勞を感じない様に、幼兒が退屈しない様に、こうした保育に必要な設備をされる様に常に奨勵をして居るのであります。それも經費不足の點から思ふ様に出來ないのが實際の傾向であります。この傾向を充分に存じて居りながら託兒所の保母の任務をこゝに陳べるのは如何にも氣の毒な氣持がいたしますが、託兒所經營の方針に立脚いたしました其理想を二三申し上げることを許して戴きます。

託児所の保育と普通幼稚園の保育と共通な點も澤山あります、例へて申しますと、(1)保育過程表及保育案の作製で保育も一種の教育である以上、常に今年はどうな保育をして幼児の欲求を満足させやうと、しかとした保育の具案がなければならぬと思ひます。その具案を幼児の生活に應じて適應することが必要でありまして、平素からこの準備が出来て居なければ適切な保育も出来ないことになります。(2)日課表及日誌も保育いたしました過去を反省して、その結果を判斷するために必要であります、(3)幼児の個性觀察若くは生活記録も、之を作る必要があります。特に將來個別指導を要する様な幼児に就ては小學校聯絡を取る必要もあります。(4)託児所の幼児の入退所は甚だ頻繁でありますからこれも出缺及修了等と共に保母さんが之を好く記録しなければならぬことであります、(5)託児所が保育時間の長いのを活用して國民の生活の過去及現在を如實に知らせるために、一ケ年を通じて宮中及一般國民の諸儀式及年中行事を研究して之を保育の資料にすること、(6)託児の幼児には好く有り勝ちなのは眼病及皮膚病等でありまして、特に保健衛生に注意しなければなりませんから定期的に又随時に幼児の身體及精神の検査をして、その記録を作ること、(7)幼児を長い時間を面白く遊ばせるために種々な保育用具が必要でありますが、それを好く管理いたしませんと大切な品でも一たまりもなく破壊して終ひますから、これに氣をつけて小破の時に修理すること、(8)滑臺や、鞆フットボールなども好く日課の様に毎朝注意しないとその破損した部分を氣付かぬために幼児が思はぬ怪我をすることがあり、砂場の砂も固つて、補砂するか之を掘りかやすかしないと砂庭の用をなさぬことがあります、(9)保育所を美しくするために、また觀察資料を豊富にするために園内に植物が必要であります、これも、好く蟲を採るとか、水と與へるとか、壤れんとする枝を助けてやるとか不用な枝を拂ふ等は幼稚園にも共通な保母の任務であります。

更に託児所の保母に特有なる任務を挙げますなら、託児所に來る家庭はその地區に依りますと、(1) 規律的な生活に馴らされて居らぬ家庭が多くて、父母が勞働に出るため早朝連れられて來る幼児は別として、他の多くの幼児は時間が不規則に流れ易い傾きがあります、それに保母さんなどが遠方から通勤などなされる様な場合には殊に時間の觀念が保母さんも、幼児も共に不規則になり勝ちでありまして、時によると少數な幼児は最初は小使さんに保育される様なこともあります。こゝで序ながら申し上げて置きますが、保育は幼児が來所すれば初まる譯でありますが、多くの家庭も、甚だしいのは保母さんまでが、「先生お早やう、皆さんお早やう……」の式があつて始めて保育が開始される様に考へたり、團體保育が本當の保育だと誤解して自由遊びなどを大切な保育と考へない誤つた傾向も稀れにはありますが、これは根本から考へ直さなければなりません、この點から通勤のみの託児所では當番でも定めて、一人の保母さんが早出をするとか、またそこに保母が宿直するとか云ふことが託児所の保育を規律的にならしめる必要であります。(2) 託児所の家庭の性質上から朝早く連れて來て、夕方遅く連れて歸られる幼児もありますが、それが各々ちぐはぐにならざるを得ない家庭の事情もありますから、時には冬分などは保育室の温たまらない前に寒さうに、また淋しさうに多くの友達を待つて居る幼児もありますれば、また夕方方には、大部分の幼児が楽しく歸つて行くのに淋しく遅くまで遣らなければならぬ少數の幼児もあります、夕方などは朝とは違つて、成人でも淋しくなり、また一日の疲勞も覺える時でありますから、多くの友人に遣されて置かれる幼児は本當に淋しさうであります。こうした幼児を心から楽しませてやる慈愛心を働かせなければなりません。(3) 託児所が本當の機能を働かせるなら、貧困な家庭、夫婦共稼の幼児が多く託されることとなります。かうした家庭の幼児の衣服等は中流以上の家庭の幼児を対象として居る幼稚園の幼児と比較の出来ない程、粗末で、洗濯が行き届きません、時には託児場の備品と着更へさせて、洗濯してやる程の親切がなければなりません。(4) 託児所は保育の時間が長い爲に、おやつを與へますが、それも機械的な考への保母さんなら、おきまりの御菓子や商店に注文して持つて來させればそれでも済みま

すが、それが私設團體の經營を助ける意味から、出来るだけ經濟的な見地から二錢要するものなら之を一錢使用してさせる様にしておか、而もそれが榮養價は反つて多くて幼児は喜ぶと云ふ點にまで注意しておやつを給する等は意ある託兒所の保母さんは考へるのであります。

四

以上の様に申し上げますと、何もかも家庭の母のすべき仕事を保母さんが總て母に代つてなし遂げる様に考へられるかも知れませんが、それは本當の理想でありまして實際はそこまで行きませんが、かうして母に注意を促すことに依りまして行くゆゑは母親が自覺して洗濯の如きことは、家庭の母をして自然に「なさしめる」様に補導することが、本當の目的であります。既に申しあげました様に、託兒所保育の目的は幼児を立派に保育する外に幼児の家庭の生活を向上發展せしめるにあるのでありますから、多くのお母さん達は保母さんの指導に従つて、(1)これまでパンツをはかずに通つて居た幼児にこれをはかせるために簡単に作ることを母親に教へて、之を作らせて幼児に用ひさせるとか、幼児向きの簡單服を作ることを教へるとか、或は(2)榮養價の充分ある料理を教へて、その家庭の榮養狀態を改める様に研究心を増させるとか(3)乳兒があればその正しい育て方を教へるとか云ふ様なことは、託兒所保母が怠つてはならぬ務めの一つであります。けれども多くの託兒所の保母さんは未婚の方もあり、育兒に經驗のない方もあり、またそうした研究の足りない方もあることでありまして、これを一般的に左様にされる様に強制することは出来ませんが、(4)それ等の必要を充分に認めて、自分が出来なければ他のその道の識者に依頼して、自分と幼児のお母さん達と一所になつて共に研究して行くだけの熱意がなければならぬのであります。

五

託兒所特有の目的を實現いたしますには、保母さんの絶えざる努力に依りまして託された幼児を保育する上に幼児の家

庭の母を指導訓練することにあるのであつて、これを缺いた保育は、唯保育事業所に來て居る間幼児を守り育てると云ふに過ぎないのでありまして、眞の意味に於ける保育は、幼児の生活に於ける家庭の缺陷をも補はなければなりませんからそれがためには家庭のお母さんにまで勢力を延さなければならぬのでありまして、家庭のお母さん達を保姆さんの意のまゝに働かせることの出来る保姆さんが始めて、幼児保育に云ふ所の家庭の缺陷を補ひ得る働きのある保姆としての資格があると云ふことが出来る様に思はれます。かうした目的を實現するには、託兒所に通ふ幼児の家庭は、中流以上の知識階級のお母さん達よりも、純朴であり、まして、保姆さんの心からの親切には心から従順であるので案外仕事の爲し易い點もあります。それでありまして、多年託兒所の保姆を務めた方が轉任でもされる際にはお母さん達が、心から別れを惜まれて保姆さんは去るに忍びない様な狀況が往々あるのであります。今一つ保姆さんが家庭の母さん達に働きかけて居るかどうかを知ることの出来るのは、母の會であります、既に申しました様に、保姆さん達の意志がお母さん達に通じて居れば、その保姆さん達の意のまゝにお母さん達を母の會に引き出すことが出来ます。それなのに、如何にしてなりとも之を引き出したいと努めても、それが得られないと云ふのは何處かに努力のたらぬ所があるか、又は何か無理な所があるかであります。時に依ると平素の會で司會の仕方が悪るかつたり、講師の撰擇が適切を缺いたりしたために乳兒を携帯して居るのに時が意外に長過ぎたとか、時刻の撰び方を誤るとか種々な原因もありませうが、かうした會に對しましては何より保姆さんが家庭に理解されて居ることが大切なことでありまして、理解さへあれば少々の誤りは打消されて終ふのであります。尙此外にも託兒所保姆の任務もありませうが、今回はこゝらで筆を止めて置くことにいたします。

(昭和七、八、一七)

觀察のさせ方(一)

東京女高師附小主事 堀

七 藏

一、はしがき

昭和七年七月下旬文部省主催保育に關する夏季講習會が東京女子高等師範學校に於て開催せられたとき、一講師として講演した事項を主とし茲に稿を改めて讀者の參考に供することにいたします。雜誌「幼兒の教育」の編輯主任に對し再三固辭したのであるが、強いての注文であるため止むなく筆をとることにしたものであります。従つて講習會に於ける講演その儘ではなく、新に原稿を書いて愚見を發表するものであります。この點豫め御諒解下さることを希望いたします。

二、統覺の發達

先づ觀察のさせ方を説明するに當り、茲に統覺の發達につき一應諸君の御諒解を願つて置かねばなりません。兒童心理學者は統覺の發達につき次の如き階段があると申します。吾人人類は感覺器の働きによりて知覺するものであるが、單純なる知覺のみの時代は至極幼稚な時代で、時間でも空間でもいろいろの知覺が同時に行はれるものであります。單純なる知覺でなく、いろいろの知覺が同時に總合的に行はれていろいろの觀察をなすもので、このとき統覺といふのであります。それで吾人の事物を觀察するときには常に統覺作用が行はれるものであります。この統覺が年齢によつて發達の程度に相違があることは明白であります。その第一が個物期で、七歳以下の兒童の統覺はこれであり、繪畫中の孤立した物又は人物のみを觀察し、或は實

際孤立せざるものも觀察の際分離して個々別々に統覺するものであります。この時期の幼兒は幼稚園時代から尋常小學校第一學年時代のもので、専らこの個物期の統覺をなすのであります。この時代の兒童は事物を個々別々に分離して觀察するものであることを記憶せねばなりません。

第二は活動期であります。兒童が八歳頃に至れば、人物の活動、事物の作用に着眼し、多くの事柄中よりこれ等を選擇して觀察するものであります。動いてゐる人や動物によく注意し、活動する部分や變化する事物に注意をむけてよく觀察するのがこの時代の特色であります、小學校の二三年頃の兒童は専らこの時期であるといふのであります。活動期にある兒童は専ら事物の活動方面をよく觀察するものであるが、更に進んで

第三の關係期に入ると、事物の關係に留意して觀察するやうになります。兒童が十歳頃に達すれば事物の時間、空間及因果の關係に留意し、觀察物を總括的に把握せんとするものであります。この時期にならぬと眞に理科を學習することが出来ないものであるから、小學校で第四學年より

理科を課することに規定してゐるのは相當な理由があつてのことです。幼稚園では勿論理科を課するのではなく、單に觀察、しかも所謂直觀をなさしめることを主とするものであることをよく承知せねばなりません。十歳頃にならぬと事物の時間的關係、空間的な關係を明白に觀察することが出来ないものであります。殊に事物の因果關係になるとこの第三期の關係期に達しないと充分把握することが出来ないものであることに着眼せねばなりません。それで六ヶしい理窟を幼稚園の保育項目「觀察」に於て説明するなどは以ての外であります。幼稚園令施行規則第一條に於て特に

幼兒ノ保育ハ其ノ心身發達ノ程度ニ副ハシムベク其ノ會得シ難キ事項ヲ授ケ又ハ過度ノ業ヲ爲サシムルコトヲ得ス

とある點を熟讀玩味せねばなりません。まだ個物期にある幼兒を保育するに關係期にある兒童でなくば會得し難き事項を授けるが如きことは以ての外でありませう。況んや第四の性質期にある兒童でなくば明白でないやうな取扱を

してはなりません。兒童が十三歳頃に至れば事物の性質+分析して觀察するに至るもので、この時代を性質期といふのであります。性質期に達して眞に理科を學習し得るに至ることは勿論であります。

第五が情趣期であります。青年に至れば新なる感情が湧起し、事物の情趣的方面に留意するものであります。

この統覺の發達に於て、滿二歳より幼稚園小學校一年位までが専ら個物期であります。小學校二年より四年までは主として活動期、五年より高等科第一學年までは關係期及性質期であり高等第二學年又は中學二三年頃より情趣期に入るものであります。

三、發達の實例

以上統覺の發達を見るために、私は東京女子高等師範學校附屬小學校兒童について検査した結果を具體的に朗讀して參考に供することにいたします。この調査は尋一より高等科第二學年までの男女兒各々二人、一學年四人につき同一の繪を一分間注視せしめた後、その繪をとり除き今觀察

した結果を文章を以て表出せしめたのであります。注意してこの結果を検すると各學年四人共、それ〴〵異なるは勿論であるが兒童の發達による相違、更に男女による特色等いろ〴〵誠に面白い點があります。しかし茲には時間の節約上各學年男女二人づゝの文章を列舉してその比較對照をなす資料とすることにいたしませう。

先づこの繪であるが、これを一分間熟視せしめて後記述せしめた文章を尋一から列舉いたしませう。どんなに變化するか、注意して比較せられることが肝要でありませう。

一年 女 内 村

ブタガナニカタベティマス。オデヨウサンガ フクリシ
ティティマス。ウチガアリマス、シロイクモガアリマス。

一年 男 高 間

ブタガエサヲタベテキマス。コドモガミテキマス。オト
ナガブタニエサヲヤツティマス。

第一學年の兒童でも個物期でなく、多少關係的に統覺してゐることが分りませう。

二年 女 五十嵐

ぶたが三びきゐます。

おちさんがぶたにおからみたいなのをやつてゐます。

ぶたのあしのところになつばが五六まいおいてあります。

へいのそとから子どもが二人のぞいゐます。

むかうの山のそばにあをあをとしたくもが出てゐます。

二年 男 樺 島

へいの中にぶたが三びきゐます。ぶたのおちさんがゑさをやつてゐます。

そらがうつくしいです。子どもが二人ゐます。そのそばにこやがあります。

二年になると餘程活動期に入つてゐることがよく分りませう。空間的な關係をつけて統覺してゐることが明白であります。

三年 男 海 老 原

ぶたが三匹ゐます。おちさんがゑさをやりにきました。

男の子と女の子がこれを見にきました。お天きのよい日です。ぶたがおちさんのそばによつてきました。

三年 女 川 崎

ある日、お父様がぶたにゑさをやつてゐると、男の子と

女の子が見てゐます。ぶたは足の所になつばがあるのにふんでたべてゐません。ぶたは三匹ゐます。黒とあかみなのがまぎつてゐます。ふつうのぶたとちがひます。

かく三年の兒童は活動期に明白に入つて居り、しかも著しく關係や性質に注意して統覺してゐることが分りませう。

四年 男 德 富

あるまきばにぶたをかつてゐて、今ちやうどおひるなので、ぶたにたべ物をもち主がやつてゐます。そのよこに子供が一しんにたべ物をやつてゐるのを見てゐます。

四年 女 海 田

ぶたが三匹ゑさをたべてゐて、ぶたのしつばはまるまつてゐます。ぶたの足元には葉が五六枚落ちてゐて、そのまはりのかき根がしてあつて、かきねの外からぶた使がゑさをやつてゐます。かきねの外に二人の子供が通つてゐます。ぶたごやの前にこはれた家が一軒たつてゐて、空には白い雲がかつこうよくかゝつてゐます。

第四學年になると關係的に統覺してゐるのは勿論、性質をも相當によく注意して觀察してゐることが明白でありませう。「これはれた家」「白い雲がかつこうよく」などはその表れであります。

五年男 近藤

いなかのまづしい一けんの家のうらで、きで作つたさくがあり、さくの中に又えさを入れる木の箱の様な物がおいてあつた。其のさくに豚が三匹はなつてあつた。空には雲があつた。雲のすきから青空が見えて、向ふにおかがありその下のところ、つまりいなかの家の横に川があつた。そのいなかの家はすいぶん古いようだがはげて中のれんが見えてゐた。その家の主人だらう。ぶた小屋にあるえさ箱へバケツでえさを入れてゐて、そのえさを入れた人は赤いきものをきてゐた、そのそばで男の子と女の子が豚を見てゐて、男の子は赤い着物を着て、女の子は黄色の着物をきてゐた。

いなかの家の横、川のそばに高い木がありました。かつてある豚は黒くだんだらになつてゐて、しつぽがみぢかく

まるまつていた。

五年女 廣瀬

かこひの中に黒とき色のまだらのぶたが二匹、とき色のぶたが一匹居ります。三匹のぶたとも皆しつぽをまいてゐます。後足の所には青い葉が五六枚落ちて居ります。西洋人の二十歳の小父さんがバケツに白いえさを持つて來てぶたにやつて居ります。白いえさは何でしやう。おいしいのでしやうか。

ぶたどもはおいしさうに食べて居ります。その様子を見てゐるのは白いぼう子に黒いすじの入つたぼうしをかぶつてゐる十さい位の西洋人の男の子と白いぼう子に赤いすじの入つてゐるぼう子をかぶつた八歳位の西洋人の女の子です。二人の後には屋根は茶色のかはらで出來てゐる家があります。その家は壁が少し落ちてゐます。家のよこには青々とした木が生へてゐます。何の木でせう。空は白い雲が出てゐます。けれども雲と雲の間は青く美しく見えます。遠くの方はうすい緑でおほはれてとても美しいです。

五年になると大人もはだしといふ位に立派に觀察してゐ

ます。そしてところ／＼情趣期に入りかけてゐる點があります。

六年男 六道

豚小屋の所の情景である。

豚が二三匹居る。その豚の持主らしい人が豚に餌をやつてゐる。いかにも重さうに餌の入つてゐるバケツを持上げて豚小屋の隅の方へぶちまけてゐる。

豚が早速よつて來た。皆頭を下げてそれを食べてゐる。いかにもうまさうだ。丸いころ／＼に肥つた頭を一つところへあつめてうまさうに食べてゐる。

向ふの方には男と女の子が面白さうに目を大きく見張つて見てゐる。二人ともとても、ゆくわいさうだ。前にある家はれんぐわがところ／＼はげてきたない。豚はえんりよなしにがつ／＼食つてゐる。いかにものどかだ、太つたまゝ／＼とした足は下にある菜つ葉をふみつけてゐるし、尻尾はくる／＼とまるめたりのばしたりしてゐる。
ほんとうにのどかな田舎の風景だ。

六年女 永井

此處は豚小屋である。柵の向ふから若い男が豚に何かやつてゐる。赤いシャツを着て茶色いズボンをはいたいでたちは如何にも元氣さうに見える。

其の左手には女の子と男の子が二人立つて一心に豚を眺めてゐる。二人とも兄妹らしい。女の子は黄色い可愛い洋服を着てお兄さんらしい人は赤い洋服を着てゐる。仲が良ささうな兄妹だ。

豚小屋には豚が三匹ゐて男の人のくれる食物をしきりにあさつてゐるやうだ。可愛い顔、可愛い耳、可愛いクルツとまいた輪のやうな尻尾、私は豚がすきである。一等可愛いのは顔で、愛嬌味たつぷりである。所々が汚れてゐて、豚そのものゝ感じを起させる。

青空が白雲の切れ目から顔を出してのぞいてゐる晴々とした氣持のよい日だ。

豚の食ひちらしたらしい緑色の菜つ葉が三つ四つころがつてゐる。「兄さん可愛い豚ね」とでも言つてゐる様に見える。妹は帽子のかげから金髪をちら／＼と見せてゐる。兄さんはそれに答へるかの様な顔をしてまた豚を見續けて

ゐる。

六年になれば正に情趣期に入つてゐて、大人も及ばぬ位によく觀察せられてゐることが明白に表現せられてゐるではありませんか。

高 一 女 藤 田

廣い牧場らしくて空はあくまですみきつてゐて、白雲がいう／＼と遊びでゐる。その青い空の下では木でかこつてある中に豚が三匹細い尾を丸めてゐる。その豚に赤いシャツを着たおちさんが相當に深いバケツをさかさにして食物をやつてゐます。そのおちさんの右側には赤い洋服を着て白い帽子をかぶつた子供と黄色い洋服を着て白い帽子をかぶつた子供が仲よく豚がえを食べる様子を見て居ります。

豚のゐるちよつと後にはオヤツにして下さいとばかりに青々とした菜が勢よく葉を廣げて豚の食べるのを歓迎して居ります。

空では此の光景を見て笑つて居ります。

高 一 女 阿 部

空は青く晴れて白雲が浮いて居ります。廣い原に家が立つて居ります。豚が三匹居て其の豚に男の大人が餌をやつて居ります。豚はそれをたべてゐます。垣根があります。その向に少年と少女がゐます。其の餌をやつた男の人も垣の外に居ります。

豚のゐるそばには青い草が少し生えて居ります。家は茶色で二棟になつて居ります。少年も少女も帽子をかぶつて居ります。少女は赤い洋服を着て居ました。少年は水色の洋服を着て居ました。少年はお兄さんです。

高等は補缺入學した兒童でありますから綴方が優良ではありませんから六年の方よりも、よい譯ではありません。しかし左程進歩してゐるものでないことが分ります。

高 二 女 林

或家にぶたがかつてあつてその家の主人らしい人がえさをやつてゐる。その近所の子供がそのえさをやるのをまじめに見てゐる。一人は女の子で一人は男の子だ。二人とも非常に仲がよささうだ。この家は非常に静かな家で、まは

りは野原ですぐそばに川が流れてゐて、家の後に數本の木が生えてゐるやうだ。はるか向ふに山が連つて見える。この日は大さうお天氣がよく皆樂しくくらしてゐるやうだ。

ぶたも家の主人に大そうかはいがられて、えさなどくれる時はとても主人のそばへよつて来る。ぶたはえさをもらったものですから喜んでたべてゐる。

高 二 女 佐々木

茶色い柵のまはりも底も何もかも茶色い物の中に豚が二匹ゐます。その豚は體の所にへんな色の跡があります。豚の入つてゐる柵のそばに子供が二人と大人の男の人が一人居ます。子供の左側にゐる子は黄色いお洋服を着て白い所に赤いリボンがついてゐるお帽子を被つて居ります。その子のすぐ右隣に眞赤な可愛いお洋服を着た子が白い地の帽子に黒いほそいリボンのついてゐる帽子を被つてゐます。

二人は女の子の様です。二人共豚の入つてゐる柵の中をのぞき込むやうにして少し柵の上に上つて見て居ります。二人の子供のすぐそば(右隣)にはやはり白い地に黒いリボンのついた男の大人の人がバケツの様な物の中に何か入れて

豚にやつて居ります。その柵の向ふには家が建つてゐて、家の屋根のすぐ下には變な色のものにおほはれてゐて見えます。家のすぐ右側に緑色の木が立つて居ます。空は水色に晴れた所に、所々白い雲が浮いて居ます。のどかな日です。

x x x

以上の尋常小學第一學年から高等科第二學年までの發表を比較して見ると個人によりて異なることは勿論であります。が個物期から活動期に進み更に關係期性質期に入り最後には情趣期となることが明白に分りませう。尙ほ他に三種の繪について同様にして發表させたのであります。それを各學年一點宛列舉することにいたしませう。

四、統覺發達の實例

この繪は米國の小學校讀本用の挿繪であります。朝になつたので母親がその子を起すところでありますが兒童によつてこの繪の觀察が著しく異なる點が面白いのであります。簡單な繪でありますので兒童がその境遇經驗からして同一

の繪もその意味が著しく異つて統覺せられることが明白に分るので誠に面白いのであります。

一 年 男 イヒモト

アカンボガベツトデネテイマス。オネイサンガマドオアケテイマス。マドカラオヒサマガヒカツテイマス。

二 年 女 小宮山

朝日が出てゐます。

かわいいあかちやんがすやすやとねむつてゐます。

ひだりにお母さんがまどをあけてゐます。

三 年 女 菊 地

まだにお日様がきらきらひかつてゐます。かわいいおぢよちやんがベツトでねてゐます。お母様が子どもをおこそうとしてゐるところです。

以上の三人共簡単な繪でありますから大體一致した觀察をなし著者の豫定した意味に統覺してゐます。ところが四年以上になるといふ／＼の現像を以て統覺の結果が複雑してゐるのが特に著しく現はれてゐます

四 年 女 姥 原

朝になつてお母様がお窓のカーテンをあけてゐます。日はきら／＼と氣持よく照りかゞやいて、いかにも春らしい日の光、風も吹かず、雲のかけらさへない日本晴の氣持のよい大空です。

おぢようさんはその氣持のよいお窓の下で、キラ／＼と照る太陽に照らされながら氣持よさうにベツトの上でねむつてゐます。きつときれいなゆめでも見てゐるのでせう。

五 年 男 中 島

西洋人の子供がベツトの上にねてゐる。子供は手を顔の下にして横向きにねてゐる。子供のかけてゐるふとんは花もようがついてゐる。

その母のやうな人がカーテンを開いてゐる。その窓から太陽がさしこんでゐる。今はきつと朝七時頃であらう。その母らしい人のふくは水色のたてじまのもようであり。くつはかゞとの高いくつである。

六 年 女 西 脇

西洋館らしい部屋にベツトが置いてあつて可愛らしい子供が寝てゐます。そのベツトの後には水色のエプロンを着

たお母さんらしい人が窓にある黄色のカーテンを引いてゐます。窓の外にはお日様が照つてゐます。大てい朝でせう。そして子供に「もうお日様が出ましたよ。早くお起きなさい」とやさしく言つてゐるやうです。それでも可愛らしい子供はまだきつと楽しい夢からさめないものでせう。目があいてゐません。子供の寝てゐるふとんは赤い花の模様で大變可愛らしいです。この可愛らしい子供もやさしい日が部屋の中にさしこんで來たらきつと目がさめるでせう。

× × ×

このやうに五六年になれば全く情趣期に入つてゐることが明白であり、時間空間の關係も明白にまた性質も十分統覺出來てゐるのであります。更に高等科になつても大した變化がないのであります。

高一女 新井

子供は今夢路をたどつてゐる。外は朝日がきら／＼と輝いてゐる。お母様が朝飯のお仕度をなされて此の子供を呼びに來たのらしい。お母様は洋服を着て靴をはいてゐらつしやる。子供はベットに體を埋づめて横を向いてしゃ／＼

と寢息をかいて寝てゐる。

カーテンの蔭からそよ風が吹いて子供のゑりに當る。

高二女 須加

部屋の右の方に窓がある。お日様がにっこり笑つてゐるやうに見える。窓の下には可愛いらしい子供がまだベットの上でねむつてゐる。おかあ様が

「もう起きなさい。お日様が空高くのぼつて居ますよ」とカーテンをあけた。朝のやはらかい日光が部屋一ぱいにさし込んだ。お母さんは水色の地に白いたてのある洋服を着てゐて背の高いやさしいお母さんらしい。子供は此方の方を向いてねてゐる。顔つきはまるで天使のやうに美しい。又どこことなくむじやきさがあらはれてゐる。私は一目見て子供もお母さんも好きになつた。

談

話

(講演大要)

— はなしあひと詩の吟誦 —

新 庄 よ し こ

私は幼稚園保育項目中の談話について考へたことを少しばかりお話しいたします。

幼稚園生活の中で談話といふ中にはこれだけのことが含まれて居ると思つて居ります。

一、お は な し

先生がする
幼児がする

童話を讀んできかせる

二、繪 ば な し

話の筋が繪であらしてある
繪雑誌を見る

三、は な し あ ひ

組全體
一人づゝ

幼児と幼児と

四、詩 の 吟 誦

詩

短い童話

五、人 形 芝 居

先生の演出

幼児の演出

六、兒 童 劇

かうして見ると一口に談話と云つても、なか／＼範圍が廣いのでございます。談話の文字の意味は、はなし、ものがたり、であります。幼稚園保育項目に擧げられたる場合の解釋は、幼稚園に於ける一切の幼児文藝と申しますか、幼児文學と申しませうか、是等を一括して稱したる言葉、ごく廣い内容を持つのでございます。

私は右の中で、はなしあひと詩の吟誦について主にお話

するつもりですが、右の一つ一つについて述べたい事もございますのでごく簡単に。

(一) おはなし

従來の幼稚園の談話は、このおはなしにのみ限られて居たかの誤解があります。即ち或る一つの童話の筋を先生がその組の幼兒に物語つて聞かせるので、この場合幼兒は物語りに従つて喜んだり、心配したり如何になりゆくかと想像したりするので、幼兒の心的態度は全然受動的であります。

人々の解釋のしかたで、いろいろになりませうが、おはなしといふ言葉の意味から考へますと童話そのものの意味にもなりますが、私は、童話といふことは、幼兒に與へる話そのものであつて、その童話を語り傳へることをおはなしと解釋して居ります。

このおはなしについては夫々研究された専門家が多くあり、これに關する参考書も澤山あるといふわけで、今更私の申すことは殆んどありません。材料も豊富に備はつてゐ

ます。むしろあまり便利すぎて、今度はかういふ話をして見やうと計畫をたて、出来ることなら創作を試みる、この自分の話がどんなに子供にひびくであらうかといふ期待を持ち、或は新しいものを作り出すあの苦しみを味ふといふやうな事が無くてすんでしまふ、餘分な苦しみはしない方がいゝ様なものゝ、困らないからいゝと云つたやうな安逸に流れがちでは無からうかと思つて、自分をふり返ることも度々あります。

創作の才能を持つて居る人でも、外から供給せられる豊富な材料のおかげを蒙り過ぎるのではないかと、さういふ人の爲に惜しいことゝも思ひます。

又話し方の方面から考へて見ても、それに關する行届いた注意なり、理想的方法なりを記したものが澤山にあるので、それは省略いたします。

たゞ一言、それはお話を幼兒に聞かせて居る時いつも感じることですが、話し手となる先生が、その組の幼兒に話を傳へることを楽しむといふこと、即ち話し手もきゝ手も一つの物語りを楽しみつゝ話し、楽しみつゝ聞くと思つた

雰囲気をかもした上でのおはなしが最も効果があります。勿論それ迄には保姆としての教養の一つとして材料の選擇なり話し方の研究なりに就いてのよい参考書を読み、人の話も聞くことは是非必要ですが、この教養だけでは子供へうまく話の出来るものではありません。それだけでは子供の心をおはなしへひきつける事は出来ません。話を聞いて居てくれる時のあの顔、あの腫、その話がびつたりと幼児の心を惹いたか、失敗に終つたか、ほんとによく組の先生にはわかるものです。話し中で可笑しい所が出てくると、きつと一番先に笑ひ出すあの子、つゞいて二三人が、是れにつられて笑ひ出す、全體が何となく朗らかになる、お話がはづむ、かうなつて來ると今、保育でおはなしをしてゐるなどあらたまつた氣持にはなれません。

おはなしで、話す方の注意はかなり進んで研究されて居りますが、聴き手の方が、きゝ上手になる、幼兒をきゝ上手にすることも、お話の大事な條件かと存じます。度々きゝく話が幼兒の心を惹きつけるものであれば、自らきゝ手の

方が、きゝ上手になつて呉れることは、いふ迄もない事です。が、いつもお話しをしようと思つて必ず思ひつく二つ三つのことがあります。

イ、幼兒の氣分が落つてから

今迄庭で駈つこをしてゐた、積木の電車を走らせてゐたといふ幼兒達が、おはなしだからと云つて、とんで來た、喜んで飛んで來たとしても、前の遊びが幾分でも心に残つて居れば話はしにくい、未だ残つて居るであらう遊びのつゞきや、雜念が無くなつてから始めること。さわ／＼してゐるのを急にピツタリと止める事も出来ずまい、一人づゝ名を呼んで自分の椅子を持つて話を聞きに來させる、その他の子は、自分の名をよばれる迄しづかに待つてゐる、こんな事で全體の氣持を落つけてからといふ事も、一つの方法でございませう。

ロ、手に何か持物のないやうに

さつき迄庭で遊んで居て、摘んだ草の葉、或は、色紙のはし切れなどがエブロンポケットにしのびこんで

ゐたなどは、話の前に必ずあづかります。一寸したすきからそれに氣を取られる事も往々見うける事です。

へ、幼児の腰かけ方

すぐ騒ぎたくなる子、友達を突いて見たくなる子、さういふ子を隣同志に腰かけさせぬよう。

自分が騒いだ爲に全體の靜かな空氣を亂す事は恥づべきことゝいふこの心も幼児に養つておきたいもの、これがおはなし、唱歌などはよい機會でございませう。

(二) はなしあひ

先生のおはなしを聞くといふばかりでなく、子供の心中に持つてゐる話したいことを引き出してやり、先生と幼児とが、互ひに話し合ふ事によつて、次から次へと話の内容が展開されてゆく場合を私は、はなしあひと申して居ります。

それは談話といふ改つた事の中に含ませる程、特に云ひ出すのが可笑しい程當り前のことで、日常生活に、時と場所と内容とを選ばず無意識に行つて居る事です、又考へ

て見ると、是れを當り前の事として看過し去つてしまふ事は出来ないと思つてゐます。あの幼児の、殊に入園當初の年齢を考へて見ると、幼児が云はうとしてゐる事、思つてゐること、感じて居る事等が相當な内容を持つてゐても、それを言語として發表することばの種類を多く持つてゐません。今迄は家庭内で両親、兄弟のごく親しい人々、生れてからずつと生活を共にして來てゐる人々、それ等がその子の心を申分なく察してゐて、子供の發言がたつた一ことでも用の足りる場合が多かつたのですが、幼稚園では始めて對他關係にぶつかつて來たのです。そこで觀念内容を現すべき言語を用ふる機會に度々あはねばなりません。この意味に於てこのはなしあひは、幼児の發言を導くならかな方法でありますから、幼児の方は特に話したいといふ意識はないでせうが、先生は無意識に聞き流してはすまないこととでありませう、故にこのはなしあひが談話の一つの形式として重要な位置を占めてゐる事を、——從來もずつとつゞけて來てゐる事です——思ふべきでありませう。

話しあひの場合

イ、先生と組の幼児全體と

ロ、先生と一人の幼児と

ハ、幼児と幼児と

(イ) 先生と組全體と

これはおはなしの時と同じく先生のまはりに組全體の幼児が腰かけます。幼児の方から發表した事を、先生が受けて適當に處理してゆく、或は先生が幼児に話しかけて發言を求めるといふ場合、月曜日に日曜の出來事をきくとか、夏休みのあとで、思ひ出を語り合ふとか、この時などは三日も四日も朝の一時をこれで過す事があります。

○日曜の出來事などは云ひ度い子が多勢の時、一番先に申し出た子から順々に發表すること、友達が話してゐる時は靜かにきいて居て、自分の順番を待たせるやうに。

○すら／＼云ひこなせる幼児を先に。

「昨日動物園へ行つたの」と云つただけで、その様子をきくと一向わからなかつたり、聞くと、いや、とい

ふ、いやといふのはちきに眞似をしたがるもの故、最初の幼児を選ぶ必要があります。

○その話が、他の幼児が羨しがる様な場合は、多少先生は注意を要します。勿論進んで發表する場合、面白い處に行つたとか、何か買つて頂いたとかいふのが多くて、幼児の方でも大人が思ふ程關心は持ちませんが、長い間には、「いゝ處に行つた」「何を買つて貰つた」がひよつと子供ごころに響がないとも限りません、發表の爲めに是等を要求するといふ反對の結果にならぬやうに。

○いつもはなし合ふ子は決つて居て、云はない子は黙つてばかりといふ時、先生はすぐ氣のつくものです。これは云ひたいが、何かの原因があつて出來ないのか、全然厭なのか、前の場合は、云へるやうに手傳つてやる、又云へない子にも相當のはからひをすることが要りませう。

(ロ) 先生と一人の幼児と

即ち個人的はなしあひは、隨時隨所に行はれるのであつて特別な注意もいらぬ事です。幼児の中で、すぐに先生には親しみ、友達は出来る、幼稚園が面白くて／＼たまらない子にとつては、特にこれを必要としない、といふより機會が無くてすみませう。特に是を必要とする、大變必要な場合があります、それは友達とは遊び得ない、さりとて先生の側には猶行かれない、先生から話しかけられても返事も出来ない子、こんな子は、いつ迄たつても友達は出来ず／＼してゐます。いつそ思ひ切つた惡戯とか、喧嘩をしてくれる方がどんなに樂か、／＼してゐる位氣になる子はありません、折角友達の手とつなぎ合せてやつて見てゐると、室から廊下へ、廊下から庭へと出て行く中にいつの間にか又一人廊下のかべに置きざりにされてゐる。かういふ子へは、先生が進んで行つて、はなしあひの一時を意識的に作つてゆくのです。なか／＼手腕の要る事です、かたくなな心をほごして行つて、一口でも話を引き出す事につとめて行きます中に先生へだけは話をするといふやうにもなりませう。

(ハ) 幼児と幼児と

これが最も自然的なはなしあひでございませう。心して聞いて居ると誠に面白いことで、繪本の中の繪から、積木でつくつた家と家とから、砂場で掘つた大きな穴から、思はず話がひろがつて行つて、遊びから始つた話が、遊びを捨てゝしまつて、はなしに、夢中になつてゐる事があります。この場合、先生は全然はいらないで、それどころでなく、聞いて居る事さへ氣づかれないようにしたいものですと云つて無關心ではなく、このはなしあひの移り行きは是非先生は聞いておくべきで、その時先生は、うしろ向きで外の事をしてゐてもよいでありませう。

(三) 詩の吟誦

幼児が一つの詩を何日かかゝつて、すつかり覚え込んでしまひ、更にこの詩を吟誦することを談話の一つとして、以前からつゞけて居ります。

詩といふと格別香りの高いものゝやうに聞えますが、さりとて童詩と區切るのもどうかと思ひ、たゞ、詩と申して

居ります。

雨

スチイブソン 原作
葛 原 滋 譯

雨はどこにも降つてゐる
家にも木にも降つてゐる
傘の上にもふつてゐる
海の船にも降つてゐる

ひのまるのはた

倉 橋 惣 三 作

われらのこつきは日の丸のはた
高く立てよ 高く立てよ

朝日のいろをあかくそめて
あかるいそらにひら／＼と
かどやく光り 日の丸のはた

たかくたてよ たかく立てよ
われらのこつき 日の丸のはた

かういふ詩を幼児と、何日か、かゝつて暗誦し、吟誦するのでございます。これを、分けてお話しいたしませう、

1、あつかひかた

例へば「日の丸のはた」ならば、まづ先生が一通り、これを讀んできかせます。つゞいて三度か四度、面白そうによみます。かうしてあの子供達にとつても親しみのある日の丸の旗を、あの赤と白との日の丸の旗が一度幼児の心像として浮び出て來たと思つたならば、一句づゝ皆でうたひます。先生が一句云ふと、次に同じ句を幼児が云ふ、これを二三度、又次の句をと幾度かくり返し／＼幼児がずつかり覚え込んでしまふ迄何日かかゝつてやります。この時先生自身も、赤と白との單色から成る、而かもこの詩から湧き出て來るわが日の丸のおごそかさ、と未來への希望、とを心に思ひ浮べて、吟誦するのでございます。

2、詩の選びかた (詳細は略す)

イ、全體の心持がすぐわかるもの

ロ、句調のよいもの

ハ、短さ

ニ、大人の詩

こゝに大人の詩と特に記したのはわけがあります、是れに子供の詩を用ひたいと思つて、随分探して見たのですが、どうも子供の詩は、餘り詩としての價值が高すぎて、詩そのものとしては上出来のものであるが、それだけにその子の個性があまりあらはれてゐる、詩の吟誦の場合は、特にどの子にといふわけでなく、三十人なら三十人の幼児、同じくその詩の情趣にひたり得る可能性を要するので、これは、大人の作の普遍性を有つものを選びよしいたします。

3、創作への導き

スチブンスンの雨の詩を子供はすつかり覚え込んでしまひました後の或日、雨の降る日でした、少しづつゝのびてゆく藤の實の目につくころ、外遊びも出来ぬ組の子等は、ふと雨脚をながめ乍らはなしあひが始りました。そこであの雨の詩を思ひ出しみんなで、吟誦したのですが、この幼稚園の庭にふりそゞあゝの雨を、子供がどう云ひあらは

すかと、とつさに考へついたのでみんなを呼びました、一同が庭の雨を眺められるやうな位置に落ついた時、私は、雨はどこにも降つてゐるのね、ほら、見て御覽なさいそれぢや幼稚園の雨を見ながら歌をつくりませうね。と申しましたすぐ次から

○雨はぶらんこに降つてゐる

○雨は花にも降つてゐる

私は大急ぎで紙と鉛筆を持つて來ました。

○すべり臺にも降つてゐる

○わくのぼりにもふつてゐる

○雨はどろにも降つてゐる

○雨はみぞにも降つてゐる

○小學校にも降つてゐる

○あつちの門にも降つてゐる

○東中野にも降つてゐる

(自宅東中野の子)

かうして一つの合作が出来上りました

幼児は、先生からある童話を聴く、その時全然受身の態度であるが、それでも、その話の追隨と鑑賞によつて不知不識の間に幼児の種々の能力、情緒とか、想像とか、知力とか、理性等を啓發されて、日々のびて行く幼いものの心の糧となつて居るのでありますから、わがものとした詩を暗誦する事によつて、能動的心の方面を強く刺戟され、他から與へられたものを眞に幼児自身の一部に消化し、融合して、これの形をかへて自發的に再現した場合は、それが創作となるのです。

今、幼児の合作した詩、雨はぶらんこに降つてゐる……は數回の吟誦から新しく生み出したものの一つであります。即ち、スチブソンンの詩が刺戟となつて創作をうみ出したのでありますが、これが前のものがなくて出來た詩ならば大した創作ですが、それはあの五六歳の幼児に要求は出來ますまい。今迄言語表現としては僅に、自分の思ひを相手——多くの場合兩親兄弟——に傳へる位であつたものが、詩の形なり、表現の言葉なりの適當なものが出來ません、或物の形なり、動きなりに相當する表現言語の數が、ごく

少ない頃なのです。さればこそ、猶更この詩を暗誦すること、藝術的情趣の豊かな指導者に選ばれたる數々の詩を暗誦し吟誦する事が折々必要であると存じます。

4. 創作についての心ぞへ

イ、事物をありのまゝに見る事

ロ、幼児のことを聞きのがさぬやうに、

イ、事物をありのまゝに

幼児の生活をしづかにながめて居ますと常に事物をよく観る、感じる、歌ふ、躍る、叫ぶ、遊ぶ等實にありのまゝの自分の生活をして居ります。故にこの幼児の表現したところの言葉それ自身が立派に詩になつてゐます。それが大人に於ける詩の形には遠い隔りがありますが、純眞無垢の尊さを持つて居る幼児の心で物を觀その心で表現した言葉は立派な詩と云へませう。子供の創作について決して大人の要求を加へてはならない事です。事物をありのまゝに見させて、思つたまゝに表現させる事は、詩の創作への最もよい、最もやさしい指導であります。

ロ、幼児のことはを開きのがさぬやうに

常に先生が、幼児のことにばに注意してゐる事は、幼児からの創作を見出すことでございます。幼児の折々の言葉を大人が詩だと思つてゐない事が往々あります。まして幼児自身にはそれがわかる筈はありません。それ故折角幼児が思ひがけずよいものを發表して居ても、それを何とも思はないで大人が聞き逃して居るのです、そばに居る先生が常に氣を止めて、子供の言葉を聞き手近に紙と鉛筆とをおいて記し止めておく位の、親切を持つて居るべきであります。創作したものについて、先生は一指をも觸れてはならない事です、幼稚園の先生は、絶えず幼児の周圍にあつてよい保護と、よい導きと、よい暗示と親切な心ぞへと注意とで、怠らず見守つて行かねばなりませんまい。

5、吟誦の價值

イ、幼児のいひたい事を云はせて貰ふ満足

ロ、直接記憶

ハ、正しい言葉及正しい發音練習

ニ、創作への刺激

ホ、その詩の内容から與へられる性情上の影響

イ、幼児の云ひたい事を云はせて貰ふ満足

吟誦することによつて、子供自身も云ひ度いと思つたことを、云はせて貰ふ満足が出来ます。詩感といふものが大人になつてから起るもので無く、幼稚園に通ふ頃の子達には、すでに立派に芽生えてゐる事です。活動が盛んな爲に、ともすれば無いかのやうに思はれますが、折々かういふ状態を見うけることができます。幼児の心の中に、おぼろげにつかみ得た觀念内容（詩感）を、吟誦する、即ち自分のものとして發表することで、はつきりと、幼児の心の中を整理することになるので、幼児自身にとつてもまことに愉快なことになるのでございます。大人で申しまして、山の壯麗さ、雄大さに心をうたれたとしても、この場合この感じに胸を打たれたとした時、是れを表現する言葉、即ち自分で、詩なり、歌なりを作り得られれば非常な満足であります、これが出来ないとしても、誰かの山の歌、誰かの山の詩を、吟誦する事により、心の中を整理された、

思ふ事をいひあらはした様な愉快となる、あの心持ちでございます。

ロ、直接記憶

記憶に二種ございます。ずつと以前の事を覚えて居るといふこと、すぐ直前の事を覚えてゐる事と。吟誦はこの後者の直接記憶であります。即ち、先生が「われらのこつきは日の丸のはた」と云つて、幼児がすぐこれをくり返す。今きいた言葉をすぐ云つて見る、直接記憶でございます。例へば、○△□等の書いてあるカードを一度見せて、伏せて、それを書かせる、さつき見たものをお書きなさいと云ふのと同じ、記憶力を養ふ爲に記憶練習を行ふのでございます。

記憶力の無くなるといふのは、時が中にはいるからで、時がはいらないのに忘れるのは幾分缺陷があると見るべきであります。

ハ、正しい言葉及發音練習

これはごく小さい事です、國語練習、正しき言葉、正しき發音の練習が自然と行へるわけであります。幼稚園生

活の中に於いて他にかうした機會が殆んどありません。言語の爲に、發音の爲にでなく、なだらかな方法で、この練習が行はれませう。

ニ、創作への刺激（前出）

ホ、その詩の内容から與へられる性情上の影響等の保育材料は、みんなよい性情を養ふ爲にといふ條件で選ばれてゐました、談話、唱歌すべてこれであつたのですが、保育材料撰擇の本來の主旨がそればかりでない事は云ふ迄ありません。但し皆無といふわけでなく、例へば前述の「ひのまるのはた」の詩からでも多分にこの目的が達せられませう。

以上私は、談話中で、はなしあひと、詩の吟誦について主におはなし致しましたので、是れを主とし過ぎる感があります、勿論あの童話をかたり傳へる事は度々いたしますし、人形芝居は見せて頂きますし、只私の談話の中で、此の二つを特にぬき出してお話したことをお断りしておきます。

人形に依る「おはなし」の演出に就て（講演大要）

菊池ふじの

第一、理論

- 一、演出に就て
 - 二、舞臺に就て
 - 三、脚本に就て
- ## 第二、實際

- 一、脚本化に就て
- 二、舞臺裝置に就て

- 三、人形に就て
- | | |
|--------|-------------|
| 1 | 2 |
| 體
裝 | 遣
ひ
方 |

實演の前に何か申上げる様に、と云ふ事でございますので、一寸お話申上げる事になりました。ここに書き出して

ございます項目は、大變に立派なものでございまして、之等に就て充分申上げられる様でございまして大變いいのでございますが、お恥しい事に未だ何も勉強が出来て居りませんので、こんな事を書き出す事に、随分躊躇いたしました。でも他に適當な言葉もございませんので、便宜上、こんな事に分けて、考へて見たいと存じます。

「人形に依るおはなしの演出」と云ふ題になつて居ります様でございますが、之は私共が普通申して居ります人形芝居の事でございます。人形芝居は、皆様既に御存じでゐらつしやいます様に、一昨日、新庄先生が談話の分類をなさいました折、一番初めにお書きになりましたあの童話の立體化でございます。人形芝居の教育的効果と云ふ事は、此の頃大變に社會から認められてまゐりまして、先達中は陸

軍省が人形芝居に力を入れて、幼児時代から愛國的精神を吹き込む様に力を入れる、と云ふ様な記事が新聞に見えて居りましたし、その前後にもちよいゝ人形芝居の事が出て居りまして、段々社會にその眞價が認められ様と致して居ります事は慶びに堪えない次第でございます。

お話を立體表現化して子供に見せます場合、人形を使つて致します場合と、私共人間が夫々人物になつてして見せる場合と二つございます。いま後者のつまり人間に依るオハナシの演出と云ふ事に就て、暫く考へて見様と思ひます。

私共は「赤頭巾」のお話であるとか、「都會のねずみと田舎のねずみ」であるとか、その他二三のお話を私共で實演して子供等に見せた事がございました。今之等を、私共へツポコではあまりに問題が離れ過ぎますので、假に一代の名優が演出すると致します。名優の眞實な演出は、私共大人が觀客でございますなら、その到れり盡せりの藝に實に見惚れてしまふ所でございますが、あのがんぜない子供にとつてはどうでございますか？ 子供等は藝に見入るのではなくて、その立體表現によつて、彼等自身の想

像といふ内的活動を強くし深くすると云ふ、私共大人とは違つた立場で以つて劇に對して居るのでございます。ですから演出が屆き過ぎたり、又道具や背景のものが完全であつたり致しましては、却つて世界が限局されて想像の餘地が無くなり、想像と云ふその心的活動の潑刺さを弱める事になると思ひます。まあ理想を申せば、名優が子供の心理と云ふものをよく理解し、その理解にもとづいて程よき演出をすると云ふ事が、何よりもまさつて一番いゝ事だと思ひます。併し子供の心理をよく理解すると云ふ事もなかなか困難でございますが、主觀あり、表情もある人間がその理解にもとづいて程よき演出をすると云ふ事は、尙ほ一層の困難であらうと思ひます。こんな根本的の困難の他に、實際問題として、現在、子供本位の劇をやつて見様と云ふ名優も有りさうにも思へませんし、假にあつたところで、全國の幼稚園の子供が始終見せて貰ふわけにまゐりませず、それかと云つて私共素人が、あまり一生懸命な演出もいけないとか、屆き過ぎた演出もいけないとか、子供の想像作用の事なんかを慮つて控へ目な演出等をしたら、それは實際

目もあてられないだらうと思ひます。かう申しましたからとて人間の演出を決して拒むのではございませんが、併し人間が演出すると致しますと、人形の場合の様に、一時に獨りで二人も三人もの人形を出して二役も三役も兼ねると云ふわけにはまゐりませず、脚本にもよりますが相當の人数が要りますし、場所も廣く要しますし、それにつれて、道具も背景も大げさになり人形芝居の様に、いつでもして見せたい時に、おいそれと簡単に出來ると云ふ工合には行かないだらうと思ひます。

で現在の所では、人間の演出と云ふ事よりも寧ろ、極つた表情もない不完全な人形の、極くおほまかな演出に依る方が却つて子供の想像作用に對しても効果があり、手近で簡単に實行し得る事ではないかと思ひます。之等の事共が私共が人形芝居を主張いたします最大の理由でございます。

先程も申上げました様に、人形芝居といふものは、おはなしの立體化でございます。子供はおはなしをきいただけでも、盛んに想像を働かせて楽しんで居るのでございますが、それが人形といふ具體のものゝ助けに依りまして、ど

んなにか樂に、又どんなにか盛んにその想像作用が働くわけでございますが、あまりに到れり盡せりの藝は勿論、人形、服裝、舞臺裝置等もあまり完全なものとは却つて子供の想像の働く餘地をなからしめて、心的活動の潑刺さを弱めると思ひます。かう考へました時に、幼兒本位の人形芝居には脚本にも舞臺裝置にも人形にも完全さの程度に、或る限度があると思ひますし、又その演出に當りまして、程よきまづさと云ふものが必要である事を切に思ひます次第でございます。

舞臺に就て

次に舞臺に就てお話申し上げます。

舞臺と幕とは、間仕切の二つの要素であると思ひます。

舞臺は空間を仕切つて思ふまゝの「世界」を現はし、幕は時間を仕切つて思ふまゝの「時」を現はし得るのでございます。例へば、後程ご覧いただきます「爆彈三勇士」に於きまして、只今、上海の廣野を現して上海事變の一場面を見せたかと思ひますと、今度は舞臺變つて空想の世界の

龍宮城の場面であるとか、幕が代れば海底の有様であるとかを表はし、こんな小さな舞臺ではございますが面白いものだと思います。

空間を仕切ると云ふ考方から申しますと、舞臺の色はなるべく外界と違つた色がよろしいと思ひます。と申しましても、舞臺の中に見入る心を邪魔致します様な目にちらつく色とか、又は幕との色の釣合ひ等もございます故、あまりけばくしい色は避けた方がよいと思ひます。又外界から、その場だけを區切ると云ふ意味合ひのものでございませうから、お手製で舞臺等をお造りになります場合は舞臺の枠に或る幅と云ふものを考へなければならぬと思ひます。それから幕でございますが、幕は時間を區切ると云ふ働きを致しますが、この他に、一場面があまりだら／＼と長過ぎたりいたしますと見て居る方で飽き／＼して観客がだれてまゐりますので、そこをグット締めるために幕を降す場合もございます。又出し物によりましては事件の進展につれて、次の幕が喜劇であるか悲劇であるか豫想されるわけでございますが、こんな場合、幕の色合も、それに應

じて喜劇の時には喜劇らしく、悲劇の時はそれらしい色の幕を下げて、次の場面の豫想をグット助けてやると云ふ様な働きもでございます。あの歌舞伎傳統の三色即ち緑、茶、黒を三筋に置いた幕は悲劇にも喜劇にも又、普通の場面にもいゝ様にとの事で三色になつて居ると云ふ事を聞きました。黒は悲しみ、緑は華やかさを、茶は、そのどちらでもないあたりまへの時にいゝのだそうでございます。

で、人形芝居の場合も幕はどんな場面にも邪魔にならぬ地味な色（大人の好みよりは少し派手なもの）にした方が無難であると思ひます。

脚本に就て

次に脚本に就て申し上げます。

どういふ脚本が、幼兒の爲の人形芝居の脚本としていゝ脚本であるかと申しますと、優秀な童話の備ふべき條件を備へ、尙ほ且つお話よりも一層の活動性を備へて居るものがよろしいと思ひます。静かなお話は、人形芝居として見るよりは、たゞお話として味はつて居る方が却つてよろし

脚本化に就て

次にどういふ風にして脚本化するか、と云ふ事に就て申上げて見度いと思ひます。

脚本化と云ふ様な言葉を持ち出しますと、人形芝居の脚本は、童話からの脚本が本體でもあるかの様に思はれますが、決してさうではございません。文學としても小説とは獨立に劇があります様に、人形芝居に於きましても人形芝居の脚本として獨立にあつていゝものだと思ひます。併し只今の所、始めつから人形芝居の爲に作られた脚本と云ふものは大變に少うございますし、之からの新作を待つて居りましても、なか／＼今日の間に合ひませんので、先づ良しとされてゐる童話、又は子供によく親しまれて居る童話を脚本化する事が最も手近な事であらうと思ひまして、今まで多少致してまゐりました。

扱て、今までどういふ風にして童話を脚本化して來たかといろ／＼考へて見たのですが、之と云ふハツキリした方法も思ひ當りません。たゞ私は、おはなしを子供

いのがございます。ですから人形芝居の脚本を考へます時は、活動性に富んだ童話を考へる方がよろしいと思ひます。この折角の活動性を表はすために、人形は是非とも動く様に致し度いと思ひます。動く様にと申しましても、紙芝居の様に、體ごと移ると云ふのでなくて、最小限度體が動き、手が動く様に致したいのでございます。兩手が自由に動けば、體の動きはかなり充分表はせれると思ひます。世間ではよく紙芝居と、人形芝居とを同じものと心得てる人が多うございます。子供達もよく、舞臺を持ち出しますと、紙芝居！ 紙芝居！ とふれ歩いて居りますが、こんな時私共は、「紙芝居じやないの、人形芝居よ」と訂正いたす事もちよい／＼ございます。皆様も御存じの様に、紙芝居は、假に内容を教育的な良いものと假定いたしましたところで、繪ばなしの一寸動くと云つた様のものでございまして、説明的な意義は持つて居りませうが、少しも藝術的ではないと思ひます。之に反して人形芝居は、動的であり藝術的であると思ひます。

にして聞かせます時に、いつもその童話の持つ光景を目に浮べて、その光景に就て話すと云つた方法を取つて居りますが、童話を脚本に直します時にも、やつぱりその童話の色々の場面をそれからそれと目に浮べて考へます。先づその童話のクライマックス、即ち山と云ふものを考へ、その場面を目に浮べて人形芝居になるかどうかを考へます。こゝがお芝居になる様でしたら、もうその童話は脚本化して演出出来ると思ひます。こゝが若し、魔法的な力の發現であるとか、神の業が現れると云ふ様な場合は演出し憎い事がございます。併し、猿蟹合戦の人形芝居で、柿の芽が伸びますところを、大きい木と、小さい芽とを手早に取りかへて表しましたが、さ程子供等は變だとも思はない様子を思ひますと、かなりの不自然な方法でもつて演出致しましたも、子供の良く知つて居るお話でございますなら子供はそうは思つてはくれない様に思はれます。そう思ひますと、大抵のお話は演出出来るものかも知れませんが、山を考へましたら、その次に、序幕なり、終結なりを考へます。序幕は、クライマックスの原因となります部分で、七

匹の小山羊の様に一幕で済む事もございませうし、三幕四幕にもなる時もございませう。短くならうと、長くならうとそれはお話に依るのでございます。でも子供のよく知つてゐるお話で、序幕が三場面も四場面もございます時は、そのどの場面を省いてもクライマックスが分らなくなる様でしたら省く事は出来ませんが、そうでもない時は、そのどれかを省くなり、又は人物の口上にして云はせたりしてあんまり幾幕にもならない様にしたい方がいゝと思ひます。序幕であつても、あんまり幕数が多いと全體をだれさせる事がございますので。

それから終結は一般に短い方がよいとされて居ります。山の直ぐあと、適當の切りを見つけておしまひにいたします。終結の長いのは蛇足で、折角の劇をだいなしにしてしまひます。こんな経験がございします。猿蟹合戦の芝居の時に、一番おしまひの幕でございしますが、お猿さんが歸つて来て栗や蜂や白につぶされますと、見て居た子供達は氣味よがつて、一時にドツトかん聲を揚げてくれましたので、おくればせながらこゝで幕を引いた事がございました。脚

本には、お猿が潰された後、小蟹がみんなに向つて一言御禮等を申述べる所を入れて置いたのでございましたが、實際にいたして見ましたら、このおしまひには、簡単な挨拶さへも無用だったのでございました。今度、ご覧いただきます爆彈三勇士を脚本に致します動機や、経過について申上げて御参考になれば嬉しいと存じます。

爆彈三勇士は今でも尚ほ、子供は大變に興味を持つて居りまして、繪を描きます時も、切紙をいたします時も、始終爆彈三勇士をいたします。自由遊びの時等は長い積木を破壊筒にし、お砂場の箒を鐵兜だなんてがぶつて、よく飛び込むまねを致して居ります。三勇士の爲した行ひがよく理解されての人氣、と云ふよりも、家庭内の人々の、話の裡から感じられる感歎の寥圍氣と云つた様なものが、子供の心にも深く映じて、かくもこのお話に興味を持つのであらうと思ひますが、とにかく、人氣があるとは思つて居りましたが、戦争の事でもあり、どういふ風に取り扱つていゝか分りませんでしたので、そつとして置きました所或る日倉橋先生から、敵愾心を刺戟しない様に氣をつけ

て、爆彈三勇士を人形芝居に見せてはどうか、と仰言つて頂きましたので、早速、いろ／＼の暗示をいたゞいて脚本にとりかゝつたのでございました。三勇士の事實を読みました處、自づと三幕の見當がついたのでございます。

三勇士が鐵條網へ飛び込むところが山でございますが、序幕無しにこゝだけ、ひよつくり演出したのでは何だかはつきりも致しませんし、脚本の形としても物足りないと思ひまして、三勇士が選ばれるまでのいきさつを入れて序幕といたしました。この脚本では、三勇士が飛び込んで爆破するところや、爆破に續く進軍の光景等は、舞臺面でなく、蔭で扱ひましたので、その爆破の跡をよく見直して、感銘を深くしたいと思ひましたので、翌日の旅團長の巡視をこゝへ持つて來て、終結といたしました。この三勇士は、歌舞伎座でも明治座でも、また文樂の人形劇でも上演された様でございますが、それ等には支那人の間牒を出して來て非常に吾の敵愾心を刺戟し、以つて劇的効果を揚げて居る様に聞きましたが、幼兒本位の脚本にはそれは却つて有害であると存じまして、支那と云ふ言葉さへも使はず、たゞ

敵と云ふ概念的な言葉で、その場を通じる様に致したに過ぎませんでした。

こんな風に、私は主題となるものゝ山を見つけて、その光景を目に浮べ、(私の實際は山を見つける前に、話全體の光景が目につくのでございますが)そこから序幕となるものや終結となるものをたぐり出すのが、脚本化のたゞ一つの方法と申してもよろしいのでございますが、よく考へて見ますと、その原話の光景を目に浮べ得るまでには、かなりその原話をよく讀んで、もう自分のものとしてしまつて居なくてはならないと思ひます。今まで、「昔々或所に」で済んで居りましたものが、劇ではそんな漠然とした事では成立ちません。何時、何處でと、具體的に制限されてまゐりまして思はない困惑に會ふ事がございます。又時と場面の同じ所に起つた事件でございまして、それが又必要な事件でありましたならば、原話の順序と違ひましても又形と違ひましても、そこへ持つて來た方が原話の精神が生きて來る場合もございます。又原話には現れてゐない人物を配して對話させて(天狗退治の脚本に於て村人が代り

合つて出て來る例)原話の意義をハッキリさせる場合もございます。こんな風に、色々と原話に戻りやしないかと心配される事共が起つてまいる場合が、ちよいとございですが、原話の精神に達してからの細工でございますなら、原話の精神を生かしこそすれ、破る事はあるまいと思ひます。只脚本化したします時に、細かい注意と致しまして、殊に子供本位のものは、獨言の長いのを避けたり、惨めな場面は舞臺裏で取扱ふ様に致したいと思ひます。こんな事がまあ、脚本化の要旨とでも申上げませうか？

舞臺裝置に就て

次に舞臺裝置に就て申上げませう。

出しものに依りましては背景の要らないものもございますが、大抵の場合、先づ背景が入用でございます。背景は三勇士の様な實話物でございましたなら、實寫めいた背景がよいと思ひます。併しそれも極く大體の感じが出る程度のものでよろしいと思ひます。それから浦島の様な空想的なものでございましたなら、ごく大體な印象的なものでよ

ろしいと思ひます。私共は今まで少し實寫めいた背景を用ひて居りましたので、時に御注意を受けた事もございました。それから、用紙は、今までは模造紙等を用ひて居りましたが、短い幕間に急いで取りかへますので、そのやかましい紙の音は、實際耳障りでもございましたし、又紙は直ぐ破けまして長い間の使用に耐へませんでしたので、先頃から、かんれいしやを用ひて見ました。そう致しましたら貼り換への際、音もいたしませんし、破れもいたしませんし、今の所は大變に好都合に思つて居ります。關西の方では板紙に描き、重ねる式にされてゐる所がある由をきゝましたが大變結構に存じます。それから、今までに、よくこんな事がございました。人形をすうつと歩かせる所を表し度い、それには背景を人形の進む方と反對の方に進む様にすればよい、背景を棒に巻いて置いてそれをほぐす様にすればきつと之が表はせる、と思つて居りましたので、この舞臺には背景を横卷に出来る様にいたしました。又時には上下巻も必要な事もあらうと思ひまして、それも出来るやうに致してございます。

それから、家とか、家具、垣根とか、木、月、星とか云ふ様の所謂小道具でございますが、之は幼兒相手では無くとも濟みませうが、あると尚ほ、舞臺が生きて來る事がございます。今までの舞臺も、家や、木、垣根等を乗せたり立てたり出来る様に、かけ渡しの板がございましたのですが、今度拵へましたこの舞臺には、適當な時に月が出たり星が出たり、太陽、雲、とぶ鳥も出られる様に、舞臺の上の方に、渡し棒を渡しまして、之に金具と紐をつけ、それを引つぱつたり、押したりして、出沒を自由に出来る様にいたしました。

次に照明の事でございますが、照明なしで今までやつて居りましたが、照明がつけば、大變に、印象的になると思ひまして、今度つけて見ました。初めはこの舞臺に獨立につける豫定だったのでございますが、只今それが中止されて居りますので、此の度は、電燈からコードでもつて、舞臺の中に一つ二つの電燈をつけられる様に致したに過ぎません。電球の色で加減が出来ますので、これでもつけなによりは、随分舞臺の中を生かす事が出来ると思ひます。

人形に就て

先き程、人形芝居は、お話よりも活動性の多いものをもと申上げましたが、この活動性を現はし得る爲に、人形は出来るだけ動けるものがよいと思ひます。この點、操り人形等は良いと思ひますが、人形の作り方、操り方等が六ヶ數うございますので、まだそちらの方へは手をつけずに、只今の所、私共は専ら、ギニョール式の指で扱へる袋人形を用ひて居ります。

人形の頭は、厚紙で拵へましたもの、卵でこしらへましたもの、木彫りにいたしましたもの、布でこしらへましたもの等、種々ございますが、七八年來使つて見まして、今では、布人形か、木彫り人形が一番いゝと思ふ様になりました。卵人形や箱人形は、簡単に出来て、よろしうございますが、直ぐ破れ易うございますので、一二年してその人形芝居をしやうと思つて取り出して見ますと、いつの間にか、破されてあつたり、又ねずみにいたずらされてあつたりして、もう使へない様になつて居ります事が度々でござ

います。こうなりましてもまた手軽に作り換へればよろしいわけでございますが、一度念を入れて作りましたものが破れたり致しますと、落膽ばかりいたしましたして、又樂に作りかへると云ふ氣には一寸なり憎いものですから、それよりは始めから、丈夫で破れ憎いものにした方がいゝと思ひます。それから、鋸屑や、新聞紙の細かくしたものを、ふのりで煮て型をこしらへて作ります人形は、皆様よくお使いになつていらつしやいますが、之も輕いし、破れないし、よろしいと思ひます。

布でこしらへます人形は、人形に比し動物にせよ、型が出来て居りませんので、自分で色々工夫して試みて縫ひ合せて作らねばなりません。

木彫りの人形は、フレーベル館がこの頃賣り出して居ります。今日致します三勇士の人形は、下駄屋から桐の木を分けて貰つて、私共同人で作りました。人の顔でございいますから、割にやさしく出来ました。ごく大體の顔の形に削りまして、それに鼻をつけたのでございます。

それから人形の着物は、こう云つた様のも（例示）で

ございまして、兩手がついて、普通足がついて居りません。手があれば人形の動きと云ふものが、かなり充分に表はせますので、普通の人形は足をつけずに、子供の想像に頼んで居ります。でも今度の軍人、殊に三勇士には、動きの他に、力をも現はし度いと思ひましたので、之だけは特に足をもつけました。

服裝は、布地の色等を少し考へた位で、型等も御覽の通りのごく漠然としたものでございます。普通の場合は、これで結構でございます。子供の方で然るべく想像して呉れると思ひます。でも三勇士の様なのは、空想的なお話ではございませんで、實話であり、且つその服裝等も一定のきまりがあり、子供等もかなり細かい所まで氣がついて承知して居りますので、今までの様な漠然たるものでは満足して呉れないだらうと思ひました。で、之だけは例外に、細かく氣をつけて拵へました。足もつきましたので、大變にしつかりと軍人らしく見える様になりました。

それから遣ひ方でございますが、私は人指指を人形の頸に入れ、拇指を人形の片手、仲指をも一つの片手に入れて

使ひます。又時に依りましては、薬指や、小指を仲指の代りに使ふ事がございます。之は皆様、ご銘々、得手な指でお使ひになつて結構と存じます。それから人形の振りの遣ひ方をよく御心配になる方がございますが、それは、人形も一人の役者と考へ、實際の喜怒哀樂の表情を出せる積りで使ひますと、どうかそれらしい表情は出ると思ひます。

一二度ご自分でいちつてご覧になるとすぐお出来になると思ひます。之もごく大まかな表情の方が却つてよいと思ひます。それから細かい事で、申上げるまでもない事でございますが、舞臺の中には入つて、演出致します時、脚本に或程度まで通じて居りませんと、脚本の方に氣がとられて手の方が疎かになり勝ちでございます。あまり無表情でも、見て居りまして、どの人形がしやべつて居るのか分りませんから、或程度の人形の振りも必要であると思ひます。

それから細かい事でございますが使ひます時、人形はなるべく舞臺の真中で、そして表に出た方もよいと思ひます。つまりません事を長々と申上げました。では二十分程お休み致しまして、三勇士と、浦島の實演を御覽頂きます。

『幼児の教育』六月號を讀みて

大 塚 喜 一

『幼児の教育』の本年六月號は、東京女子高等師範學校附屬幼稚園保姆諸彦の手記せられたる保育日誌が滿載せられて居り、更にこれを書かれたる方々の精神が一層よく我々讀者に理解せられ味はれ更に出來得べくば實行に現はし得る様に主事倉橋先生の『はしがき』が畫龍點睛的に光つてゐる。殊に『幼稚園は生きてゐる』といふ文字を以て書き始められてゐる事が、恰もこの一冊の雜誌がさながら生ける使者の如く、參謀本部即本隊から第一線に活躍せる戰士に對する傳令の如く、日本全國の各國に於て同じ心を以て今子供達の爲に精進しつゝある保姆各位保育關係各位に對して『我等は斯の如く生きてゐる。卿等はこれを如何に受取らるゝか。いざ心を一にして共に生きんかな!』と呼びかけられてゐる様な氣がする。ありのまゝを忠實に客觀的

に子供達と先生自身とを靜に觀て記してゐられる中に、教育者としての絶えざる心づかひが動いてゐるこの生活記錄は、實際家諸賢各地各人に必ず何等かのひびきを傳へ反響を起してゐることであらう。小生もこの日誌に表現せられたる實際の情景をお察し申上つゝ興深く讀ませて頂いた。

殊に本年は大阪及東京に於て度々倉橋先生の御講習を拜聽するの好機に恵まれたおかげで、その中に力說せられたる中心精神が現にお茶の水幼稚園に於て實現せられて居り且絶えずその實現に努力せられつゝある事を明に感得して保育の眞諦も亦實に茲に存すとうなづかれる。斯くして本誌を始めて手にした時の感激と共鳴とが、時を経て再三熟讀する毎に更に深く彌々高まつてゆくのを覺える。今その

主なるものを次に書きしるして見よう。

先づ、全體を通じて最も鮮明に力強く感得せられるのは先生は幼稚園へ來られるとすぐ（或は前日から）子供たちの生活を誘發すべき活動を開始せられて居りそこから其日の幼稚園がうまれて來るといふ事である。勿論子供達は來るとすぐ各自の自由遊を始める事が多いであらうが、それが幼稚園としての積極的教育價值を發揮して來るのはこの先生の生活の賜である。子供だけでは教育なしの生活だけになり（その生活もどこまで存續發展するかむづかしい事もある）、先生が出過ぎれば教育のかげに子供が押込められてしまふ。その何れにも偏らないで、先生と子供との二つの生命が融和共同して一つになつて働いてゐる所に「幼稚園は生きてゐる！」のだと思ふ。

六頁の「子供達の眼は一樣にそちらに向いた……」からこの日の日誌の終まで讀んで、この子供と共に生きる動きが潑刺と感ぜられる。「けしの花を描きませうね」と云はれた表面の目的物はいちごからあぶへと段々に移つて行つてはゐるが、其中に動く子供心に従ひつゝこれを守り育てら

れて行く有様が「子供等は聞きながら暫く見入つてゐた」「その姿はこゝの所よ……こつくりと頷く」等にハツキリと讀まれる。殊に「子供等の顔に動いたかすかな表情をつかまへてお繪書きを始めた……」と終に書いてゐられるお心に至つては眞に敬慕に耐えない。嘗て或る先生が僕に『私は幼稚園へ來た時は子供が自分の云ふ事をきいて呉れるのがうれしかつたが、此頃は自分が子供に従つてゆけるのをうれしく思ふ様になつた』と云つて下さつた事はどれ位大きな力となつた事か。それについて思ひ出さるゝのは、福島政雄先生著『ベストロツチーと女子教育』の序文「女性の本質と使命」の中に直觀性について述べられたる左の一節である。

『直觀とは如實の相を見る事である。兒童を概念型によりて理解する事ではない。正しく兒童の個々の心想事成に入つてその生命の如實の相に觸れる事である。而して女性としての母はかゝる點に於て實に偉大なる能力を有するものである。生命と生命とが相照らすともいふべき直觀の第一程は實に母が子供等に對する關係に於て成立つ

のである。……

更に進んで人間の生命と生命とが相觸れるといふ事を考ふれば、女性に於ける直觀の力の意義は更に重大となるものである。凡そ人間の生命と生命とが相觸れるといふ事が相對的の意味に於て少しでも成り立つとすれば、それは情意の世界に於てである。知の世界に於ては互に理解するといふ事はない。或る意味に於て知はむしろ人間と人間とを隔つるものである。然るに直觀といふものは知の世界に於て融化の味をもたらすものである。隔ての世界から融化の世界へのかけはしとなるものである。情操及意志は生命から生命へ流れ入るものである。それは言語といふ概念の形式を通さずして流れ入るものである。生命が生命を視る、生命が生命を聴く、生命が生命を感じるといふべきものである。而してかゝる情意が知をうるほすときそこに直觀性が鮮に動き出るのである。理智の冷かさが情操の温かさになる、ほふのである。こゝにはじめて人と人とが生命に於て相觸れる事になるのである。かゝる世界無くしては教育といふ事は眞實の

意味に於ては成り立たないのである。故に女性はその直觀性を以てして教育の樞機にあづかるといふ最も重大な意義を有するのである。』

大阪での講習で「子供に『何泣いてるの?』『何怒つてるの?』等と尋ねる事は、今起つてゐる情緒を意識させる弊が起る」と承つたが、尋ねないで其場合に適切な人間交渉が開かれてゆくにはどうしても斯かる直觀性が必要になつて來るのではないかと思ふ。「子供に従つてゆく」といふと何でもない事のやうだが、實はその中にこまやかな心づかひが動いてゐる。機會の捕捉、共鳴、欲永の充足等の保育法の原則が保育態度の上に事實體現されて來るまでには、この『直觀性』が基調となつて保母と幼兒との心の通ひ路が次第に開かれて來たやうに思はれる。川の組の日誌の終りの「お辨當を幼稚園では食べないと……つく／＼時期の問題だと思ひます」(三三頁)にはかうした眞に保母らしい尊い努力がまざ／＼と現はれて居る。又、年少組をお受持の新庄先生の日誌中にも「かたくなに結ばれたる小さき心の、日を追ひてとけゆくを見るは保母ならではの

味ひ得ぬことなるべし」(三七頁)「よく育てられて來し子等よとあらためて顔々見まはしたり」(四一頁)等に此間の情景が美しくも表現せられてゐる。生きた保育がこゝまで浸潤し徹底しその先生の心の光となつて輝いて來るまでには如何に多くの苦心が秘められてゐることか。斯くてこそ甫めて「ちよつとは強く泣いても母に歸つて貰ひたるにすぐ泣き止みたり」(三六頁)なる自信ある態度に頭が下る心地がする。尙同先生は文語體で書いて居られる中に云ひしれぬや、さしみがにじみ出てゐるやうに感ぜられるのもゆかしき限りである。

次に、斷片的ではあるが僕が特に感じた點を順次に述べよう。

十一頁始の「嫌！」とにべなく斷られた……元の遊びに歸つて行つた」にて先生の計畫と幼兒の興味とが調和し難きは何故かと疑問であつたが、「人形のお家から……直しに引返す」の如く互の調和に入り、更に十二頁の「いつの間にか入つて來て靜かに塗つてゐるのである」に至つては先生の用意せられた環境に子供から自然に入つて來て安住せ

る様、眞にうるはしき光景である。同じ心の喜びは二〇頁の「白木の自動車でもこんなに喜んで呉れるのかと涙ぐましくなる」の前後に潑瀾と湧き起つてゐる。製作といふ方法を用ひつゝもそれを幼兒の世界の法則に従はしめ、毎日辛抱強き努力を續けて來た甲斐あつて、専門外の大人の目には何の感興をも起しさうにないこの自動車が媒質となつて方法に於ては間接教育の原則を遵守しつゝ保育の本質に於て保姆と幼兒との心が相觸れ合ふこの境地！「思へばこの自動車もよくこゝまで來たものだ……」とは何といふ尊い實感であらう。この夏僕は東京の講習に出席の際お茶の水幼稚園にて實物を見せて頂いた時、成程これが「私たちの自動車」かとつくづく見入つた。そして本誌に記された實景を眼のあたりに見るやうな心地がして。顔まで塗料だらけにして夢中になつて塗つてゐる様！「先生、自動車乾いた？」と來るなり尋ねてゐる子供！ホントに子供たちの生命の一部分としての生ける自動車である。この自動車が中心となつて幼兒達の製作衝動即ち生活々動がむくむくと湧き起つて來る時、其處に幼兒の天國は開かれ保育の理想

境が出現する。僕は、五月號の拙稿「基本教育としてのおはなし」に於て到達したる境地が斯くして製作に於ても實現され得るといふ生きた事實を學び得しことを深く感謝する次第である。此事實は保姆諸彦の日常に切實なる感興を惹起することと信ずる。

二〇頁の「食後も自動車遊びが続いてゐた。私は其れを、氣を付けながらそばでヘッドライトを作る。」先生の生活により幼兒の生活が誘導促進されてゆく光景がよく現はれてゐる。子供にとつては、想像的な遊びの際はあまり大人が目立たないのがよい、しかも先生が私達(子供)の側に居られるので安心して私達の遊びに没頭出来るといふ心地だらう。先生も子供達の遊ぶ様を觀て靜かに學ばるゝ事が多いであらう。「氣をつけよ、手はつけるな」といふコツは此處だな！と思はれる。「今日は牧場の羊の唱歌をする豫定であつたが、あまりよく遊んでゐるので、そつとグリーンボールドに歌だけ書いておく」美しい光景である。

此處を讀んで僕は成城幼稚園に居た時の事を思ひ出した。その頃、お茶の水幼稚園へ何かの會で御伺した折「大

塚さん、組をお持ちださうですが、おはなしをよくなさるでせうね。毎日？週に何回位？」と尋ねられた事がある。用意はしてゐても丁度みんなを集めておはなしをするに適當な機會がなか／＼見出せない。僕の組は僅か十三名の小數だつたが、それでも遊びの興味の動きと没頭の程度とが各々の個と群とによつて違ふので、計畫的にさあおはなしとやるのは雨でも降つた日位、一週一回か二回位のものだつた。前は自分も度々したいと思つてゐた事もあつたが、實際に當つて子供に忠實でありたいと思へば、そう度々出来るものではない。豫定はあつても現前の生活姿態の動きに應じてこれを活用してゆくべきである。保育者の有する知識、經驗、性能等すべてが未發のまゝに靜かに時を待ちつゝ、我を虚しうして子供の心の動きに従ひつゝ動く時に生ずる必要に應じてのみ、間髪を容れずして活用されて行く處に、方法に於ては消極的にして教育者としての働きが過不足無なき十全の實効を擧げる事が出来るのである。

二一頁の負け嫌ひのM子さんは「いゝわよ、びりだつて、上手な人は、後で書くのよ」とは、よくもこんな思ひ返

せたものだといぢらしい氣がする。又、何だか女の子らしい感じがする。これが元氣な坊ちやんだつたら泣くか怒るかして亂暴な破壊的行動に出やしないだらうか? 「一番先に!」と熱心に求める生活々動の趣く處、その『純』を斯かる場合どう伸せばよいだらうか。此點特に倉橋先生の御教示を乞ふ。

二六頁の「後に下げるお人形」とは實に細かい所迄觀察注意が行届いてゐますね。或はこのお子さんの興味が特にこういふ方に敏感なのだらうか。

二八頁の川の組の日誌の始めを読んで「直接行動と號泣」に又成城での生活を思ひ出す。「口よりも手が先に出る喧嘩好き」といふ様に江戸ツ兒の手が早い、少しも油斷のならぬのには僕も閉口した。それを「個別より群へ」と遊びの愉快を味はしむる事により内面的に勢力の淨化整調に努められつゝある苦心の程に敬服する。二九頁より三〇頁への没頭した姿が殊に懐かしい。

三二頁「遊戲。しないと納まらない。」とはいふね。

三四頁「朝は一人づつに言葉をかけたきもの」

三五頁「今日も朝の一時を大騒ぎに過すことゝ覺悟して來たるに少々氣ぬけの形」。いづれも斯道に精進せられつゝある新庄先生の意氣込み——誠意のあふれたる御言葉である。先生の日誌を讀んで三浦修吾先生著「第二里を行く人」(玉川學園發行)が思ひ合される。

四五頁の「少し形勢不穩のため……どこで遊んでゐる人も皆見えてよい」の様に、兩方に氣を配る事が必要だが、實際には多年の經驗による熟練の上に更に努力を要する事だとしみじみ感ぜられる。及川先生はお母様よ「飯事のお母様だけでなく、ホントによい幼稚園のお母様となつて子供のお相手をしながら、あのしとやかな慈眼を以て君臨してゐられる様が偲ばれる。それなのに「そのうちにMちゃんか……大さわぎにかはつた」とは? 「同時に二ヶ所以上にて事故の起る位、困つたことはない」實に保育はどこまで行つてもむづかしいものだ、しかし僕は思ふ、物事は結果に依て評してはならぬ。其人の其事に對する態度如何が大切なのだ。自分が子供たちを豊かに見守りつゝ十分の餘裕を持つてゆつたりしてゐられる場合と、子供たちに追ひ

廻されるやうに漸く其要求に應じつゝ辛うじてやつて行ける場合と、他からは大した相違も見えないだらうが自分の主観からは實に雲泥の相違ですね」と先輩の一人が云はれた事を思ひ出す。

五二頁の「唱歌や遊戲のあつた日には、いつでもあとで考へさせられる」から次頁上段へかけて、この問題についていつも御苦心の様である。年少組こそ未分化の層深き時期！この時期の幼児の性情に受くる影響感化が保育の淵源を爲すものであるを思はゞ、この問題は極めて重大である。原始的生活性を十分に發揮せしむる事を殊に都市の幼稚園に於ては主とすべきが故に、年長組の様な一齊にする律動表情等の所謂遊戲はむしろ大に削減して、貴重な時間と自由遊に譲るべきであらうか。御教示を乞ふ。

池の組の日誌にも「製作のよろこび」があふれてゐる。前に述べた讃辭を同様に捧げたいと思ふ。その中にて特に僕の心をひきつけたのは五六―五七頁の地下トンネルの製作である。これについては僕には懐かしい思ひ出がある。小學二三年の頃だったか、郷里から電車で二十分で行ける

濱寺の海岸近くに家を借りてあつたので土曜の午後から出かけて日曜終日、こうした「穴掘り」に夢中だった。親戚の子供たちが丁度よい遊び相手だったので實に面白かつた事を今でもよくおぼえてゐる。日曜の晩迄興盡きずして泊り、翌朝起され、ぬむい目をこすつて登校した事も度々あつた。おかげで「没頭性」の例として砂遊びの事を話されると衷心共鳴するし、又幼稚園でも主として砂場で子供と共に遊ぶ愉快が今迄續いてゐる。

以上、僕が諸先生の日誌を読んで感じた所考へた所等をそのまゝに述べさせて頂いた。萬一誤解して居る様な事あらばすぐ訂正して頂かなければならない。更に斯く感じ斯く考へた所を糸口として、筆者たる諸先生方から再三いろいろと聞かせて頂けるものと期待する次第である。斯くして互に本誌を守り育てゝゆくことにより、日本全國幼稚園關係者の聯絡提携の機關たる本誌の使命が益々發揮せられ『吾等の雑誌・幼児の教育』として日々の保育の糧となるであらう。吾人は全國各地に心を同じうして毎號本誌を愛讀せられつゝある讀者諸士と共にその日の來らむことを待望しつゝこの項を終りたいと思ふ。(昭和七、八、二九)

幼兒詩の問題

多田鐵雄

今度新たに北原白秋氏によつて日本幼兒詩集なるものが編まれたが、この幼兒詩と云ふのが「二三歳から幼稚園期

までの、即ち文字を綴る前の子供たちが、偶發的に口の言葉で詠つた詩」と云ふ意味であり、この詩集が「數年來全

日本の母人と呼ばかけて、多くのかゝる幼兒詩を募り、その中の傑出したもの約四百篇を選集した」ものであるとす

れば、これは當然私等幼兒保育の一端にたづさはる者に取つては一考に値ひするものでなければならぬ。されば私

はこゝで、この本を中心にして幼兒詩に就いて考へやうと思ふ。もつとも、こゝに幼兒と云ふのは主として幼稚園期

の子供を指すのであるが、その前後一二年のものが含まれても差支へない。即ち兒童の韻律時代から想像時代の初め

頃までを指すものである。

最初に問題となるのは幼兒の詩とはどんなものであるかと云ふことである。

幼兒の言葉が往々立派な詩であることがある。

牛（三歳の男子）

はだかの

もうもうがゐるよ。

×

キシヤボツボ（四歳の男子）

×

パウヤト、オデチャシト

キシヤボツボヘノツテ

オホフナデ、サンドウイツチカツタトキ

セイヤウクワント、デンシンバシラガ

ミエタ。

きしや (五歳の男子)

きしやはえらいな

とうちやんよりえらいや

かあちやんよりすつとえらいよ

もうちろいうみがみえた。

以上は、それに就いて「三歳の男の子が牧場の牛をのぞいて、その母親を顧みた第一の言葉です。これは詩です。

かた言のやうではあるが、この中にどれだけの無邪氣な驚異と愛情と憐愍がありますことか。つくづく考へて欲しいと思います。あゝ、はだかのもうもう。空は晴れ草は幽かに青み初めても、まだ風は寒かつたでせう。さうしてその田舎の景色もその幼い者には何とも云へず珍らしく感じられたでせう」「まるでアンリー・ルツソオの風景畫でも見るやうではありませんか」「汽車と父母とを比較する突拍子な無邪氣はとても大人の思ひもつかぬ事で、思はず破顔されるではありませんか」と北原氏が評されてゐるやうに或ひは觀察の新鮮、或ひは感受力の鋭敏、或ひは着想の奔

放によつて、實に美事な詩である。

多くの人は直ちにこの事實を以つて——勿論幼児が意識して詩作するのではないことを認めた上ではあるが——幼兒を立派な詩人だとするかも知れない。この編者北原白秋氏にしても、子供研究講座第八卷自六三頂に於ける葛原しげる氏にしても、その本意は元より他に在ることであらうが少なくともそう解釋され易い云ひ方をして居られる。がこの誤解され易い點こそ、究明されてゐねばならぬ事柄であるべきである。

蓋し、大人が單に受動的に、云はば子供の世界の門外漢として、其處に在る詩として、その詩を味ふ限りに於ては勿論幼兒乃至子供を詩人なりとしてゐて、それで結構である。然し乍ら、幼兒の人格から湧き出したものとして、その詩を幼兒自體と結び付けて考へる處の者、云ひ換へればそれが保育者にせよ、藝術教育家にせよ、何等かの點で幼兒と關係し、幼兒に關心を持つ者の立場に在る場合には、特に以上のことが重要なことであるはずである。

幼兒を少しでも知るものには自明のことであるが、幼兒

に取つては周圍の凡ゆるものが珍らしい、又その本體を知りたく願ふ不思議な存在である。何一つとして注意を索かないものはない。このことは自然に所謂詩人の眼を持つことになる。又幼兒には事實と想像との區別が判然と出来てゐないから、自在な空想、架空の生活を擅まゝにし、現實と非現實の世界を自由に出入、交錯することを恒とする。

このことは幼兒が自然に所謂詩人の心を持つことになる。最後に、幼兒は言葉の表現法に拘抵しない。「牛が」と云つただけで、自分では「牛が自分に笑ひかけてゐる」ことを表現してゐるつもりでゐるし、又、「牛が啼いてゐる」意味を云つたつもりでもゐる。この意味で幼兒の言葉は含蓄のある言葉である。即ち所謂詩人の口を持つことになるその上に持つて來て幼兒は韻律を殊の外愛してゐるのである。

然し、韻律を例に取つて見てもこの幼兒の韻律は、必ずしも詩の内容と關聯を持つものではない。「子供が早くから韻律愛好の念を示すことは、周知の事實である。未開人が、詩を通しての自己發表の階層に達するに先だつて、言

葉を伴はない、單なる動律によつての自己發表の手段を發見したやうに、子供も、幼い時代に於て、詩を持つに先だつて、既に動律をもつてゐる。この韻律愛好の情念が強いために、子供たちは屢々童謡の内容が殆んど空虚であるにも拘らず、こゝに展開する韻律節奏のためにのみ、これを酷愛する。

向ふの岡に樹が一本、

樹の上に枝一つ、

岡の上の樹、樹の上の枝。

枝の上に巢が一つ、

岡の上の樹、樹の上の枝、枝の上の巢。

巢の中に卵が一つ、

岡の上の樹、樹の上の枝、枝の上に巢、巢の中の卵。云々。

の如きが、子供に愛好せられるのは、全くその節奏の面白さに存する。この點自然民族の大人たちが、自分にも意味の分らぬ詩を好んで歌ふ心理と全く同一である」(松村武雄氏、子供と文學)とあるやうに、偶然かどうかはとも

かく、韻律が幼兒の詩の内容に適はしく表はれる場合もある代り、韻律のためのみの内容の無い詩が口に上りもする感覚にしても、觀察にしても、鋭いものがある一方、大人には陳腐なものを、陳腐なまゝに感じ、観てゐる場合もある。着想が奔放自在である一方、荒唐無形でもある。言葉に含蓄がある一方、表現がその内容を示してゐないこともある。要するに幼兒の世界が詩の世界であることは事實であつても、それは幼兒が詩人、又は詩人の卵であることの意味にはならない、云ひ換へれば、所謂詩人のとは決して詩人のと云ふことではないのである。

幼兒の詩作が意識的になされたものでないことを認め、又、「幼兒に詩作を強要してはならない」（北原白秋氏）とした上で、なほ幼兒は詩人なりとしてならぬ理由は此處に存するのである。

されば鈴木三重吉氏編輯の子供文學雜誌、「赤い鳥」に於けるやうに、同じ子供でも、より大きい學童を中心にしてゐる場合には問題も自ら異なつて來るが、即ちそれが小學一年生であれ、小學六年生であれ、そこには詩作すると

云ふ自覺が在る故に、従つて鑑賞の態度、批評の態度も生じて來る故に、その學童の創作品を取扱ふ場合にも、童心と云ふことを心に置いてさへおけば、それらを小さな、又は發達すべき詩人として、純藝術的な立場から批評しても將又、純藝術教育の立場から指導して行つても、過誤ではないが、このことを幼兒詩にまで、移すことは甚だ危険千萬のことである。

幼兒詩を観るものは幼兒特有の想像力や、韻律愛好性、感受力を知ると共に、常に幼兒の誇張、獨斷、無自覺模倣をも恒に考量してゐなくてはならない。その意味で、反面から見れば、幼兒詩は幼兒の本體を理解把握するための有力な材料としての存在價值を有つものと云へる。事實、例へば、

南風（三歳の女子）

あの南風はこつちへ吹いて來て
赤ちゃんに吹きました。

風、網戸から吹いて來る。

註。夏のあひだ、子供室の前のガラス戸を網戸に入れかへました。もう、あかりのつく頃、由伎子はそこで、赤ちゃん（お人形）を寝かしつけてゐたのです。父より。

この詩に於て、數へ年三歳の子供が南風と云ふ言葉を使つてゐる。三歳の子供に東西南北がわかる筈はない。又、春に吹くのが何風で夏吹くのが何風と云ふ蓋然的な事實をも知るはずがない。この子供は、恐らく、單に唯、風と云ふつもりで南風と云ふ耳で聞いて鶴呑みに覺えてゐた言葉を使つたにすぎない。又、この年齢時代の幼児は完全な文章を作り得ない。（武政太郎氏、日本の子供、百一頁以下参照）例へば「せんにボツボ見た」と云ふことを、「見たボツボ、先、見た」と云ふ風に表現するのが恒である。従つて、この詩の、「吹いて來て」「吹きました」「吹いて來る」も、この子供がそう云ひたかつたのではなくて、そう云ふ風にしか云へなかつたのだとも考へられる。して見れば、この詩を見て無條件に詩としての美しさを見ることはむしろ過誤にちがいないではないか。むしろ、この詩によつて或ひは、幼児の言語の發達段階を考へ、或ひは、幼

兒が自由に自己の流儀で委細かまはず南風と云ふ言葉を受け入れ、それをそのまま使馳するその心理を観察することが大切なことであるとも云へる。

故に「然るに兒童はこの點では生れながらの詩人です。彼等の魂は純真で、怪しい驚異と潑刺とした感動にみちてゐます。そして彼等の發する一言一句は、優れた詩人のそれのやうに、人々を化石の眼から呼び覺す力を持つてゐます」（西條八十氏、兒童文學）とする態度は幼兒詩には直ちに當てはまらないことで、幼兒詩である限りその詩としての價值を置く場合に在つても、その重點を換へねばならない。即ち、

面白い晩（六歳の男子）

やあ、母ちゃん……

たいへんなもやだよ、

おうちがぼやつとしてらあ

電氣もぼやけてるよ、

よそのをぢちゃんが

ふわふわしてやつてくらあ、

やあ母ちゃん

おもしろい晩だね。

六二

幼児詩として最高標準を置き、又それだけで満足して留まるべきものと思はれる。

附記

上例の如きは、もやの風景をキヤツチすることの確實さその表現の鮮やかさは三嘆に價するものであるが、常に私達は、幼児からかゝる藝術的香氣高いものを得ることを喜ぶ前に、

ペリカン (六歳の男子)

日比谷公園の

きれいなお池に

ペリカンと鶴とゐたよ

ペリカンも鶴も

岩の上にゐたよ。

ふんすゐの水が

ペリカンにも鶴にも

かかつてゐたよ。(下略)

の如く、平明に、觀察をそのまゝ表現し得てゐるものに

尙、岩波講座教育科學第八冊に於て葛原幽氏が「童話と童謡による兒童觀察」なる題目の下で、童謡のデニヲハによる兒童の智能、性格の觀察を企てて居られてゐる如く、そこでは未だ方法的な解決は與へられてはゐないが、然し、よきヒントを示してゐるものと思ひ、こゝに一言する次第である。

以上

世界人形行脚記 (五)

——(世界教育大會より歸りて)——

フレイベル館社長 高 市 次 郎

▽英國の避暑地△

いそがしい旅ながら、倫敦の古い寺院、博物館、寶殿、天文臺を見物したうちに、ブライトン海水浴場にいつたことも昨今の暑さに思ひ出したので茲に記して置ませう。

ロンドンから約三十マイルを隔てたブライトンは海水浴場として誠によい所です。

一體、歐米の海水浴場は何れも遊び道具が頗る多數に用意されてゐて、人々はみなこれ等遊び道具によつて嬉戲してゐます。米國でも大きい海水浴場を二箇所ばかり訪れてみましたが、海岸から海中へ棧橋の如く出てゐる所が凡そ二哩ぐらゐの距離をへだてゝ出來てゐます。その間に、そ

れはく大仕掛な遊び道具が設けられてゐるのは、たしかに私たちには驚異すべき光景でありました。何れも有料であつて、それこそ随分奇抜なものがあります。運動的なもの、ゲーム的なもの、力わざ的なもの、おみくじをひくやうなもの、乃至は所謂エロ的なものにいたる迄、實に規模悠大にして多種多様で、數ふるに遑がない。米國コニーアイランドの海水浴の如き、斯うした大規模の設備ある海岸に多數の人々が群れ娛んでゐます。

私が此のコニーアイランドを訪れた時など、約百萬人を突破するといふ素晴らしい人。これ等の人の飲食する店もならんでゐるし、日本人で斯うした遊び道具のゲームに對する賞品を買ふ店が米國には相應に多い。

ところで英國のブライトン海水浴場には、米國のやうな大きな建造物的な——假例へば空中遙かに高くたかく大圈を描いて悠々廻轉する展望車とか、インクラインとか、人の肚膽をひしぐほどの大仕掛なものは見當らないが、やはり、遊び道具は何百種となく備へられてゐます。一ペンスを投ずると、二尺四方ほどの舞臺の戸が開いて、時事的なことや、歴史、漫畫等を、面白おかしく人形が演つてゐるまた、おかねを入れると玩具が出てくる仕掛けのものや、近頃我が國にも見られる起重機でお菓子や鶏卵を採り上げる仕掛の如きものが澤山あります。私も是等の多様の遊び道具を一々やつてみました。が、その種類の多いのには全く閉口して中止してしまいました。英國の子供たちも他國の子供と同様、私が次ぎつぎと、是等の遊びを實驗してゆくと、あとからあとから雲集して來て私と共に見物してゐる。

斯く、英國に於いてもその機構の壯大な點に於いて米國に及ばぬ乍ら、その海水浴場に於ける遊び道具の設備の大掛りに、而も到れり盡せりに多種多様に設備してゐる所は米國のそれと同様、驚くばかりであります。

此のブライトンの海水浴場は、海岸の風致も至極よろしく、一方は美しい建築のホテルが並び、海岸側は緑の美しい芝地（ローン）で花壇になつて居り、道路がアスファルトで坦々として清々しく、所々に池があり、子供の遊び場としては誠に申し分ない。然し、あの、我が國固有の海岸美、白砂青松の風趣はもとめられない。

以上の外に、倫敦市中に、頗る大きいプールがあり、何れも入場料を拂つてはいるのでありますが、スタンドは二段に周圍に並び、普通觀覽者は此のスタンドで冷い飲料に喝を癒し乍ら、下方に見ゆる廣いひろいプールに、とび込んで泳ぎ乍ら嬉戲する男女の客を觀るのである。纏て客は二組に分れてウォーターボールをはじめる。時には怒濤澎湃と云つたやうに、ウォーターの仕掛けで、大浪が寄せてはかへし、寄せてはかへし、渾に打ち上げて白い飛沫が散り、恰も自然の海岸に於ける渾と同様の状態となり、男女とも嬉々として此の大浪を乗り潜つて泳いでゐます。

避暑地のはなしは此の邊で筆を擱きますが、兎に角、米國も英國も海水浴場には有料興行物が澤山にあり、浴客も

我が鎌倉あたりよりも約百倍の人で海岸を埋めつくす。
これ等の人々は何れも自動車でやつて來てゐます。

さて、愈々佛蘭西に向ふのですが、英國のフォークストン港を出發したのが朝の八時。船はドヴァ海峽を佛國のブーロンに入港、それより汽車で一路巴里へ、巴里着同日午後四時。

▽佛國の過去の人形△

フランス人形！ 佛蘭西はお人形の國、それこそよい人形がある。

佛國に於ける人形の製作は獨逸よりも夙にはやく、随つてその製作技術も優れたものでありました。頭は瀬戸で拵へ、眼球は硝子をもつて巧みに實際を模し、所謂フランス式眼球と呼ばれた程に、誠によい目が出来る。顔面の表情もまことに精巧で衣裳も整つてゐて、またなく麗はしい。過去は、世界でも佛國が一番よいお人形の製産地として知られてゐました。随つて、その價格も頗る高價でした。その爲めに誠によいお人形ではあつたが、販路は展げなかつ

たのです。

此處に眼をつけたのは獨逸であります。

獨逸の人形師は銳意、佛國のお人形にならつて、眼球も獨逸式に安く而も良い眼を作り、顔の表情を巧みにして、價格も思ひ切つた低價で世界に販路を求めたもので、爾來獨逸人形は各地に見られるやうになりました。茲に鳥渡申添へたいのは、嘗て本誌三月號にも記しました通り、よいお人形の顔は必ず瀬戸で出來てゐることであります。

さて、以上のやうな知識をもつて渡佛した私は、實際に彼の地を踐むに至つて、全く失望してしまひました、即ち前に述べたやうな所謂フランス人形は巴里に於ける有名なデパートを訪ねたが一つも見當らないのでした。いかほど尋ねても、もう過去の所謂フランス人形なるものは無いのであります。掘り出し物をさがすやうにして辛ふじて一二デパートからさがし出して買った二三のものがありますが、これこそ、實に過去の所謂フランス人形と云はれた尊いものでありました。高さ一尺二三寸、手には革手套をはめ、衣裳も四五枚を重ねて着附も正しく、美しい絹ストツキン

グに革靴をはき、羅紗の帽子を冠つた實に精巧なものであります。

但し、これ等のフランス人形は、時代の推移、好尚の變化等から觀はなされて

あはれそのデパートの倉庫の隅に過去の榮華を顧みて泣きぬれてゐたのです。ですからそのデパートでは全く賣りものにならない品でありました。精巧な衣裳もあはれに古びてゐました。

是等のよいお人形の瀬戸の頭は價が極めて高いばかりでなく、毀れ易いのが大なる缺點で賣れなくなつて了つたのです。



寫眞説明——現代の佛蘭西人形。顔面は布目の細かいジョーゼットその他羅紗、フェルト等で作られた丈夫にして輕い人形、眼は何れもかき入れたもの、皮膚の所は實際の子供の筋肉のやうに柔軟で反撥力がある。

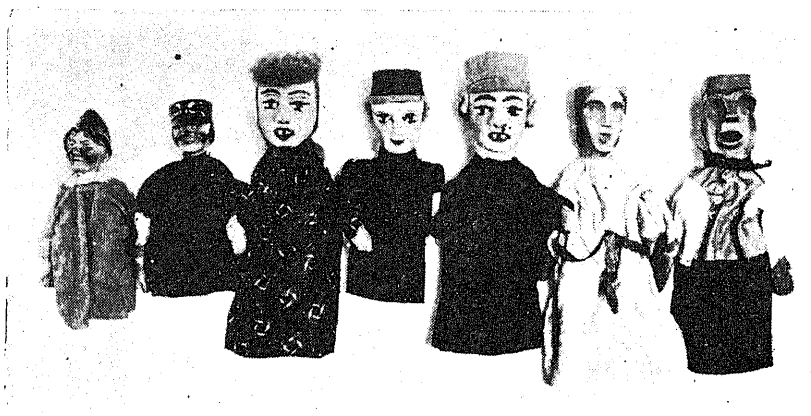
▽佛國現代の人形△

前項の如き缺點から、近頃では何れも安く而も丈夫なものが出來てゐます。頭も布で包んだ柔かい頗る丈夫なものであります。顔は實際の子供のやうに、顔面の凹凸を摸してふくやかに、極めて細かい織目の佛蘭西縮緬で頭部全部を覆ひ、その内部が實際人物の肉體ほどの柔軟さで、而かも筋肉の如く弾力を帯びてゐるなど、實に巧みに出來てゐます。これ等は現代佛蘭西人形の特徴の一つに擧げられませう。そして何れも表情が巧みであつて、眼は従前の如く硝子を使用したものは殆んどない。茲に掲げた寫眞は即ち現代のフランス人形で、頭部顔

面は前に述べた如く、衣裳は何れも羅紗で、缺けたり壞れたりする心配は少しもありません。

▽フランスのギニョール△

佛國では、現今も益々指にはめて踊らせる人形、——ギニョールが盛んであつて、諸所に賣られてゐます。巴里のシャンゼリゼエの大通りのマロニエの並木の下に、小さい家を据ゑて、毎日午後三時頃から、お爺さんがギニョールを踊らせて子供に見せてゐるのを見かけました。舞臺といふのは、一間四方のもの、此のお爺さんは特に許されてゐるものと見えて、他に此の様なものを見かけませんでした



で部頭の彫木は個二の方右、ルーヨニギの西蘭佛——明説眞寫
に彫木し屬に代次のそは個三の央中、のものの代時い古的較比
方左、品作なウチクエフエたし彩賦を面顔で料塗き如の粉胡
。のもしネは部頭でルーヨニギ國佛の代現はつ二の

が、それはそれは佛蘭西の子供達も面白くいつまでも見てゐます。

そのギニョールの佛蘭西獨特のものは茲に掲げました寫眞で、右の方の二つは本彫の顔で、それこそ藝術味豊かなもの、比較的古いものであり、中央の二つはその時代に専ら流行したギニョールであります、その簡単な顔の構造と扮らへなぞ、一定の距離をとつてみると、いかにも効果的なもので、その製作の巧みさには誠に感激に堪えません。その左の方のもの二つは現在行はれてゐるもので、頭は練り物の硬いもので、顔なぞ甚だしく寫實的になつてゐる所など見逃し難い所であります。

▽佛蘭西の童畫家△

英國に於いて、キンダーブックへ毎號揮毫を依頼したヘレン・ジャコブス女史の如き畫家を佛國に求めることも、私がこの度の旅行に加へて置いた、仕事の一つでありました。英國と同じやうに巴里でも随分苦心して搜したもので、先づ手とりばやく、佛蘭西の繪本から物色しました。先づ巴里隨一の大きい教科書店 Librairie Hachette を訪ねました。その御主人はもう六十歳ほどのお婆あさんで、私と對談してゐるうちにも頻々として電話がかゝつて來て、一々そのお婆あさんが應對する、また、下僚の人が決裁を仰ぐ書類を持つてやつて來る、それはそれは目まぐるしい程に忙しいが、何れもテキパキと處理して、また、私と對談する、その事務的な點は誠に驚くばかり。此のお婆あさんが、「左様で御座います」といふ *Ani, Ani* の強う語調が、まだ私の耳に残つてゐます。それほど忙しい、而も憂樂たるものでありました。

一體、佛蘭西は美術の國、而もその繪畫は世界的に有名であり、従つて、いくらでも良い童畫家があると思ふと、案外さうでない。佛國の畫家といふ畫家は、何れも現近一流に評價されてゐるマチス・セザンヌ・ピカソ、乃至ルオー

とかいふ人達のあとを、只管に精進して純正美術的繪畫の製作に奔命してゐるので、童畫は殆んど書いてゐません。出版物の子供の繪を畫くのは主として英國畫家であると聞いて、實に呆然たらざるを得ないのでした。

幸に佛國純粹の童畫家で、自他相ともに許す優秀作家としてフェリックス・モリウ氏 (*Monsieur Félix Jorionne*) を日本のキンダーブックの爲めに推奨するといふことで、いろ／＼その作品を觀ても面白く思はれたので、今後をキンダーブックの爲めに揮毫を依頼して歸へりました。キンダーブック誌上、度々これまでに出したから最早やお馴染の方もありませう。巴里は流石美術の都、藝術の殿堂だけに各國の藝術研究の人々が多く、我が國でも殆んど美術、音樂の方面の方々二百餘名も留學してゐることでした。

×

×

佛蘭西は遊覽客の多いことは、世界第一で、クツク社の *Sight seen Car* 毎朝何十臺といふほど、各國語別に出ます。従つてお土産として出來てゐるものが巴里には澤山あり、町と町にはお土産屋が軒を並べてゐるのも見逃がせない事です。

夏の幼稚園

東京市京橋昭和幼稚園 白根美智子

○
番町幼稚園で始めて「夏の幼稚園」をお催しになりました。それから漸く三年。その僅かな間に「夏の幼稚園」といふ言葉は、若葉の頃から同じ道行く者が集る毎に話題となり、研究されて、一年毎に其の数を増し、今年は京橋区内だけでも四つの公立幼稚園で所謂「夏の幼稚園」を催す事になりました。

當園は文化の華咲く所と云はれる繁華な都の中心に地を占めて居ります爲、附近には小公園はおろかほんの小さな空地さへ見られず、遊び場所を持たない子供達が往々痛ましい犠牲となりますのを平素から本當に歎かはしう存じて居りました上、園児の家庭の殆ど全部が年中忙がしい商家

で、子供の爲に海へ山へと出掛けるいとまの無い家が多く又一般に買喰の惡癖間食が大層多く、幼稚園に行つてゐる間は身體の調子がよいのに、お休みになると直お腹をこわすといふ聲を始終耳にして居りますので、昨年試みに夏の幼稚園を催しました處、保護者の方々から大層喜ばれたのに力を得、本年も又催しましたのでございます。

同じ「夏の幼稚園」とは申しながら番町のなどに比べますと夏の幼稚園と名づけますのさへおこがましい程度のものでございますが編輯部からのお勧めもあり、又是非先輩諸姉の御批評、御指導を仰ぎ度いと存じまして書かせていただく事に致しましたのでございます。

昨年は八月十日から同二十九日迄三週間致しまして最後の日には保護者の御來園を乞ひ色々御意見を伺ひましたところ、

一、期間が少し長過ぎる様に思はれる。

二、もう少し早くから始めて早く切上げ、秋學期迄に相當日數を置いていたゞきたい。

等の希望がありましたので、本年は七月上旬開催に先だちお母様方のお集りをいたゞき、期間、時間、會費等の點を色々協議致しました。その結果

一、期間 七月二十五日より八月六日迄二週間

註 イ、あまり期間が長過ぎると途中で海や山へ出かける様になるから見合せようといつて参加しない人がありはしないか。

ロ、切角子供が夏休み夏休みといつて楽しんでゐるから四五日お休み氣分を味ははせ、家遊びに飽きた頃から始めるのが適當ではないか。

ハ、あまり長く間を置くとはじめ一寸おつくうがる子がありはしないか。

等の意見を總合して決めました。

二、時間 午前八時より十一時迄

もつと朝を早くといふ意見もありましたが、又その方が望ましい事ではありますが、實際は環境上どんなに親が氣をつけても夜更かしし勝ちだからといふので八時に致しました。

三、會費 六拾錢 間食代 水遊び玩具 其他雜費

(夏の幼稚園の爲の經費は此の外には一錢もございません。)

扱て、募集して見ましたら園兒總數八拾餘名中參拾六名の申込がありました。此の中四名は何處へも行かない積りで申込んだものの本年は殊に暑さが酷しうございました爲避暑に出て、一日も出席致しませんでした。比の他も大抵期間中に一度は一日二日の涼を求めて近海へ出かけましたので大抵一日參拾名足らずの出席でございました。

次に一日のプログラム。

朝。自由あそび

八時前後にはみんな海水着、海水帽の入つた袋を提げ、中には大きなうきわや水上ボールを持つて陽に焼けた血色

のいゝ頬を輝かせて門をくぐつて参ります。「お早う」がすむと直ぐシャベルやざるを持つて砂場へ馳け出す、お池の前で水鐵砲をする、日蔭で本を讀んで貰ふ、昨日の續きの積木に飛んでゆく、みんな夢中になつて暑さを忘れ、いつもは小學校のお兄様お姉様で一ぱいの運動場を今日こそは我が物顔に遊ぶ、遊ぶ。中には「先生かけっこしよう」と汗みづくの先生を、反射の強いアスファルトの運動場へ引張り出す兒もあります。一走りして玉の汗を拭く間も待たず「先生もう一度」「もう一度」

かうして一しきり遊んだ頃遊戯やお話を致します。

水 遊 び

九時少しまではつて漸く陽射しが強くなると待兼ねた水遊び。屋外のプールでしたら申分ないのでございますが、當園では屋内のシャワーバスを使ひます。廣さは保育室より少し狭い位。三十分程水を出し放して置いて漸く子供の膝迄位になります。もつともつと澤山、せめて一尺五寸位の深さにと思ひますが、毎日全部水を取換へますのであまり贅澤は申されないのでございます。

水遊び！ 今迄のどんな遊びでもこれ程すべての子供達

を喜ばせ夢中にしたものはなかつたでせう。

つまらないゴム製の玩具もほんとうに喜んで迎へられました。けれども餘程氣を付けませんと子供は唇が紫色になつても尙出ようとは致しません。それで始めの日に、一寸（一人一人に就いて保姆が時間をはかつて約二分）入つたら必ず日向に出て充分身體を溫め、又はいる。こうして一日三回迄を嚴重に約束して置きました。最初はぬぎ着が大變でございましたが二三日たちますとお友達同志ボタンをかけて上げたりかけて貰つたりで、それすら水あそびの一つの楽しみとなつた程でございました。

水から出ますと乾いたタオルで身體中を摩擦してやりま

す。萬邊なく汗知らずをつけてやります。その間に一人の保姆は女兒に手傳はせて皆の海水着を洗ひおやつの間を陽にあてて雫をきつておきます。かうして暫らく御本を見たりお話をしたりして靜かに遊びます。

間 食

水あそびの興奮に軽い疲れを覺えた子供達。

軽いオセンベイ一枚にキャラメル二つ、又は玉子パン一個にドロップス三つ位の本當に軽い間食をどんなに喜んだ

事でございませう。銘々皿洗ひも楽しみの一つ。暑い時でございますから選擇は餘程吟味しほんの少しに一回一人参錢位をあてました。

お菓子をいたゞきながら昨日行つた海のはなし、田舎からのお客様の話などが亂れ飛びます。話し中に思ひ出してか大急ぎで喰べ終つて、黒板に走り、見て來た海を、山を畫き始める子供があります。

みんな「御馳走さま」が濟むと恰度十一時。

お 歸 り

「さよなら」「またあした」

今年はお天氣に恵まれて來る日も來る日も快晴、快晴。毎日こんな事を繰返して居りました。でも少し曇りで水あそびを止めた日が三日。その三日の中の一日は屋上のテントの中で過し、一日は運動場の一隅のよしづ張りの日覆の下で人形芝居に興じ、一日は木蔭で樂隊遊びに水を忘れて過しました。又或る日は大盥に入り切らぬ程大きな水を戴いて歡聲をあげた事もございました。

夏の幼稚園の爲の經費が少しでも有り、又私共三名の保

姆の他にもう少し人手があつて、期間中に一度でも外へ連れ出す事が出來たらどんなに子供達も喜んだ事だらうと思ひますが色々な點で、本年は實行出來ませんでした事を大變残念に存じて居ります。

夏の幼稚園は「樂しかつた」の一語に盡きる様に思ひますけれど、でも床に入りましてから「今日水からあがつた時K子ちゃん的身體が少し冷たかつた様だつたけれど冷え過ぎではなかつたかしら」等と考へますと心配でおち／＼眠れない事もございました。幸ひ昨年も今年も一人も病氣にならず無事に濟みました事を、心から感謝致して居ります。

園醫の原田先生がお忙しい中を屢々お訪ね下さいまして色々御心配下さいました事はどんなにか心強く嬉しうございました。

平素の保育とは何かしら違つた、楽しい本當に充實した「夏の幼稚園」生活を思ひます時、もつとく長くしてゐたかつた！としみじみ思ふのでございます。

今も蒼い蒼い空を眺めて今迄はあまり考へても見なかつた夏休み中の子供の生活の一面、「水と戯れる姿」をほゞえましく想ひ浮べて居ります。

(昭和七、八、十五)

夏季學園

日本大學幼稚園長 山田 仲子

序

夏季學園は、つとめて自由であることを欲します。夏季學園は、何時如何なる所に於ても、大人の世界といふ色調を弱めたいと欲します。本園兒の夏季保育と併せて一般幼兒をも收容し、倉橋先生、その他番町小學校長の御指導と御鞭撻とを得て、第二回の夏季學園を開催いたしました。

實施日課表

時組		幼稚園部	小學部	備考
午前七時三〇分	ラジオ体操 夏季學園の歌	同		
八時〇〇分	健康診断	同		
八時三〇分	お仕事		學習輔導	
十時〇〇分	食事運		動	

目的

夏季に於ける幼兒の保育は、清新にして潑刺たる生活形態を必要とします。土を與へ、水を與へ、そして大氣に呼吸する自由を與へることによつて、身心の整調をもたらし

十時三〇分	プール水遊び	プール水泳
十一時三〇分	歸宅準備	晝食
十二時〇〇分	食後お話	
午後一時〇〇分	休息午睡	
二時〇〇分	自由遊び	プール水泳
三時〇〇分	間食	
三時三〇分	歸宅準備	

良習の助長を可能ならしめることが出来ます。

かうして學園は、本園兒の夏季保育を健全に進行せしめると同時に、更に一般の低學年兒童をも併せ收容し、より社會的にこれが要旨の徹底を期するものであります。

施設概要

一、場所 當園内

一、期日 八月一日より三週間

一、資格 本園兒及び一般の滿五歳より尋常三年までの兒童

一、定員 本園兒の他一般から四十名

一、費用 四圓

おやつその他一切の費用を含む。

設備

園舎、園庭、各種運動具、プール

プールは昨年第一回の學園に際し新設したもの。

〔位置〕 かぎの手の園舎に添ひ、南と東とにひらけ、充分に日光をうけることが出来ます。

〔形状〕 廣さ十六坪、深さ七寸より二尺まで、底面傾

斜尋常四五年までの數種の泳法可能又幼兒にも危険ありません。

〔用水〕 地下三〇〇尺の絶對無菌認可飲料水をモーターにより供與し、又絶えず噴水により新陳代謝を計ります

〔收容兒童〕

幼稚部 二八名

本園兒 二二名

一般幼兒 六名

小學部 三五名

一學年 二〇名

二學年 五名

三學年 六名

四學年 四名

弟妹の都合により、小學部に四年生四名を入園せしめました。

〔學校別〕 杉並第五、杉並第一、杉並第七、桃園第三、

成溪、無藏野學園、麴町上六、小石川金富、千駄ヶ谷第三。

〔入園許可〕　トラホーム、皮膚病等の傳染病に重きを置き、身體検査の結果、右の六十三名を決定す。

〔保育關係者〕

園長　一	主事　一
保姆　三	囑託　三
補導　六	囑託醫　二
使丁　一	

學園の一日

朝七時三〇分、ラヂオ體操が始まります。輕快なピアノの音律が流れ、號今が弾みます。そして子供達は躍ります。先生と子供と、そのすべてを包む朗かな雰圍氣、そのよさの中に學園の一日の生活が始まるのです。先づ健康診斷、こゝでは、その日の身體の故障、水浴の可否が檢べられ、それがすむと、幼稚部は豫定の保育へ、小學部は學習へ、夫々お部屋で本を開き、鉛筆が走り作業がつぎきます。午前十時、一しきり賑やかなさゞめきが起つて、プールのお仕度です。準備運動がすむと、大變です。プール目が

けて突進です。耳に栓をしましたか、頭や胸をしめしましたか、先生の聲が唄れそうです。

水こそは夏の子供にとつて、興味の中心生活であります。別けて都會の幼兒生活の中に、安全にして快適な水を採入れることは、夏季保育の最も核心をなすものでなければなりません。

合圖の點鐘、ワツト歡聲が舉ります。青空が碎けて、木影がゆれます。ひとしきり飛沫の中に亂舞がつぎます。浅い所で腹這ひになる子供、浮輪のお舟でゆれてる子供、水繁吹をたてゝ泳ぐ子供。水が大きくゆれてコンクリートの歩廊が波で洗はれます。でも噴泉は溢れて、水は清淨です。そしてクロルカルキは殺菌劑です。水浴に不適當な子供の爲めには、砂場があり、木蔭があり、そこで自由な遊びです。

水浴後整理運動、體をタオルで拭きとる。冷えぬやうにと腹巻きの注意、こゝでも先生は忙しく立廻らなければなりません。

やがて晝食です。さすがはお腹が空いて、お辨當が待た

れます。晝食の賑やかさも亦快いものです。朗かな談笑は消化を助けます。早かつたり遅かつたり、お辨當の時間は町々ですが、間もなく先生のお話が始まります。お辨當のすむだ子供は何時とはなしに先生の周りを取りまいて、お話に聞きとれます。小さなお話は食休みには結好なものです。それから午睡、遊びが夫々の習慣従つて適當に與へられます。そして午後二時、又プールの時間です。

間食幼稚部千前十時、小學部は午後三時です。溫い麥湯に、おやつはいろいろ取交せて與へられます。その日のおやつはきつと子供達の話題にのぼります。一樣に與へられるおやつはどんなに嬉しいことでしょう。

カルケツト、サンドビスケツト、アラレ、カルシウムゼンバイ、ココアパン、パンケーキチョコレート、水無飴。

幼稚部はおひるでおしまひ、おかへりのお仕度ですが、これはまだ研究の餘地があるやうに思はれます。午後三時三〇分、豫定の日課を終へて、小學部もかへります。かうして忙しく一日がすぎます。職員室では明日の豫定表が展げられます。

出缺狀況表

部 稚 幼			部 學 小			性別	在籍日々	出席平均	日々缺席平均	出席歩合
合計	女	男	合計	女	男	性	別	在籍日々	出席平均	日々缺席平均
二八	一一	一七	三五	二一	一四	男	一四	一三、三九	〇、六一	九五、六四
二六、一七	一〇、三九	一五、七八	三二、一七	一八、七八	一四、三九	女	二一	二、二二	八九、四三	九七、九二
一、八三	〇、六一	一、二二	二、八三	二、二二	〇、六一	合計	三五	二、八三	九七、九二	九三、四五

體重平均増減表

第一回七月三十日
第二回八月二十日

部 稚 幼			部 學 小			男	女
均平	重	總	均平	重	總	男	女
増	減	増	増	減	増	幼小部	幼稚部
〇、〇八	一、九〇	三、二五	〇、〇一	一、四五	一、六〇	一六一	一一一
均平	重	總	均平	重	總	幼小部	幼稚部
増	減	増	増	減	増	幼小部	幼稚部
〇、三六	〇、二五	四、二五	〇、一六	一、四五	一、六〇	一一一	一一一

園 樂

太陽がキラキラ照つて蟬が無性に鳴いてゐます。プールの面に靜かにゆれて噴水に虹が鮮かです。

廣い原ば森近く

涼しい朝風露ふむで

我が學園、夏季學園

朗かに學園の歌を唱ひながら、學習の餘暇を綠蔭をたづねての散策も、時折の楽しみです。自然に恵まれ、自然に抱かれた學園は幸でなければなりません。近くの森に、お社に、しばしの憩がつきます。

そして又朝の映畫會や午後の學藝會、こゝでは明るい笑ひが窓外に溢れ、森に木魂して蟬がふと鳴き止むほどです。明るく明るく、そこにのみ健やかな生活があります。

更に兒童慰安會は、數百に餘る御家庭の來賓を迎へ、學園の掉尾を飾る催しです。遊戲や歌が、廣い遊戲室の真中で、自由に伸び伸びと喧はれ、踊られます。そして又先生方の劇が、これは又如何に喝采を博したことでせう。

大人の世界といふ色調を、少しでも弱めるのが學園です。子供の生活を眞に理解することが、愛でなければなりません。愛は理解のみによつて可能です。

日誌の一頁

結びに代へて日誌の一頁をひもといひてみます。

× × ×

ひで子ちゃん、いつもプールに入つたことがあります。プールの時間には、お部屋の隅で、しよがり切つてゐたり、お庭の木の蔭で浮かない顔をしてゐます。だつて水が怖いといふのです。

それは昨日のことでした。やつぱりプールの時間です。ひで子ちゃんは水着を持つと洗面所へゆくのです。水着に着代へるのかと思ふと、さうではありません。水道の栓をひねるのです。水を出して、さも悪いことでもするやうにそつと水かけをします。そして濡れた水着をそのまゝお道具の中にしまふのです。そのいぢらしい様子の中に、はつきり頷けるものがありました。濡れない水着は泳いだ證

據にはなりませんもの。

合圖の鐘がなつて、今日も亦プールの時間です。

「ひで子ちゃん、今日水着をきませう」

浮かない顔でしたが、コクリと頷きます。

「水着をきたら、プールの側に立つてみませう」

ひで子ちゃんは氣のすまない足取りで歩きます。

「さあ、ほんとに水着を濡らしてごらんさい。みんなバチヤ／＼泳いでるでせう。そうら、お水がはねるでせう。

あらあら、水着が濡れつちまつてよ。ほんとに濡れたでせう。さあ、プールに入つてみませう。ほら、浅いでせう」

ひで子ちゃんは浅い所に立つたまゝ、ぢつと水に見いつてゐます。

「ひで子ちゃんはいゝ子ね。少しづゝ歩いて、そろそろお膝までね。あらいわね。ちつとも怖くないでせう。こんどはお膝を曲げて沈みませう。少しづゝね。あゝら！ 沈んだ！ 沈んだ！」

ひで子ちゃんは遂々胸のところまで水に浸しました。でもその時のいちじい顔！ ひで子ちゃんの顔が、さつと

歪んで、ほんの一寸ニコツとしたかと思ふと、大粒の涙がほろりと落ちました。

でもほんとうに濡れた水着を抱へて、ひで子ちゃんのお顔はどんなに明るかつたことでせう。

× × ×

こゝに報告を得ました二幼稚園の外に、今夏は各地の多数幼稚園で「夏の幼稚園」が試みられました。園内に簡單なる設備をしてはじめたもの、林間に方けるもの、海岸に於けるもの、或ひは綠蔭を追つた移動式のもの等、いろ／＼の試みがあつたやうであります。が、それ等の報告を得なかつたことを残念に思ひます。

編者

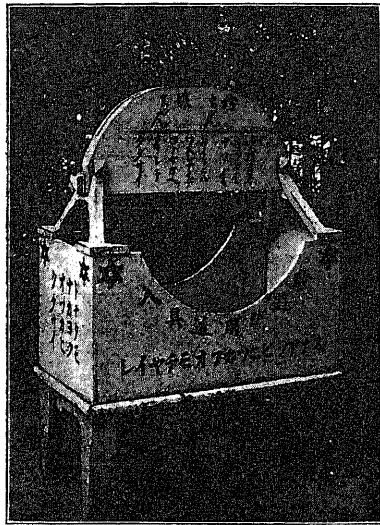
夏の兒童遊園地（自七月至八月）

東京市公園課兒童遊園掛

末田マス

東京市で水の設備をして居ります處は日比谷、芝、上六、坂本、蠣殻、濱町、月島、隅田、井ノ頭の九ヶ所で、其中幼年用の徒渉池は日比谷、芝、月島であります。日比谷の徒渉池は、兒童遊園の一部に約八十坪の面積で、深さは五寸より一尺五寸、一回毎に八十名づつ入場させて一日に六回入れます。

然かし、本年の如き九十六度以上の熱さではレコードを破つて平均百名より百三十名づつを入ればならぬ程多數押かけて來ました。設備としては三十臺のベンチ、下駄箱、シャワー、噴水



などであります。玩具としては簡単な舟、洩舟等供へて置きます。入場時間は三十分。年齢は五歳より十二歳迄とし、監督者は三人であります。

本年、夏の幼稚園を特設されて御利用下さつたのは番町、鐵砲洲、深川託兒所、其他牛込の私立幼稚園でありました。毎日水遊びに來ます。子供等も我派遣選手の眞似をして、種々な手付としては泳ぎ戯れる無邪氣さを見てはふき出し度くなります。

又本年の如き暑熱でも、綠樹の蔭で水遊をして居ますと、餘り珍しいので避暑地に行つた感じがしました。この度岸

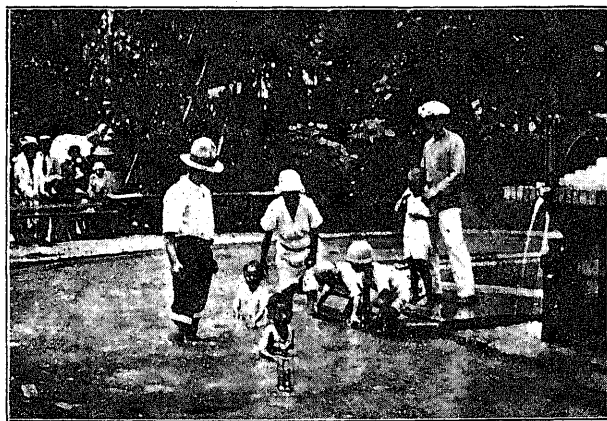
邊先生の御考案に依りまして、プレープールの増設しました。面積は約二十坪深さ五寸位のひと形で、玩具の舟遊をする池であります。

す。毎日朝より夕方迄手製の舟、或は買ったもの、色々の物即ち十人十色と云つた様な舟を持て遊びます。潜航艇、水雷艇、川蒸汽、ヨット、ガスリンボート、幼児でも三時間位は續いて舟遊をして居るものも居ります。非常な興味を此の處に集めて居ります。

又芝公園の山内紅葉館の下の瀧つぼを利用して、約三十坪の徒渉池を作つたので、毎日利用します。子供は約四百



以上であります。其他兒童用の側に幼年用を増設して居ります。處は月島、芝プール等であります。



小公園が出来ました様に、年月を追ふて竣工の運びになることを信じて居ります。

大都市に於ける水の設備がわづか三四ヶ所ではまだ十分とは云はれない。もつと完備して、子供専用の物が増設せられんことを希望します。然かし、之は豫算のないために、實現しないのでありますが又五十二ヶ所の

及川文子氏著

『幼稚園の手技製作』に題す

——幼稚園手技製作論——

倉 橋 惣 三

幼稚園を新らしく、否、ほんたうのものにするために、手技製作は最多く革新を要するものゝ一つであらう。

手技は幼稚園史の初めから重んぜられた保育項目である。或は幼稚園教育原理の中心意義を代表するものとせられた。すなはち外から與へらるゝものを受くる生活に對して、内からつくり出す生活として尊重せられた。古人の着眼の秀拔なることは言を俟たない。しかも、われ／＼は、いつまで此の教育説のおほまかさに止まつてゐるべきであらうか。

つくり出す生命の尊重は、やがて、つくらせる技巧の教

育に遷つた。之れは一應無理からぬ順序でもあつたが、幼稚園手技としては墮落の傾きに入れるものであつた。

技巧の教育が練習主義になり。練習主義が作業工程の分析主義に導かれ、分析主義が幼児の生活的具體性を失はせるやうになつたのは、いはゞ免れ難い進路であり、進歩に似たる退歩であつた。幼児の生活的具體性を離れて、幼児教育の正しさは決してあり得ないからである。しかも、曰くきり方。をり方。たいみ方。はり方。曰く何方。何方。作業工程の分析練的が、かうした名目で今も尙如何に多く行はれてゐることか。

勿論、分析的練習による技巧の上達が、其のこと自身として教育的意義の皆無なるものではない。幼児達の或る興味に觸れないものでもない。たゞ、それだけでは何等の生活性を有せない。而して、他に如何なる價值をもつてゐるものでも、生活性を有せないものは保育ではない。

x

幼稚園の特技を幼児の生活としての製作にかへすべきだと氣がついてから、實體製作が分析的な技巧に代つた。實物の寫生にせよ觀念の表現にせよ、その中心はものであつてつくり方ではない。素より、つくり方なしに何の製作も出来ない。しかし、それはどこまでも方途であつて志念ではない筈である。志念は何かを——すなはち、何んかのものをつくらんとするにある。ものをつくらんとすること其のことを主として、つくり方を従とすることに實體製作がある。

幼児の興味が、つくり方よりもものに向つて先づ起ることとは言を俟たぬ。それがつくるに六かしいものであつても幼児として意に介するところでない。さつさとつくりうと

し、さつさとつくり初める。其の粗拙は免れない。しかも、粗拙とは技巧者の目から見た批評である。つくるということとの生活的意義は巧拙の外にある。眞保育が技巧的練習よりも實體製作を先にし、はじめから、ものに發足せしむるは此の生活的意義を主とするからである。

x

ものは觀る興味と用ふる興味との對象になる。靜觀の興味を主とせるが單一實體製作あり、使用の興味を主とせるが目的製作、すなはち輓近教育學謂ふところのプロヂエクトである。之亦實體製作たるにをいてかはりはないが用途に即して興味をもち、用途を目的として製作するところに差がある。そこに單一實體製作以上に生活的意義が動いてゐるといへる。

今日の幼稚園に於て大に取り入れてゐるもの、而して古き幼稚園の特技が全くしらなかつたものが、此の目的製作である。之れに目的系列の大きい場合と極めて簡單なる場合とあるが、いづれにしても、ものを其の使用から離れたものなるものとしてつくつてゐないことに於て同一である。人

形に着せるための着物、まゝごとのための皿、それはたゞそれだけの目的系列であつても、着物を、たゞ着物らしく、皿を、たゞ皿の形に、單獨の興味でつくるのとは異なる。そこに、生活主義保育の内に於ける手技製作の一層格段の位置が主張せられる。

但、目的製作のみが幼児の製作の唯一の心理だとすることは出来ない。必ずしも用途の意識なくして、ものそのものから製作動機の誘はるゝことも、幼児の心理の實際である。故に目的製作のみが、幼稚園に於ける手技製作のすべてであるといふことは出来ない。なぜとはなしの手技製作も當然其の存在権を幼稚園に於て有するのである。たゞ、その場合でも、幼児の志念は具體のものにある。即ち、實體製作であるのである。

×

しかし、實體製作であるから技巧は無用だといふのではない。たゞ、その技巧はどこまでも實體製作に伴ふて発達し、又、発達せしめらるべきものである。くはしくいへば實體製作の中に幼児自らが求めてゐる技巧の要求を根據と

して発達せしめらるべきものである。

幼児はたゞものをつくらうとしてゐるといへば、如何にも、技巧が幼児にとつて無關心のことのやうに聞える。又、さうだと主張してゐる論旨さへあつたりする。しかも事實は決してさうでない。勿論、技巧のための技巧の要求は幼児に少ない。況んや成人がもつやうな精緻なる技巧の要求はまだ幼児にはない。しかし、技巧本位者でない幼児にも技巧の要求は當然あるのである。

幼児にあつて、技巧の要求は二つの方面をもつ。一つの方面はものに即して表現の六かしさに會つた時、どうしてう、まゝつくりおほせようかといふことであり、もう一つの方面は、幼児の内部から滲み出る美の自己要求をどうしてう、まゝ満足させようかといふことである。極く幼い年齢に於ては、自分の表現がものに即してゐようとゐまいと平氣でゐるけれども、既に幼稚園時期に於ては、発達尋常のものとは相當の苦心をもつてゐる。そこに技巧の要求が自然に起るのである。此の要求をどこ迄自己工夫で解決させるべきか、どういふ指導法によつて満足させるべきかは、實際

保育の要訣に屬するが、いづれにせよ技巧に關する問題である。

幼兒の内から滲み出る美の要求に就ては素より其の發達に準じてゐるものであり、或る論者の如く過大視することは誤りであるが、幼兒自らに美の要求の存在せることは明かである。しかも、之れ亦、必ずしも容易に自らを満足させ得ると限らない。色でも、形でも、位置關係の排列でもそれを美ならしめてゆくべき技巧を探す必要に逢遇する。

之等の技巧は、技巧である限りうまくといふことを要件として居り、傍からそれを指導し手傳つてやる任務があるのは勿論である。しかし、それは、どこまでも幼兒の要求の手傳であつて、保育者自身の要求の滿足を標準とすべきものではない。即ち、技巧に對する幼兒の要求そのものは段々と高めてゆかなければならぬのであるが幼兒が要求もしない技巧を——つくり方でも美でも——技巧そのものとして教へ示すべきではない。しかも、幼稚園の手技製作に從來此の點の誤が多くあつたのであるまいか。つくり方の名に於て器用過ぎる技能が美の名に於て纖細過ぎる巧緻

が、及ばざるを之れ憂ふるといつた風に、幼稚園に入り込んでゐたのも、此の誤りのあからさまな事實の一つである。

×

幼稚園の手技製作は幼兒の生活としてあり、其の技巧は幼兒自らの要求に準じて考へられ手傳はるべきものであるとして、幼稚園教育者が自ら如何なる習練を此の道に積んでゐなければならぬかはまた別の必要である。即ち、幼兒に教へるのではなく、幼稚園としての要求は簡單容易の程度であるにしても、教育者自らは繪に巧に、音楽にすぐれてゐなければならぬと同じく、手技製作に於ても、平生充分の研究と習練とによつて上達を期してゐなければならぬ。自ら巧みなる者は幼兒にも強いんとし、幼兒に即するものは自らも勉強に流れるの弊があるが、保育原理の如何に拘らず、教育者が自分の習練を怠つていゝ言譯はどこにも立たない。

況んや、幼兒教育者は、幼兒の手技製作を傍からするのみでなく、自ら先立つて之れに興味をもつ者でなければならぬ任務のあるに於てをや。自ら生活することによつて幼

兒の生活を誘導するのは、保育全般に亘つての通則であるけれども、手技製作に於てその必要と効果とが特に多い。しかも、自らうまくつくける先生にして、初めて之れが眞に充分に實行せられ得ることは、更めて多く言ふまでもない。

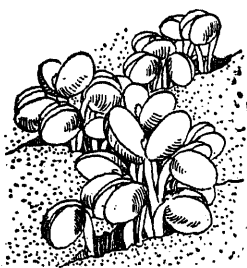
x

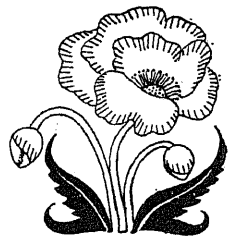
此書の著者及川ふみ子君は、自ら手技製作に多大の興味と熟達とをもつ人である。東京女子高等師範學校技藝科を卒業、直に附屬幼稚園に奉職して以來、今日に至る十有六年の間、その専攻の技能を基礎として、幼稚園手技製作の研究につとめ、幼兒を導きつゝ幼兒に學び、幼兒の生活と要求とに即しつゝ獨創の工夫を怠らず、斯の道に於て殆んど大成の域に達するといふも過言でない。本書は私の慫慂を容れ、その多數なる獨自の考案中より選述せられたるもの、我國幼稚園のために寄與するところ最も大なるを信んじて疑はない。しかも、單に個々の製作法に就て學ぶのみならず、全篇を通じて、幼稚園手技製作の本義につき、著者の意圖の那邊に存するかを深思せられんことは、此書の

讀者諸君に向つて、私の特に希望して已み得ないところである。此の小序に於て私が述べ來つたところも、實は著者の主張を註釋せるものと言つていいのである。

著者は今も尚ほ孜孜として新考案をつゞけ、此書の稿の成つた後でも、既に幾種を案出せられたことであらう。幼兒のためにつくすと共に、自ら樂しむ人でなくては出来ない努力である。一案の成る毎に君は自ら樂んでゐるが、私はその度に、本書の續編の成るを期して樂しんでゐる。

——本誌廣告面参照——





傳 説

三 つ

八六

一、本所の置いてけ堀

昔本所にこんもりした樹にかこまれて大きな池がありました。この池は魚が大變釣れるので、釣の好きな人が集つて來ましたが、どういふわけか歸る頃になると、どこからともなく、「置いてけ、置いてけ」といふ聲が聞えて、びくの中の魚は皆何時の間にか無くなつてしまひました。たうとう人々は此の池を「置いてけ堀」といつて氣味惡がつて誰も釣に行くものは無くなつてしまひました。

或日小川さんといふ人が釣道具を持つて、ぶらり〜と此の池にまゐりました。一本の柳の木の下のだ度好い石に腰を下し、釣糸を垂れました。面白い程魚が釣れました。小川さんは煙管を出して、一服しながら澤山釣れた事を喜びました。びくの中には魚がびく〜跳ねてゐます。ふと

「置いてけ」と云ふ聲が聞えました。「おや」と小川さんは振返りました。何も居ません。「氣のせいかな」小川さんはボンと煙管をはたきました。

「置いてけ、置いてけ」と又聞えます。「をかしいぞ」小川さんは、びくから目を離さず、あたりに氣をくばりました。けれども何時までたつても何事もありませんので、又糸を垂れて釣に氣を取られました。しばらくして、ふとびくを見ると、半分程魚は減つて居りました。小川さんは今度は夢中になつて、お眠りをしてゐるふりをして、びくの方に一生懸命注意をしてゐました。其の時一匹の狸がすばやく出て來て、びくから魚をつかみ出しました。小川さんは跳びかゝつて、「已れ狸め」といつてさんぐに打ちたたきました。

狸は泣きながら木蔭へ逃げて行きました。小川さんは釣

道具を片付けて家に歸りました。

其の夜、小川さんは晝の疲れでぐつすり眠りましたところ、眞夜中に、「小川、小川」と呼んで、とん／＼戸をたたく者があるので、不思議に思つて、雨戸の隙からのぞくと、大きな狸が逆立をして、太い尻尾でとん／＼と戸をたたくてゐるのでした。小川さんは、「さては晝間の狸が仇討に來たのだな」と思つて、そのをかしな狸の姿に思はず噴出しました。雨戸をがらりと明けると狸はころげる様に逃げて行きました。

其の後置いてけ堀には、狸は出なかつたと云ふ事です。

此の話は私の小さい頃お祖母様からよく聞かされたものです。置いてけ堀が今の本所のどの邊に當るか、それはお祖母様も御存じないさうです。(眞生子)

二、河童の恩返し

今、南千住に有名な骨接の醫者があります。此の醫者が骨接の名醫になつたのには次のやうな話があるのです。

昔一人の百姓がありました。或日自分の飼馬を河岸につ

ないでゐて、ほかへ用達に行きました。此の河には大變惡戯者の河童が居りました。此の時もの／＼と出て來て馬の手綱をしつかりと自分の手にしぱり附け、河中に引張り込まうと致しました。馬は大變驚いて、大あばれにあられて、とん／＼厩の方へ駈出しました。河童は手にしつかりと手綱がしぱり附けてあるので、何でたまりませう。其の儘づ／＼と引きづられて、厩へ着いた時には、手の骨は目茶々々に碎けて、おまけに頭の上の水はすつかりこぼれてしまつて居りました。此の頭の上の水は、河童に取つては命から二番目に大切で、此の水が無くなれば、河童は氣力がすつかりなくなつてしまふのです。それで河童は痛さうに、碎けてぶらりと下つた手をさすりながら、ぐつたりと厩の隅に寝てをりました。

一方百姓は自分のつないで置いた馬が見えないので、急いで家に歸つて見ると、馬が異様な鼻息をしてゐます。よく見ると、厩の隅の方に一つの怪物がうごめいてをります。驚いて打殺さうとすると其の怪物は兩手を合せて、

「お助けを、どうぞお助けを。お禮に骨接ぎの術を教へて

上げますから、どうぞお助け下さい」

と頼みます。よく／＼見ると、それはあはれな姿の河童なので、もと／＼情深い百姓は可哀想に思ひ、助けてやりました。河童は喜んでお禮に骨接ぎの術を百姓に教へました。

かやうな事から、此の百姓は骨接ぎ醫者となり、其の家は今日の如く名醫として榮えるやうになりました。(昌子)

三、洗足池の主

私の家から四五町の所に洗足池といふ池があります。昔日蓮上人が行脚して武藏野の一角に來た時、あまり疲れたので一休みしようと思つて不圖傍を見ると、一軒の寺がありました、上人は法衣を松に掛けてお寺に上らうと草鞋の紐を解きました。野中の寺の事とて、足を洗ふ水も無く、仕方なしに松蔭の水溜で洗はうとなされました。すると水溜が俄に泉と變じて混々と清水が湧出し見る見るうちに、きれいな立派な池になりました。上人は此の池で足を洗つて寺に上り休息せられたと言ふことであります。

その池が洗足池と呼ばれて、今も漫々と水を湛へてゐるのであります。池畔には老松が生茂り、東京近郊に風光明媚を誇る一名所となりました。

かやうの名所も近年釣をする人々や近所のいたづらな子供等の爲に散々に荒されるので、池の主が怒を發し、毎夜物凄いうなり聲を立てるやうになりました。その聲は牡牛のうめき聲にも似てをり、又古井戸の水を汲むポンプのきしむ音にも似通つてをりました。これを聞いた人々は無氣味さにふるへ上りました。そして御祈禱をしたり、お清めをしたり、ひたすら池の主の怒をなだめることに力めました。併し一向にきゝめは見えず、益々物凄いうなりは激しくなるばかりなので、青年團が繰出して、たとへ池の主が怨靈であらうと妖怪であらうと、かうなつては正體を見なひでは承知が出來ぬと、大勢で探検にかゝりました。さてつきとめて見ると、それは怨靈でも妖怪でもなく、池の主は一匹の食用蛙でありました。

人々はすっかり安心して、春は花見、夏は船遊び、秋は秋の行樂に遊び興じるやうになりました。(昌子)

毎
の
月
衛
生

夏休み後の保育衛生

東京市社會局兒童掛長
醫學博士

廣 瀬

興

酷暑の夏休みも終つて、再び秋の幼稚園が始まります。

夏は田舎は勿論、都會の子供達にとつても、一年中、最も開放的であり、自由であります。而して、その生活は種々多様である。殊に都會に於ては、一夏中、焦げる様なコンクリートの街路に遊ばねばならなかつたもの、或は澄冷な高原に、潮鳴り高い海邊に愉快な避暑生活を樂しんだもの色々であらう。

其故に、再び始まつた幼稚園は、漸く春期四ヶ月の間苦心保育した統制は亂され、種々雑多の良否が潛入して來ないとは云へない。此の時にあつて、忘れてならぬことは性質上は勿論、身體的にも個々別々に、如何なる變化がこの夏休み中にあつたかをよく、觀察することであらう。衛生的なりいろ／＼の良い習慣、例へば早起き、齒ミガキ、ラ

ヂオ體操、冷水摩擦、薄着、或は偏食の矯正されたこと、よく咀嚼すること等、夏休み中の良い收穫を失はぬ様、又、反對のいろ／＼の悪い習慣は早く無くする様よく家庭と連絡をとることが肝心である。薄着や、成るべく皮膚を日光に曝す習慣はこの夏期より始めねばならない。日光浴が如何に腺病質の體質を改造するか少しく経験したものゝ一驚するところである。幼稚園に於て、パンツだけの戸外遊びが秋おそくまで行ふことが出來ればどんなに冬期感冒よりまぬかれることであらう。少し位の風の日でも薄い腕出しシャツと短い靴下の習慣をつけたい。はだしの砂遊びもよい。夏の幼稚園や、臨海、林間保育に参加したものや家庭で轉地したものは大抵、悪い偏食の習慣も直されてくる。この機會にあともどりせぬ様に注意してやらねばなら

ない。偏食が如何に恐ろしい習慣で將來その兒の健康に重大の影響を及ぼすことを家庭にさとらしめることが必要である。食物の形、臭、色等によつて子供が極端の嫌惡を感じ、喰はず嫌ひをするのであるから、種々の手段で矯正せねばならない。好物の中に少しづつ添加するとか、形を變へるとか、香料を用ひるとか、工夫が大切である。秋の食事の進むときこの習慣を矯正するのがよい時期であらふ。

水道なればその心配は少いが井戸水なればその水に馴れるまで、生水をさけて湯を與へる方がよい。残暑酷しい頃は、遊戲前には充分水を與へて日射病をさけねばならぬ。開放的な自由の生活から、團體的の幾分制限された生活に變るのであるから、當分、充分午睡をとらせ、その後、よく洗面、ウガヒを行はせることは、いろいろの意味でよいことである。

登園始めに、一應、専門醫の身體検査が行へばこれに越したことはない。上流の家庭の幼兒でも避暑地歸りに、トラホーム、疥癬、シラミの土産を持つてくるものもある。眼に注意して流涙や充血、眼脂が氣付いたら検査が必要で

ある。水泳の後、水虫に苦しめられることがある。耳ダレ即ち慢性中耳炎を氣付かずに居ることがある。高原の生活から、蕁麻疹の習慣がつくことがある。草木や毒虫の刺戟が原因となるのである。

驅虫藥（セメン、マクニン）を與へて蛔虫蟯虫を防ぎたい。夏は一般に生まのものを攝ることが多いため感染の機會が多い。

登園早々、體重測定しておくことは今後の發育如何の目安ともなり、又夏休み前のものと比較が出来ればその結果によつてこの夏休みの生活の如何が批判が出来、來年夏期生活の好參考とならふ。秋の涼しい頃ともなればそろゝ虚弱兒に肝油を與へ始める時期である。少量づゝ長期に與へたい。腺弱兒虚弱兒には、日光浴と肝油の並用は効果が多い。

秋は食慾の亢進するときである。間食に注意して、量、質、時間を誤まらぬ様に。食事直前の間食は最も悪い。初秋の間食には新鮮の果物や牛乳がよろしい。過食のための胃腸病や、朝夕の温度の變化のための感冒に注意すること。

海水浴後、夜尿症を發することがある。女の子に膀胱カタル、腎盂炎の起り易い時期である。排尿時の疼痛、不明の發熱に注意すべし。

輕度の近眼、遠眼が夏休みの生活の變北のため、度を急速に増加せしめてゐることがある、看過してはならない。

幼稚園としては夏休み後、園児迎えるために、清潔な園舎

を用意すべきであらふ。各室のフオルマリン消毒、便所の石灰乳撒布、砂場の次亜硫酸ソーダ液消毒は効果的である。今秋は夏休み中の悪い點を除き、良い習慣を助長し、日光と空氣と榮養の三條件に積極的の保育を試みたいものである。

會 告

前號でお斷り申上げました如く、本誌八月號は休刊して、こゝに、八、九月分を合冊合輯したる九月號を發刊致します。

幼稚園の休暇と共に、暑中を休刊しましたお蔭を持ちまして、本誌係員一同、大いに銳氣を養ひ得ました事を厚く感謝申上げますと共に、今後益々本誌の充實を期して努力致したいと願つて居ります。

昭和七年九月

日本幼稚園協會

九月の園庭

及 川 ふ み

秋空高く馬こえるこの好時節。馬より以上幼児も充分に肥らせたもので御座います。屋外保育、屋外保育、つとめて屋外の新鮮な大氣にふれさせたいもので御座います。海に山に両親の心づくしの轉地によつて健康を増進してきた幼児のいやが上にも健康に、いやが上にも健康に。

九月の園庭を考へて遊びの數種をかきつらねます。

虫いれ袋を用意いたしませう

ながい／＼夏のお休み中に園庭の草は思ふままに、縦に横に、手足をのばせるだけのばしました。幼児の足はおろかその全身のかげまで埋めるほどにも、のびてゐるところもあります。(幼稚園のお庭だけは特に草取り人夫を入れない様にいたしております)

この雑草それ自身も幼児のためにいろいろの遊び相手となつてくれて大切なものであります事も申すまでもありませんが、この雑草を住み家にしてゐる虫が幼児にはより以上どんなに大切なものでありませう。

朝登園してお辨當箱を始末する暇もおしんで庭へかけ出します。一匹、一匹、又一匹と澤山の草の中をぬき足さし足でとつた虫、こほろぎ、いなご、ばつた、などとは袋へ入れ、とつては袋へ入れます。

虫いれ袋も古い封筒が一番便利で御座います。幼稚園や自分に來る封筒はたりない位毎日使はれます。

虫を飼ふ瓶を支度いたしませう

飼育瓶は出来るだけ口の廣いものがよろしう御座いませ

う。底に砂を入れて雜草を植ゑておきます。時々水をかける事を忘れない様にして蓋をしておきます。

蓋は金網でもよろしいのですが、小さい虫はにげますから、ガーゼか地の悪い晒木綿をかぶせてゴムでとめておきます。

捕虫あみをつくりませう

手がるに買へればそれでもよいでせうし、又口の周圍は針金や、割竹でつくつて袋をガーゼや晒木綿で作つてもよろしう御座いませう。

花とり、草あそび

西洋かたばみの花がつぎからつぎへとさくのを摘むのも楽しみなものでせうし、角力とり草で二人でひつばつて角力をとるのも一つの遊びで御座いませう。

丹波ほうづき、千なりほうづき

幼稚園のお庭でつくられれば、こんなよい事はありませ

ん。虫がつきやすく丹波ほうづきはつくるのにむつかしい様です。千なりほうづきの方は大層簡単に澤山の實をならせる事が出来ます。

ほうづきとして遊ばせられますし、これを頭として姉様をつくつて千代紙の着物や帯をこしらへて女兒をよろこばせる事も出来ませう。

朝顔

朝顔は幼稚園では花の見事なものよりは數の澤山に咲くのを珍重致しませう。花の形や色の異つたのを見て幼児と一緒に觀賞するのも一つの方法ではありますが、きのふ咲いてしぼんだ花をさきをつまみながらふくらませて、ぼんとならせるのも幼児はよろこびませう。

サイダーやシロップの空瓶に赤や青の朝顔の花の汁をしぼつて入れ水をたしてシロップ屋ごつこなどするのも一つの遊びで御座いませう。

(この時このしぼり汁や、水を口に入れない事をよく幼児に約束しておきませう)

じゆず玉

じゆず玉は玉一粒からずい分殖えるもので御座います。お茶の水にもだれがこぼしたのか、花壇に一株はへました。それからつぎ／＼とふへ出しました。充分に熟するまでおきますと形も色もよくなります。つないで首飾りにしたり、豆人形の頭にも出来ますが幼児の楽しみはこの實をとる事でせう。

へちま

ながいお休みの中にへちまも大きくもなり又あとからあとから數も殖えていくつかのへちまがぶらさがつて幼児は面白がる事でせう。

お月見がすぎるとこの實をとつて數日間水につけて中の纖維のところだけにするのも幼児をふしぎがらせる事でせうし、つるの根もとに瓶をおいて水をとるのも珍らしい事で御座います。

私はこの夏鹿兒島の旅のかへりに、年來の宿望であります。

した岡山市の幼稚園を參觀させていただきました。同市の代表的の幼稚園では御座いませうが、建物や園庭の設備など實に幼児の幼稚園の生活にびつたり合致する様に出来てゐるのに感服致しました。建物だけとしては、よりよい幼稚園は他にも澤山御座いませうが、幼児本位に一本一草も心して植ゑられて幼児がこの園庭でどんなに心ゆくばかり楽しんで遊びくらすかを考へながらまだ見ぬ幼児の幸福をどんなに祝福して去つた事で御座いませう。へちまの事をかきつらねてゐるうちに岡山の内山下幼稚園のへちま棚を思ひ浮べました。こゝには格別のよいひょうたんがどつさりぶらさがつておりました。

梧桐の實を拾ひませう

二百十日の前後の風で梧桐の實がおち出します。ざるや箱に拾ひあつめて豆の代用に致しませう。かたくなつても錐であなをあければ容易に使へます。

とつもろこしの皮や毛

とうもろこしをいたゞいた時に皮や毛をとつておいてあね様をつくりませう。

松葉ぼたん

箱庭の花には、松葉ぼたんが丈夫で奇麗で御座いませう。

粘土つくり

お庭でするお仕事として一番粘土がふさはしいもので御座いませう。箱庭で入用な、動物や、お家や、橋、人、汽車、舟、電車、自動車、とりゐ、お宮、鳥、などいろいろのものをつくつたり、果物やお野菜などの材料の豊富に得られる時で御座いますからいろいろのものをつくらせたいもので御座います。

箱庭の道具を粘土でつくる事から思ひ出しましたが、紙仕事や、木工で幼児がいろいろのものを製作する事がそれ自身面白い事で御座いますがそれが實際のおもちゃになつて使用出来る事がより以上に幼児の慾求にびつたり合ふのではなからうか。と考へ及びますときにひとり只今の多く

の粘土製作だけはその製作の道程だけが面白いといふ事が多い様であります。いろいろの特技製作のうち幼児も保母も一番面白い仕事として考へてゐる粘土が前述の様な目的保育の精神からしてその出来上つた結果のものがうまく用はれてゐないときにはこの粘土製作の價值を考へさせられる様になり、粘土だけがたちおくれる様な事にもなるかも心配されてまゐります。従来は粘土製作品はお床間の置物の様に考へてゐられた様で御座います。そのため別に丈夫でなくてもよいのでありましたが粘土製作も他の製作と同様にそのつくられたものが實際に使用されてこそその製作の價值を認められるので御座います。箱庭の道具や、おまゝごとのお皿や、お茶碗などつくり出す様になりますと出来るだけ丈夫につくらなければならないといふ事が必要な條件となつてまゐります。造りあげたものを充分に乾かしてよく焼くといふ事になつてまゐります。この事につきましては又時を見て述べさせていたゞきませう。

花壇並に花壇用草花年中行事 —(九月)—

日比谷公園花壇掛 富本光郎

秋花壇の植付

八月二十日頃より夏花壇の花の終りに近づいたものを抜き取つて次第に秋咲のものと植替を行ふ。然し模様花壇に於ては秋は主として、アルターナンセラを用ふる關係上、春、夏等の花壇に比し可成細かい模様でも、はつきりと畫き出せるので氣分轉換のためにも秋花壇は全然新らしく設計してそつくり取替をなす方が良策である。

秋の花壇は用ひられる花の關係上、春より初夏にかけての如く艶麗味はないが極めて落ちついた莊重な氣分を出すものである。

秋花壇に用ふる主なる草花を舉げると次の如きものである。

模様花壇用草花

丈七寸——一尺二、三寸位のもの

境栽花壇用草花

丈二尺——四尺位のもの

鶏頭 赤、黄、桃白等 一年草 (仕立方) 春播種

玉鶏頭 橙紅色 一年草 (仕立方) 春播種

トレニア(夏すみれ) 空色 一年草 八月下旬挿芽

矮性マリーゴールド(孔雀草) 黃金色 一年草 春播種

サルビヤ 朱赤色 一年草 春播種

濱菊 純白色 宿根草 挿芽

千日紅 紫紅及乳白色 一年草 播種

丈三寸——五寸位のもの

アルターナンセラ(觀葉) 紫紅、硃紅、濃紅、黃樹黃色等 宿根草(室へ溫春挿芽 室内並ニ株分

矮性アスター(よめな) 白色 一年草 株分

鶏頭 濃紅及黃色 一年草 播種

藥用サフラン 紫色 球根 初秋植付

葉鶏頭(観葉)

赤、黄、絞等

一年草

春播種

コスモス

赤、桃、白等

(其他 サルビア、濱菊等)

二年生草花の播種

今月彼岸前後より十月十日迄の期間は二年生草花播種の好期である。東京以南の地方では宿根草以外は殆ど二年草として取扱はれ秋播されるのが普通で(春秋二季何れに播き得るものも、秋播とした方がずつと成績のよいものである)従つて種類は非常に多いのであるが其中花壇用として最も適した主なる種類のみを、次に挙げておく。

春花壇用

模様花壇に適する丈低きもの

ストツク サボナリヤ チエーランサス 金盞花
ネモフキラ パンジー シレネ アリツサム

一二四

ルピナス シネラリヤ

ベレリアナ
(かのこ草)

シザンサス

忘れな草 花菱草

境栽花壇に適する丈高きもの

けし いなげし 宿根ルピナス

初夏花壇用

模様花壇に適する丈低きもの

ダイアンサス類

フロックス

金魚草

ビスカリヤ

ブラツキカム ベゴニア、ゼンパフロレンス 矮性翠菊 ロベリヤ

ベチニヤ 矮性マトリカリヤ

境栽花壇に適する丈高きもの

ラークスバ

高性翠菊

スキートビ

デキタリス
(宿根草翌年ハ開花不十分)

ホリホツク(ジキタリス)

おだ巻

デキタリス
(同様)

尙播き付け法、取扱ひ方等について注意すべき種類を次に挙げておくが、これは三月號の春播草花の所にて説明しておいたので御参照願ひ度い。尙東京附近の氣温では冬は總て霜除を施した方が生育も早く春になつての成績も良好である。

直播すべきもの

ネモフキラ けし

ひなげし

ルピナス

宿根ルピナス 花菱草

ホリホツク

スキートビ

箱播きとする必要あるもの

シネラリヤ ロベリヤ

シザンサス

ベコニア
セシバフロ
レンス

鉢仕立とすべきもの

(○印は冬季フレイム内にて培養)

ストツク サボナリヤ アリツサム ダイアンサス
 フロックス ビスカリヤ シネラリヤ シザンサス
 〇金魚草 〇美女櫻 〇ブラツキカム 〇ロベリヤ
 〇矮性マトリ ペゴニア
 カリヤ センバフロレンス

宿根草の株分植付

宿根草の株分移植等は春秋二季に行はれるが、今月下旬より十月中は早春と共にその最適期で、大部分のものは失敗する様なことはない。殊に牡丹、芍薬等は必ず、此期間に行はれるもので、今を措いては他にその時期がない位である。

其他、春並に初夏の花壇用としてはなくてはならぬ大事なアルメリヤ、デジー、プリムラ・ポリアンサス、矮性天門冬等は二芽又は三芽位宛を一株として綺麗に調製して植付け、十分翌年の用意をなしおくべきである。

尙此期間に植付くるに適するもので今購入して境栽花壇に少し宛でも欲しいと思はれる宿根草には次の如きものがある。

アステルベ 獨乙あざみ ぎぼうし 鯛釣草
 五月雨菊 ガーベラ 大根草 ペントスチモン

紫蘭 トリトマ ハーデール 虎の尾
 スターチス デキタリス ふらんす菊 飛燕草
 桔梗等

其他の作業

一、薇薔は他のものより時期早く八月下旬より九月中旬迄位がその植付適期である。

一、七月末に剪定を行ひ施肥したるダリアは九月初めより暑の次第に薄らぐに従ひ、急速に枝莖の伸長を來すものであるから、弱枝は切り取りよく整枝して一、二回薄い液肥を施しておく。

一、彼岸前後より十月中旬頃にかけフレーム内の床にて、マガレット、松葉菊、姫松葉菊、ゼラニウム、美女櫻、ペゴニア、コリウス等の挿芽を行ふことも大切な仕事の一つである。

一、花の終りたる一般宿根草並に球根類殊に花菖蒲、グラデオラス、百合類を初め今から開花する濱菊、小濱菊、トリカブト、等、其他秋末まで咲き續けるカンナ、ジンジャ、百日草、アゼラタム、ヘリアンサス、等にも數回液肥を施すことを怠らない様にする。

園藝曆 (九月 長月)

大 岩 金

氣 節				
二百十日	一日頃	二百二十日	十一日頃	白露
二百二十日	八日頃	彼岸	二十一日頃	秋分
社日	二十四日頃	秋分	近イ成ノ日	

観 賞

草花類では雁來紅^{はげまう}が一きは目立つて見えます。その外鶏頭^{トレニア}、ツクバネアサガホ、カンナ、カ、リヤ、ナデシコ、キキョウ、矢車天人菊、春から咲き續けてゐる美

女櫻まだ抜き捨てるには惜しい程花が咲いて居ります。
秋の七草の萩、女郎花、藤袴、ススキの類も見頃であります。

野草のリンドウ、ホトトギスも花を開きました。

仕 事

一、繁殖 (播種と植込)

春の彼岸と同じく秋の彼岸前後は種子播に最も忙しい時であります。秋は追々に来る寒さをひかへて居りますので晩播になりますと充分に發根發芽しない中に降霜の季に入り年内の發育が大變おくれて参りますから秋の種子播は春

のそれ以上に期を失してはなりません、種子播に次で秋植球根類も今月から來月にかけて植込みをしなければなりません、夫等名稱は便覽にゆづりここには省略致します。

蔬菜類では蒿、蒨葎草、茼蒿を播きます。

球根類の水栽培

是も今月下旬から來月上旬にかけて行ひます。種類は支那水仙、クロツカス、ヒヤシンスが多く用ひられて居ります。水仙は水盤にクロツカス、ヒヤシンスは特別の瓶を種苗店に賣つて居ります。しかし是に準じた物を代用する事は差支へありません。

水栽培に就ての注意、

- 1、球は最も上等であること
- 2、瓶に入れる水は球の下部が少々浸る程度（多すぎますと球が腐敗することがありますから根が出ましたならば球より少しはなれた所まで水を減します）

3、水に浸しましたならば戸棚の中などのやうな暗所に入れて先に充分發根させ然る後順次日當に出すやうにすること

4、瓶内の水は根を外に出さないで時に取替へること

二、その他の仕事

二百十日、二百二十日の前後は一ケ年中で最も暴風雨の多い時であります。一夜のうちにも取り返しつかないやうな事にもなります、荒れぬ間に支柱をたてるべきものは支柱をなし、鉢などは棚から下し又はねかしておくなど注意にも注意を重ねておきませう。

夏草の後好末もしておいて秋草の植込の用意もしておかなければなりません。

その外長いお休みの後のこととて此處彼處亂れ勝であります。小供等と一緒に雑草もと、虫もと、片付もするなど今日も外明日も畑としなければならぬ仕事は山のやうにあります。

秋播(秋植)草花便覧

英名	和名	繁殖法	開花期	花の色	草丈	備考
チウリツブ	鬱金香	分球	四月—五月	赤、黄、橙等	一五—三〇 ^釐	水栽培モ可
ヒヤシンス	風信子	分球	西—五	紫、白、赤等	一五	水栽培ニハ支那水仙ヲ用フ
ナーシツサス	水仙	分球	一—四	白、黄	三〇	
リリー	百合	分球	五—六			
フリリージャ		分球				
クロツカス	花サフラン	分球	二—四	紫、黄、桃	一〇	
アネモネ						
コーンフラワー	矢車草	播種	四—六	赤、紫、白等	六五—一二〇	
カレンジュラ	金盞花	播種	三—五	黄、橙	二五—四五	
オキザリス	花カタバミ	分球	十一—五	黄、白、赤等	一五	八月ニ植込ムモアリ
デージー	雛菊	播種	三—十一	白、赤	一〇—一五	株分モ可
ピンク	石竹	播種	五—七	各種	一五—三〇	株分モ可
カムピオン	水仙翁	播種	六—七	白、赤	三〇—七五	株分モ可、宿根
コランバイン	オダマキ	播種	四—六	各種	三〇—九〇	株分モ可、播種シタルモノハ三年目ヨリ開花
カンターベリーベル	鐘草	播種	五—七	白、紫、桃	三〇—六〇	三年目ヨリ開花
プリムラ	西洋櫻草	株分	三—六	白、赤、黄	一五—三〇	播種モ可(木框内)
フオーゲツトミーナツ	勿忘草	播種	四—六	紫、白	一五—二〇	
フイグマリイゴールド	松葉菊	挿木	五—八	赤、白	一五	播種モ可
キヤツチフライ	蟲取撫子	播種	五—七	赤	三〇—九〇	

アグロステンマ		麥撫子		播種		五——七		桃		三〇——四五		移植ヲ忌ム	
ラークスバー		千鳥草		種播		五——六		紫、白、桃等		四五——九〇		移植ヲ忌ム	
ポツビー（コーンポツビー）		虞美人草		播種		五——六		各種		三〇——九〇		移植ヲ忌ム	
オビウムポツビー		（ヒナゲシ）		播種		二——五		白、赤、紫		六〇——九〇		移植ヲ忌ム	
スキートバイオレット		罌粟		株分		四季		紫、白		一五——二五		挿木、播種モ可	
バンジー		三色スミレ		播種		六——八		紫、白、黄等		一五——二五		四時挿木ヲナシ得	
スキートビー		花豌豆		播種		五——六		各種		九〇——二一〇		移植ヲ忌ム	

文 部 省 講 習 會 本 會 講 習 會

何れも盛會を極む

既報の、東京女子高等師範學校に開催された兩講習會は、例年にも増しての盛會で、前者は約三百五十名、後者は二百數十名の多數會員であつた。會期中の七月下旬といふものは、十幾年振りといふ酷暑であつたが、全會

員にじみ出る汗を拭ひつゝ熱心に聴講、又は實習の様子であつた。文部省の講習中、堀、新庄、菊池講師の御承諾を得て、その講演大要を本號に掲載することにした。

首ふり人形

創作唱歌



ワ タ シ ノ ス キ ナ ク ビ フ リ ニ シ ギ ョ
わ た し の す き な く び ふ り に ん ぎょ

オ テ テ マ ヒ ザ ニ キ チ ン ト ス ワ リ
お て て を ひ ざ に き ち ん と す わ り

ヨ イ コ ト キ ー タ ラ ヨ シ ヨ シ ヨ シ
な か よ く す る の は よ し よ し よ し

ワ ー ル イ ハ ナ シ ハ イ ヤ イ ヤ イ ヤ
け ん か を す る の は い や い や い や

首ふり人形

土川五郎振

一、わたしの……左足にてトシミ床を打つ時首を
左に傾け兩手を左下に流す

すきな……右足にて床を打つ時首を右に傾け兩
手を右下に流す

首ふり……兩手を腰にして首を左右に振る

人形……同じくす

お手々を……右手を右もゝの所へ

ひざに……左手を左もゝの所へ

きちんこ……右膝を床に左足膝を曲けて立てる

すわり……左足を引きて左膝を床につく

よいこ……右生上體を左に傾け左手を耳の後

ろにす

左生は上體を右に傾け右手を耳の後ろに聞く
如くす

形人 リふ首 なきす のしたわ(ー)



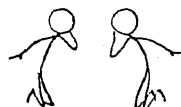
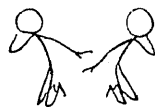
リわす とんちき にぎひ を々手お



イハイハ らたいき とこいよ



ヤイ はしなは い悪 イハ



のしたわ(ニ) ヤ

ーイ

ヤイ



を々手お 形人

リふ首

なきす

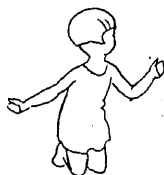


しよ

しよしよ

はのるす

くよかな



やいやいやい

はの

るす

さか

んけ

全
ジ



SINKITI

きいたら……右生は右手を右耳の後ろにす

左生は左手を左耳の後ろにす

ハイハイハイ……はつきりこうなづくこ三回

悪いはなしは……「よいこきいたら」こ同じ

イヤイヤイヤ……全體顔を右へ左へ右へ(終りの「ヤ」にて正面を向く)

「わたしの……右膝を立てる

すきな……立つ

首ふり人形……前に同じ

お手々をひざにきちんこすわり……前に同じ

なかよく……全生手をつなぎ右生こ左生こ顔を合はす

するの……反對の隣り生こ顔を合はす

よしよし……兩手を膝にしてうなづくこ三回

けん……各自體前にて拍手一回

かを……兩手を左右に開き隣生こ掌を向き合せて拍手す、右生左生顔を合せる

する……各自體前にて拍手一回

のは……「かを」こ同じく隣生こ拍手し前こ反對の隣生こ顔を合はす

イヤイヤイヤ……顔を右左右に向け「や」にて正面に向く

ミルクのおばちゃん

高 島 巖

ミルクのおばちゃんが見えるといふので、毬子さんは朝から大元氣です。

「お母さき、お母さま、お母さま、もう何時間たつたら、ミルクのおばちゃん、いらつしやるの？」

「さうね、電報では十一時となつてゐるから、あと二時間ですよ」

「あら、あと二時間？……お母さま、毬子どの着物をきてお迎へに行く？」

「さあ、このあひだお父さまが上海から買つて来て下さつた支那服はどう？」

「ええ、ええ、さうだわ、あの着物がいいわ。でもねお母さま、あの着物、まだミルクのおばちゃん御存知ないでせう、毬子のこと、ほかの子とお間違へになりやしないかし

ら」

「大丈夫よ、ね、おばちゃんが汽車のなかから出てゐらしたら、いきなり、ミルクのおばちゃん、ツて、おばちゃんのくびつたまへかぢりついてあげればいいわ」

「あら、ミルクのおばちゃんのくびつたまへ、かぢりつくの？ まあ、うれしい」

毬子さんは、いきなり、お父さまのお部屋へとんで行きました。

「お父さま、お父さま、お父さま、ありがたう、ございました」

「なんだい、大きな聲をだして」

「ううん、お禮に來たの」

「なんのお禮に？」

「支那服の」

「支那服がどうしたんだい？」

「いいえ、ね、あれなの」

「なんだい、面白い子だね、そのあれなの、ツていふのはなんだい？」

「あのね、ミルクのおばちゃんにかちりつくの」

「ミルクのおばちゃんにかちりつく？」

「それがね、支那服のおかげなの」

「おかしなことをいふね、ミルクのおばちゃんにかちりつくのが、どうして支那服のおかげなんだい」

「なんでもいいの」

×

「お母さま、お母さま、お母さま」

×

「毬子さんは、また、お母さまのところへ、とんで来ました。」

「ね、お母さま、ミルクのおばちゃん、どんなにほひでせう」

「まあ、なにをいふの、この子は」

「いいえ、ね、毬子がくびつたまへかちりついたら、ミルクのおばちゃん、よろこんで下さるかしら」

「そりや、およろこびになるでせう、お前のこと、大變可愛がつてゐらツしやるからね」

「毬子も、ミルクのおばちゃん、とても好きよ、お菓子だつて、おもちゃだつて、ごほんだつて、なんだつて買つて下さるんだもの」

「まあ、それで、毬子はおばちゃんが好きなの？」

「ううん、それだけぢやないの、この前ゐらした時ね、毬子のお顔を兩方のお手手ではさんと、ちいツと毬子の目をごらんになりながら、毬子ちゃんも大きくなつたらミルクのおばちゃんになつてね、ツておつしやつたの。毬子わけがわからなかつたから、なあに？ ツて云つたら、この次つて云つて、毬子のあたまをなでて下さつたの」

「まあ、さう。それぢや、今日ゐらしたら、そのわけが聞かれるのね」

×

×

（ミルクのおばちゃんのくびつたまへかちりつく……）

(ミルクのおばちゃんになつてね、のわけがきかれる……) 毬子さんの心のなかは、もうミルクのおばちゃんに會ふことではいづばいになつてしまひました。

× ×

毬子さんとお母さまが停車場へ來た時は、汽車はもうホームのなかへ入りかけてゐました。

「お母さま、大變よ、もう汽車が來ましたよ」

大急ぎで入場券を買つてホームへ出ますと、汽車がちやんと止りました。

「どの車かしら」

と云つて毬子さんが目をころころさせてゐますと、丁度毬子さんたちの上の窓ががらツと開いて、そこから、にこにこ笑つてゐるミルクのおばちゃんのお顔が見えました。

毬子さんは、あんまりうれしくて、すぐには聲が出ませんでした。

「まあ、毬子ちゃん、随分大きくなつたのね、あら、支那服なんかきて、可愛いこと、随分たくさん待つて？ ええ

毬子ちゃん、……あら、どうしたの？ なぜなんにも云つて呉れないの？ 毬子ちゃん」

毬子ちゃんは、おばちゃんのくびつたまへかぢりつくことを考へてゐました。でも、毬子のことすぐおわかりになつたんだからよさうかな、とも思ひました。

そのうちに、もう毬子さんは、ミルクのおばちゃんとお母さまの二人のあひだに手をつながれて、驛のそとへ出てゐました。

夏のお陽さまがかゝツと地面の上をてりかへしてまぶしいなかを、毬子さんとミルクのおばちゃんとお母さまは、なんにも云はずにお家の方へ歩いてゐました。でもお顔は三人とも、うれしくて仕方がないやうに、にこにこしてゐました。

×

×

一週間たつて、とうとうミルクのおばちゃんがおたちになる日が來ました。

「おばちゃん、どうしてかへるの？」

「だつて、もう歸らなければならぬ時が來たのよ」

「でも、おばちゃん、なにかお忘れにならない？」

「なんにも忘れやしないわ」

「なんにも？」

「ええ」

「ううん、おばちゃん、だめよ」

「あら、なにか忘れたことあつて？」

「あのう、この前おいでになつた時のお約束」

「ああ、ミルクのおばちゃんになつてね、のわけ？」

「さう」

「さうでしたね、でもね、それは、もう一ベンおあづけにして置ませう」

x

x

穂子さんは、それから、ミルクのおばちゃんのことばかり考へてゐました。

「お母さま、ミルクのおばちゃんのお家、東京ね」

「ええ、さう」

「おばちゃん、いつもなにしておらつしやるの？」

「おばちゃんはね。この世の中をもつともつといい世の中

にするために、その仕方をたくさんの人たちにお知らせする仕事をしてゐらつしやるのよ」

「あら、ぢやあ、ミルクのおばちゃん、随分、いい人なのね」

「ええ、その通りよ」

「お母さま、ほかの人もあのおばちゃんのこと、ミルクのおばちゃんツていふの？」

「いいえ、そんなことないわ。でもね、おばちゃんは、どんな人にも、ミルクのおばちゃんになつてあげたい、といつも考へてゐらつしやるのよ」

「ぢやあ、おうちでミルクのおばちゃんツていふわけは、なあに？」

「それはね、かういふわけなの。お母さまがまだ赤ん坊の時ね、お母さまのお母さまにおつばいがなかつたの。でねお母さまはあたりまへのごはんがいただけるやうになるまで、ずうつとミルクばつかりいただいてゐたの。ですからね、ミルクは、赤ちゃんのお母さまには、なくてはならないものだつたの。ところがね、お母さまがだんだん大きくなつてお姉さまになつて、東京の女學校に通ふやうになつ

た頃、丁度今のミルクのおばちゃんがお母さまの一つ上の組においでになつたの。でね、まだ一年生のお母さまにはわからないことがたくさんあつたのよ。そんなわからないことがあつたり困つたことが起つたりした時、きつとあのおばちゃんが出て来て、お母さまをかばつて下さつたのよ。それでお姉さまになつたお母さまには、赤ちゃんの時のミルクのやうに、あのおばちゃんがなくてはならない方だつたの。わかつて？ それでお家では、あのおばちゃんのこと

童話

フットボール

雲の上で雷の子供がボール遊びをしてをりました。雲の破れ目からボールが下界へ落つこつてしまひました。ボールは富士山のでつぺんへボンと落つこつて來ました。そのボールは空のお月様の十倍もあるフットボールでした。

ボンと落つこつて來たと思ふと、すぐ又雷の子供がフツ

と今でもミルクのおばちゃんツていふのよ」

×

×

穂子さんは、このおはなしをきいてはじめて、ミルクのおばちゃんのおつしやつたことがわかるやうな氣がしました。（なくてはならない人になること）

この世の中で、いちばんいいことは、なんでも出來る人になることではなくて、なくてはならない人になることだといふことが、はつきりわかつたやうな氣がしました。

水谷 年惠子

トボール目がけて、ドシンと天から降つて來ました。雷の子供はいきなりフットボールに抱着きました。抱着くとすぐ、雷の子供とフットボールとが一つのかたまりになつて富士山のお山のでつぺんからコロコロところがつて山の下の方へ落ちていきました。ころがつていく中に、

ビューツ

と風のやうなうなりを出しました、そしてひどい勢で、
下の下の方へ迂り落ちていきました。

お山の下の野原ではいゝ心持で猪が蜚寝をしてをりました。雷の子供とフットボールとの大きなかたまりが、ビューツ、ドシンと猪にぶつかりました。ぶつかつた拍子に猪は雷の子供とフットボールとの塊に手早く抱着きました。

今度は雷の子供とフットボールと、そして猪とが大きな大きなかたまりになつて、コロコロころがつて、
駿河の海へドブーン。

雷の子供は潮水を飲んだら正氣が附きました。猪は眼の中へ潮水がはいつたら眼がさめました。フットボールは波に浮んで、ブカ／＼／＼／＼漂つてをります。雷の子供はあはてゝフットボールに抱着かうとしました。すると猪も一生懸命フットボールにつかまらうとしました。

フットボールは知らん顔をしてブカ／＼ブカ／＼沖の方へ流れていつてしまひます。雷の子供と猪とが競争でフットボールを追つかけました。するとそこへ小山のやうな鯨が現はれました。鯨は雷の子と猪とが水の中でボール遊び

をしてゐるのだと思つて、自分も一緒になつて、フットボールを追つかけました。

雷の子も猪も鯨にはかなひません。フットボールは今にも鯨に吞まれてしまひさうになりました。空では父さん雷と母さん雷とが、ゐなくなつた子雷を捜し廻つてゐましたやつと駿河の海に自分の子供が半分溺れかゝつてゐるのを見附けて、それ助けよと黒雲に乗つて押出して來ました。空も海も眞暗になつて、大夕立が一面の波の上を荒れ出しました。

コロ／＼／＼ツ

ガラ／＼／＼ツ

ピカピカピカツ

ザザザーツ。

駿河の海は大騒ぎです。

からりと空が晴れました。海は眞青に光つてゐます。も

う雷の子供も猪もゐません。鯨の姿も見えませんでした。

たゞ波の上にフットボールだけが、

ブカ／＼／＼／＼。

と浮んでゐました。

人形芝居脚本

爆弾三勇士

菊池ふじの

三勇士を脚本に致します動機や、いきさつ、等につきましては、前の「人形に依るおはなしの演出」と云ふ題の中で、ちよい／＼し申し述べましたから、御めんどうでも合せて御覽いたゞき度いと存じます。茲には、人形の作り方人形の服装等について、前に缺けて居ります所を、少々申上げて見度いと思ひます。

人形は、桐の木を、極く大體の人の顔の形に彫つて造りました。先づ厚さ一寸三分、横二寸三分、縦三寸五分（以上鯨尺）位の桐の木片を拵へます。そして縦の一端の頸になる部（中に、指を入れる穴を堀る故、あまり細からぬ様）を、長さ六七分、幅一寸二分位にして残し、その他を切り落します。そして、四隅の角を削り落して、鼻を別に付けました。鼻をも浮き出

す様にすれば良いと思ひましたが、そうするには、かなりの厚さの木が要りますし、削るにも、かなり六ヶ敷いと思ひましたので、鼻は、角の所を長く角にそぎまして、別に膠で付けたのでございます。こう致しますと、割にやさしく、私共の様な不器用な者にも樂に作れました。頸の中の指を入れる穴は、初めは小刀で彫つて居りましたが、後ではかういふ穴をあける機械（ごく簡単な螺旋狀のもの）のある事を知りそれを借りてあけました。こうして出来たものへ胡粉を塗り、目、口等を書き入れ、その上から茶色をぬつて人らしい色に致しました。帽子は、手近にあつたおまゝごと道具のお鍋が、鐵兜らしい恰好をして居りますので、それを借用いたし、黄褐色に塗りました。

服裝は、前にも申述べました様に、之れだけは例外に、細かい點まで注意して、實物を手本にして拵へました。

布地等は區別しないでもいゝかと思ひましたが、人に頼みました所、セル地を寄越しましたので、之を將校の服とし、別に木綿の布地を下士の服に致しました。襟章は工兵と云ふので、海老茶色、肩章は其々の位置によつて變へました。劍等も將校と下士によつて違へました。將校は長い劍、下士は短い劍と云ふ様に。

それから、今までは足をつけずに居りましたが、之は軍人で、力をも現し度いと思ひましたので、足をつける事に致しました。足は、左右兩ズボンのつながつて居るものを身頃と別に作り、之に綿を入れてふくらませ、下の方に、ゲートルを巻き、靴を穿かせました。こうして作りました足を、前身頃にしっかりと縫ひつけ、後身頃の所を明けて置いて、こゝから遣ふ手を入らせる様にいたしました。

それからこの脚本の中の用語は、なるべく分り易い様にと心掛けましたが、勢の上から、遂思ふ様にまでやさしく出来ませんでした。小さい組の子供には、少し分り憎いか

と思ひます。幼稚園年長組や小學校低學年の、殊に男の兒によるこぼれる様でございます。

第一場 麥家宅原野

上海郊外の廣野。

背景——薄暮から、翌早朝にかけての處なれば、あまり明るからざるやう。

又舞臺の一隅に、バラツクの陣地事務所があり電話等設けると尙いゝと思ふ。

登場人形その他

松下大尉

大島少尉

東島少尉

馬田軍曹

決死隊、——三十六名、之を八人位づゝ四五組に分け

て、板に軍人の繪を描いて鋸ミシンで切抜き、それらしく採色する。この軍人を八人位づゝ、一枚の板に立てて置く。

開幕前に舞臺裏にて東京日々新聞の「爆彈三勇士の歌」のレコードをかけ、觀客に氣分を起こす。

——レコード終ると同時に幕あく——

松下大尉獨白

松下大尉「さつきの電話に依ると、下元旅團は、明日の朝五時三十分、いよいよあの廟行鎮の總攻撃をする事に決つたそうじや。それで、吾が松下中隊は、總攻撃の前にあの堅固な鐵條網を爆破して突撃の路を開け、と云ふ命令を受けた。軍人としてはこの上も無い名譽の事だ。勿論吾等は、大日本帝國軍人である。敵が何萬人居やうとどんな鐵條網が張つてあらうと、何でも無い。直ぐ爆破して敵をやつつけてしまふのはた易い事である。兵士達も皆強い。腕をさすつてこの命令の降るのを前から待つてゐた。この命令を兵士達に傳へたら、嘸、喜んで、みんな志願するであらうな。(重い調)併し、あの鐵條網の爆破は、なか／＼容易な事ではないぞ。(頭を垂れ、しばし默考)敵は極く目の前に居るし、あの通り始終、小銃や機關銃を打つてゐる。こつちでもうまくやらなくてはならん。吾等の命は、戦争の無い時から、いつでも 天皇陛下に捧

げてある命である。この上は肉彈戰では是非ともあしたの夜明けまでに、あの鐵條網を破らねばならない。(顔を上げて)

もう六時近いな。用意もある事であるから、小隊長を呼んで決死隊を募らう、(左手をふりかへり)馬田軍曹、馬田軍曹」

馬田軍曹「ハイ」

と現れ、舉手の禮、次いで

「馬田軍曹であります」

松下大尉「馬田軍曹、大島小隊長と、東島小隊長を此處へ呼んでくれ」

馬田軍曹「ハイ、大島小隊長と東島小隊長を呼んでまゐります」

と、舞臺より消える。この間松下大尉、空を見たり、そこら歩きたりする、間もなく兩少尉來る。兩少尉とも舉手の禮。

大島少尉「松下中隊長殿、大島小隊長であります」

東島少尉「松下中隊長殿、東島小隊長であります」

松下大尉「おゝ待つてゐました。(キット二少尉の顔をみつめて)大島小

隊長、東島小隊長、吾が中隊に、大事な命令が降りましてぞ」

大島少尉「中隊長殿、どういふ命令でありますか？」

松下大尉「それはな、あしたの朝五時三十分を期して、吾

が軍はいよ／＼廟行鎮の敵の陣地を總攻撃する事になつたのだ。下元旅團の森田大隊は右の方から、碓大隊は真中から、敵を總攻撃する事に決まつたのだ。(一段と聲を大きく)

それで、吾が松下工兵中隊は、その前に、右の方に三ヶ所、中央に五ヶ所の突撃路を開けよ、と云ふ名譽ある命令を受けたのだ。併しあの鐵條網は、君達も知つてゐる通りの堅固な要害なのだ。なみ大抵の手段では、とても撃破は出来まい。御苦勞であるが、大島中隊から二十一名、東島小隊から十五名、各々決死隊を募つて、此處へ連れて來て貰ひ度い、一言、訓示を與へたいと思ふから」

二少尉「ハイ」

と、各々の小隊へ消える、やがて合計三十六名の決死隊と共に舞臺に現れる。夫々舉手の禮。

東島少尉「兩小隊とも、澤山の決死隊志願者がありましたので、その中から、御命令の人數、三十六名だけ撰抜して來ました」

大島少尉「決死隊氣を付け!!」

決死隊は、各々の小隊長を先頭に、二列從隊に整列する。

松下大尉「一同に、一言訓示する。只今旅團命令が降つた本中隊は、正面の鐵條網を爆破して、突撃路を開けと云ふ、重大なる命令を受けた。之は、本中隊のこの上もない光榮である。本中隊は誓つて此の名譽ある任務を全うして、目的を成し遂げなければならない。併し、この仕事は、なか／＼六ヶ敷い事で、今まで色々の事をして、この鐵條網を破らうとしたが、なか／＼うまく撃破出来ず、澤山の犠牲者を出して來たのである。併し我が中隊は、明朝までに、どんな事をしても突撃路を作り、敵の陣を攻撃させなければならない。多勢の決死隊の中から撰ばれた君達は、勿論命は捨てる覺悟ではあらうが、命にかけてこの仕事を仕遂げて貰はなければならない。一兵士「中隊長殿、吾々決死隊は、勿論死ぬ覺悟であります。どんな事をして、あの鐵條網を爆破いたします」松下大尉「おう、よく言つてくれた。松下大尉、禮を言ふぞ、畏れ多い事ではあるが、天皇陛下に於かせられて

も、君達のこの忠義を聞き召されたら、嘸や御満足遊ばされる事であらう。では諸君、之が最後の別れた、東京の方を向いて、天皇陛下萬歳を三唱しよう。(大聲にて)
天皇陛下萬歳!! 萬歳!! 萬歳!!

一同之に和す。

松下大尉「では之から部所について用意せよ、まだ時間もあるから手紙を出す所があつたら手紙を書け、言傳があるなら申し出よ。背囊の中もちゃんと整頓するんだぞ、分つたか?」

一兵士「ハイ、分りました」

松下大尉「では、みんな部所につけ」

一同上手、下手兩方より散つて消える。松下獨白。

松下大尉「皆元氣で、どんな事をしても撃破すると云ふ。併し、この六ヶ敷い仕事に、生きて歸つて来る者があるかしら? あゝ大事な勇士をみすゝ殺してしまふとは惜しいことだ。みんな父母もあり兄弟もある身なのに!」
と默考する。

——幕——

第二場 三勇士控所

背景——廟行鎮の沙漠たる廣野。遙か彼方、舞臺左手より中央にかけて鐵條網見ゆ。

登場人形その他

北川上等兵

作江上等兵

江下上等兵

内田伍長

破壊筒——ボール紙製の筒の様なものへ、紙より等を巻いて竹の節を作り、之を青竹らしく採色する。

雲——お話の實際では朝霧なれど、霧は小道具として現はし憎い故、こゝは雲にした。かんれいしやへ描き、薄墨で採色、雲の形に切抜き、小道具として適當な時に舞臺面へ出す。

大爆音——紙の袋をふくらまして、それを破つて出す。

機關銃——おもちゃの機關銃の音。

ピストル——おもちゃのピストル。

——幕あく——

三勇士、野原に腰を下して話してる

北川「僕達、折角この決死隊に志願して撰ばれたのはいゝが、豫備班にされたのはつまらんな」

江下「そうだ、僕もそれが口惜しくて、しょうがないんだ先きに出掛けた奴等が、爆破して突撃路を作つてしまつたら、もう俺達に用がなくなるんぢやないか」

作江「そうだ、用が無くなつちやつたらんな、僕はね、こん度こそは偉い働きをして國の母を悦ばそうと思つてたのになあ。君！ほうらこないだも一寸、話したらう。

僕のお父さんと云ふのがね、日露戦争の時、輜重輸卒でね、輸卒と云ふのは、華々しい戦争はしないで、食糧を運んだり彈丸を運んだりするんだらう。それで戦死しないで國へ歸つたんだ、すると、國から出てた他の兵隊達は、やれ金鵒勳章だあ、何だつて、大變な名譽を貰つたのに、自分は恥しくて誰にも顔が合せられなかつたと云

つて話してたよ。だもんだから、せめてお前だけでも立

派な軍人にして、父親の二倍も三倍もの働きをさせ度い

と始終云つてたんだが、その父が僕が小學校を卒業しな

い中に死んでしまつたのよ。それでね、僕が兵隊にとら

れた時母は大層悦んで、今でも思ひ出すが、丸で大將に

でもなつた様に、僕を佛壇の前に連れて行つて、この軍

服姿をお父さんに見せ度いと、涙をこぼしたよ。

北川「そうか……、じゃ、今度の役目を、うまく仕遂げて

死んだら、君のお母さんは……そうか」

作江「うん、俺にや、母の心がついてるんだ」

こゝへ内田伍長、紙を持つて来る。

内田「江下ゐるか」

江下「ハイ、江下をります」

内田「君に手紙が來てるぞ」

と、渡す、江下、ハイと答へながら受取る。内田三人に向ひ

内田「君達、決死隊に撰拔されてよかつたなあ、さつき中

隊長殿の御訓示もあつたが、君達しつかりやつてくれ、

頼むよ、ぢやまた會はうね」

と馳け去る。

北川「何だ、手紙だなんて、うまくやつてゐるな、國からか
い？」

江下「うん、そうじゃない、どこかの子供からだ」

作江「そうか、ぢや慰問の手紙だな」

江下「うん、こないだ日本を立つ時、久留來のステーションで會つた、あの家谷と云ふ子供からの手紙だよ」

北川「うーん、では、天皇陛下の爲め、お國の爲めにどうぞ働いて來て下さいって、泣く様に云つて呉れたと云つて、君がすっかり昂奮して居たあの小學生からの手紙なのかね」

江下「あゝそうだよ、俺はあの小學生の云つて呉れた一言の爲に、もういつでも死ぬる氣になつて、愉快に日本を立つて來たんだ、こつちへ來てから、吳淞から手紙と血判を押したハンカチを送つてやつたが、こうして手紙を呉れる所を見ると、あの手紙やハンカチはまだ着かないのかなあ、君達マア聞いてくれよ、こんな事が書いてある。(手紙を擴げて讀む)「私の大事な大事な兵隊さん、立派なお

手柄をして、久留米へ歸つていらつしやる日を毎日々々指を折つて待つてゐます。あなたの凱旋の日には、どんな事をしたつて、家中、お父さんも、お母さんも、兄さんも、妹も、みんなでお迎へに行きます。私の大事な大事な兵隊さん、本當に、天子様の爲に働いて、死なないで歸つて來て下さい」だつて、こんな事が、書いてあるぜ。

作江「可愛いゝ事を書いてよこすなあ、日本の子供は、皆こうして待つて呉れるんだもの、偉い働をしなくちや歸つても顔が合せられやしない」

こゝへ陰曆十七日の月、雲間より鮮やかに照らす。

江下一「おい、いゝ月ぢやないか、みんな見ろよ」

北川「ウン、でも鐵條網に近づくには、これじゃ敵に見つ
けられてしまふな」

作江「あゝ、でもあすこを見ろよ、雲が一ぱいあるから、出發する頃に、月も隠れるだらう、何!! 日本の神様が守つて下さるんだあ、きつと暗くならあ」

江下「ところで、時間も近づいて來るぜ、もうそろ／＼用

意しようじやないか」

北川「あゝ、でもな、僕達は、どういふ風にして爆破したらいゝか、そいつを、相談しなくちやならないじやないか」

作江「そうだゝ、それが大事な相談だ、僕はさつきから考へてゐるんだがね、あの鐵條網は、とても堅固なんだろう、それにあの直ぐそばに敵ががんばつてゝ、盛に機關銃を浴せかけてやがるんだ」

江下「そうだ、それでね、いつもの様に、爆彈を鐵條網のそばまで持つて行つて、口火に火をつけて置いて歸つて来るなんて暇は、どうしても無いと思ふんだ」

北川「そうだよ、それでね、さつきから俺は考へてゐるんだがな、三人の爆彈を一緒にしてさ、何か箇の中へでも入れて、何とかして敵彈に當らない様に、鐵條網の近くまで行き度いもんだな、そこで爆彈に火をつけて之れを持つたまゝで、三人一緒に體ごと鐵條網の中へ飛び込んでしまふんだ」

作江「そうだ、僕もさつきから同じ事を考へてたんだ」

江下「どうせ俺達の命は、とうの昔にみ國の爲めに捨ててゐるんだ、この場合、こうするより他に途は無いんだからなあ。そうやろう、やろうじやないか」

作江「うん、やろう、やろう」

北川「ところで、この事を中隊長殿にお話して行かなければならないだらうかなあ」

作江「さあ、でもな、あの情け深い中隊長の事だ、いくら決死隊だからつて、始めつから死んでかゝる様なこんな無茶な事は許されないかも知れないぞ」

江下「それもそうだな、いつそ黙つてやろうじやないか、こうしなけりやあの鐵條網は、どうしたつて爆破出來つこないんだぜ」

北川「うん、そうだゝ、もう仲間の誰にも、黙つて別れた方が、さつぱりしてゝ男らしいと云ふものだ」

作江、あたりを見廻し、青竹のあるのを見附けて持つて来る

作江「おい見ろよ、そこに丁度いゝ工合に青竹があるじやないか、こいつを割つて、この中に三人の爆彈を一緒につめよう」

江下「うん、そうだ／＼丁度いゝ工合だ、さあつめやう」

北川「あゝ、これで仕度は出来た、もう出發を待つばかりか」

こゝで三人一緒に青竹につめる

作江「おい、先發隊が出發した様だぞ」

江下「うまくやるといゝな」

この時機關銃の音しきり、やがて大爆音、しばらくして馬田軍曹馳け來り、息を切らして云ふ。

馬田「君達、先發隊はまだ鐵條網に行きつかない中に、爆彈が敵彈でやられちやつて、口惜しい事に、みんなやられてしまつたらしい、其の次の組が、今出發したんだが、今度こそはいよ／＼君達の番だぞ、しつかりやつて呉れ、いゝか、仕度は出来てるか」

と云ひ捨て、舞臺より消える。

北川「先發隊は、仕損じやがつたか、口惜しいだらうな」
作江「次のが、うまく成功するかなあ」

盛んに機關銃、爆音。

江下「おい、今のもやられた様だぞ、こんどこそ俺達だ、

さあ、やらう」

「やらう」「やらう」と、北川、作江も破壊筒を持つて共に立上る、と忽ち雲現れて暗くなる。

江下「やあ、えらく暗くなつて來たじやないか、素晴らしいなあ」

北川「これは素敵だ、俺達が成功する様にと、日本の神様が助けて下さるのだ、これじや、いくら敵だつて、僕達の進むのを見附ける事は出来まい」

作江「有り難い事だ、さあ急いでやらう、雲の晴れない中に、鐵條網のぐつと近くまで行かう」

と三人、足探りしながら進む。

江下「おい／＼、この邊が鐵條網の直ぐ手前の塹壕だぞ、みんな氣を附けろよ、深いぞ、どうだ、いゝ鹽梅に誰も敵彈に當らないじやないか、全く神様のお助けだ、ぐつ／＼しちや居られない、こゝらで爆彈に火をつけ様じやないか」

と破壊筒を降し、点火する、そして三人顔を上げ

北川「さあいゝか、あそこの所まで體ごと飛ぶんだぞ」

二人「よし、さあ三人一緒に」

——幕——

三人一緒に、遙か彼方より聞える様に小さな聲で、天皇陛下萬歳!! と叫ぶ。やがて、大爆音、機關銃、ピストルの音頻り、やがて吾軍の進撃を現すためのレコードを舞臺裏にてかける。一例として「攻撃」と云ふレコードなど宜しからん。

第三場 爆破の跡

背景——第二場の背景を用ふ、鐵條網を舞臺の中央に來る様に貼る、そして鐵條網の一部分だけを破壊されたものを描き、大きい背景に貼り合せる、こゝへ日章旗を立てる。

登場人形

下元旅團長

松下大尉

其他從者三四人。

下元少將、騎馬にて靜々と現れる積りなりしも、馬がうまく出來ず、又人との釣合ひも六ヶしく、到底

間に合ひ兼ねて、馬なしにした。

こゝの少將は、他の軍人と區別するため鐵兜でな—に、普通の帽子にした。

——幕開く——

下元旅團長一行、松下大尉先導にて靜々と、話しながら舞臺面へ現れる。鐵條網の爆破された所へ來ると、松下大尉、下元少將に向ひ、改めて舉手の禮を行ひ、上體少し前こゝみにして左の報告をなす。

松下大尉「閣下報告申し上げます。この鐵條網の爆破に當りまして、幾班も、幾班もの先發隊が出たのでありますけれども、どれもく鐵條網に近づかない中に、やつつけられてしまひましたり、敵彈が爆發して、口惜しい事に味方の兵が木葉微塵にされてしまつたのであります。何しろ、總攻撃の時間も迫つて居りますので、無念でもありますし、いらくもするし、申上げる言葉もありませんでした。最後の班は、作江、江下、北川の三上等兵でありましたが、自分の番が來ますと、勇み進んでたゞ一言、「行つて参ります」と軽く挨拶したゞけで出て行きました

た。そいつが閣下、鐵條網の近くへ行きますと、火をつけた破壊筒を持つたまゝ、體ごと飛び込んでしまつたのであります。すると一大爆音、砂ぼこりが立ち上りました。その跡を見ますと、鐵條網が數ヶ所破壊されて居りました。そこを礎大隊が、雪崩れを打つて突撃せられたのであります――

下元旅團長「うむ、そうか、すると、今朝の廟行鎮に於け

金 太 郎

感應幼稚園 青 柳 節 子

登場人物

金 太 郎

熊

鹿

る我が軍の大勝利は、全くこの作江、江下、北川三勇士の勇ましい突進のお蔭である。實に立派な、死に方をして呉れたもんだ、さあ旅團長初め、戦友一同、謹んでこの勇敢なる三勇士に敬禮をしよう――

松下大尉「中隊氣を付け!! 敬禮――

レコード、(三勇士のレコードの最終にある葬式のラッパの部だけ)これが済むと、――

―― 靜かに慕 ――― (終り)

深山の風景、暫く鳥の鳴き聲をきかせてから熊は右手鹿は左手から同時に速ぎ足にて登場

熊 (中央で出合つてから) おや鹿さんぢやないか。

鹿 (びつくりして) おや、熊さん、今日は。

熊 すい分、久しぶりだね。

鹿 そうだね、すい分久しぶりだ。

熊 鹿さんも、ずつと丈夫だったのかい。なんだか少し大きくなつたやうだね。

鹿 有難う。お蔭さまで、ずつと此の通り丈夫さ。それに角もこんなに伸びてね、(角をおさへる) すい分、強くなつたよ。

熊 それでも強くなつたつもりかい。おかしいな。この僕の腕の力を御覧よ(腕をふる) ブン／＼うなつてゐるだらう。

鹿 そりやあ熊さんの力は強いさ。でも駈けつこをしたら僕に負けてしまふだらう。

熊 ところが、駈けつこなぞ早いのは、いつも斯うして、(逃げる格好) 逃げて許りゐる弱虫には都合がいゝさ、だが、僕のやうに何が來ても、ビクともしない者には一寸とも自慢にならないぞ。

鹿 おや、すい分偉張るね。

熊 兎に角僕にどの位、力があるか、未だ君は知らないだらう。この足柄山で先づ僕より強いものはないんだ。

鹿 ほんとうかい。

熊 ほんとうさ。だから、足柄山の大将は僕だ。

鹿 えゝ(びつくりして) 足柄山の大将は熊さんなの。

熊 あゝ、僕だ。(偉張つて) さあ、足柄山の大将さまのお通りだ。どいた／＼(手を振る)

鹿 え(後ずさりしながら) 君が足柄山の大将か。君のやうな偉張り屋さんと話すのは、御免だ。さあ、歸へらう。

鹿、さつさと左手へ退場

熊 君のやうな弱虫と一緒にゐるのは僕も御免だ。

熊、鹿を見送つてゐると、鹿直ぐまたあはてゝ登場

鹿 大變だ。大變だ。(熊の側へ來て) 熊さん。來たよ。來たよ。

熊 何が來たんだ。

鹿 ほら、ほら、向ふから金太郎さんが。(指さす)

熊 金太郎さんでなんだい。

鹿 金太郎さんを知らないの。この頃足柄山へ來て棲んでゐる大變な子供だよ。

熊 えゝ、大變な子供、化物かい。それやあ、大變だ。(逃け出す)

鹿 熊さん。熊さん。化物ぢやないよ。唯ね力持ちで強いだけさ。でも、僕こわくて仕方ないのだよ。

熊 なんだ。僕はまた化物かと思つた。

鹿 ところが、とても力持ちでね、狐や狸、兎さんまでみな金太郎さんのお友達になつてしまつたよ。

熊 狐も狸も。弱虫だな。

鹿 だつてとても、強いんだから仕方ないさ。熊さんだつて、偉張つたところで相撲をとれば屹度ころりと負けてしまふよ。

熊 僕が子供になぞ負けて堪まるものか。

鹿 おや、來たぞ。なんて元氣さうな子供だらう。

熊 (指さして) あれかい。なんだ、あんな小ぼけな子供。

鹿 あれでとても強いんだから。

熊 よし、一つ相撲をとつてやらう。

鹿 熊さんなんてころりと負けてしまふよ。

熊 大丈夫さ。其處で見てゐ給へ。

鹿 いやだよ。熊さんと一緒に僕まで、ころがされると嫌だからな。向ふの岩の蔭にかくれて、そつと見てゐる

よ。

鹿、右手にかくれる

熊 弱虫だな。

鹿の聲 熊さんしつかり頼むよ。

熊 來たぞ。來たぞ。だが、なんと云つて相撲をとつてやらうな。(考へる)

金太郎元氣に左手より登場

金太郎 (熊をみつめて) おや、熊さん。今日は。

熊 貴方は金太郎さん。

金太郎 さうですよ。熊さん一緒に遊ばない。僕初めて、

此地の方へ遊びに來たので様子が解らないんだよ。

熊 金太郎さん。僕と相撲をとれば遊んでやるよ。

金太郎 相撲。相撲なら僕大好きさ。さあ、やらう。(相

撲の用意をする)

熊 だが、金太郎さん。足柄山では大將のこの熊さんだ。

強いよ。いゝかい。後で瘤が出來たなんて、泣かないやうにしてお呉れ。

金太郎 大丈夫、熊さんこそ。

熊 よし、生意氣な。さあ、こい。（飛びさがつて互に見合ふ）

熊 えゝ（同時に取組む）ちつぽけの癖にウゝゝ。

金太郎 熊さんなぞに負けないぞ。

熊 何を金太郎奴。

金太郎 熊さん、ころがすよ。

熊 なに……ムゝ。

金太郎 よいしよ

熊、よろゝとよろめき倒れる

熊 参つた。

金太郎、駈け寄り熊を引き起す

金太郎 熊さん、痛くなかつたかい。

熊 有難う。どこも痛くない。金太郎さん、ほんとに強い

ね。僕これきり生意氣をしないから、友達にしてお呉れ

よ。

金太郎 あゝ、意地悪なぞしないで一緒に仲良く遊ばうよ。

熊 金太郎さん、僕ねいろゝの面白い遊びを知つてゐる

よ。

金太郎 さうかい。見せてお呉れよ。

熊 ほら、でんぐり返し。でんぐり返し。

金太郎 （手を打つて）面白い。面白い。ハ、ハ、ハ。

金太郎、熊笑ひながら、退場

鹿 （現れる）足柄山の大將、熊さんもたわいなく負けてしまつたな。金太郎さんが「よいしよ」と云つたら、ごろ

ゝところがつて「参つた」だつて、おかしかつたな。

其れにしても金太郎さんは、なんて強いんだらう。僕も

友達にして貰ふう。さあゝ早く追つかう。（鹿、金太

郎の去つた方へ駈け入る）

（相撲の場面などありますから一人で両手を用ひて上演して頂きたい）

（終り）

（相撲の場面などありますから一人で両手を用ひて上演して頂きたい）

こ の 夏

倉 橋 惣 三

大 阪

族のこの夏は、大阪市南區保育會主催の講習會に初まる。と例年通りに書き出すものゝ、此の講習會は、實は去年の「この夏」と、一年越しの繋がりになつてゐるものである。あの時は、文部省の學制改革案問題が突發して、八月三日からの此の講習會の約束を、その三日前になつて突然お斷りしなければならなくなつた。私としては萬已むを得なかつたことであり、幾度かの長距離電話で、會の方も充分事情を諒解しては下さつたといへ、此の上もない御迷惑をかけたものであつた。殊に、遠地の申込者諸君へは中止の通知を間にあはせることも出来難かつたために、三日の朝になつて、だしぬけのことわりをいふといふ苦い役廻りまで會に負はせたことを後から聞いて、私としても、まことに濟まない心もちにたえなかつた。今年、學校が休暇になると直ぐ、他の豫定を差繰つて、此の講習會へ馳けつけたのも、せめてもお埋めあはせの心からであり、同時に計畫せられた大阪市保育會の方の講習を、折角くながら辭したのも、南區保育會への私としての義理を立てた仕儀であつた。

そこで、此の講習の題目は、去年から持ち越しの「都市幼児教育の問題」といふので、七月十二日から三日間、市立高津小學校講堂で開かれた。南區主催であるが集めたのは殆んど全市の保姆諸君と他縣からの諸君で、此の問題が、如何

に深く考慮せられ、解決を求められてゐるかを察することが出来る。私の三日間の所論が、何んの新らしく力強い解決をも、此の重要問題に與へ得るものでないことは自ら知つてゐるけれども、理論よりも痛切な事實であるところの此の問題に對して、出来るだけの實感を以て迫つて見ることは怠らなかつた。

私は此の數年、大阪の幼稚園の實際を視る機會を逸してゐる。しかも、我國第一の最現代都市たる大阪の生活が、過重の文化を以て益々幼兒の生活を脅かしてゐるであらうことは想見するに難くない。此の時、幼兒の園の園丁は何を以て先づ當面の使命とすべきであらうか。幼稚園は家庭教育を補ふを以て目的とするが、都市殊に大都市幼兒の家庭生活に於て、最も缺けてゐるものは何であらうか。家庭はその社會環境の内にある家庭である。その家庭が、その社會環境の缺陷を缺陷とすることは免れない。茲に、幼稚園が普通の教育の使命の他に、その所在によつて特殊の緊急使命を自覺しなければならなくなる。しかも、その幼稚園も亦、その家庭と同じ社會環境の内に置かれてゐる。幼稚園とて土地を離れた天國でもなく、繪に描いた樂園でもない。幼兒の家庭生活が都市環境に即した缺陷をもち易いと同じに、都市幼稚園も亦、その同じ缺陷をもち易い環境條件にある。そこに、問題の難點があり、大都市幼稚園教育者の苦心と、その深刻な苦心から生れる、周密にして、また恐らくや大膽なる識見を要求せられる。教育は環境に即することを本質とするが、引きずりよせられるばかりが、即することの意味ではない。眞に教育的に即するためには、らしからざる處にらしきを具へてゆく深憂と、遠き慮りとを必要とする。——などと今更めかしく論じ立てるまでもなく、我國第一の現代大都市たる大阪が、我國第一の幼稚園都市たる所以が、市としての此の深憂と、遠き慮りとを實證してゐるものに他ならない。而して、多くの市民の中には、思慮の淺さと近さから、此上とも、上はべのらしさを、大阪の幼稚園に求めることがあるかも知れないが、必ずしもらしからざる處に、眞に大阪の幼稚園らしさを打ち建てゝゆかなければならないのが、大切な幼き苗木のために、都の内に小さき園を護る人々の、優しくも亦強い、骨の折れる、しかも骨折り甲斐の多い使命であるまいか。而して、之

れは皆。議論ではなく實行である。實行は組織や順序に拘はらず、一つでも早い實現に價值がある。この種の講習は、たと聽いて下さつた丈けでは嬉しくない。三日天下、三日講習、問題はその後につゞく實行力だ。

それは兎に角く、いつ來て見ても、大阪の保育界は私にとつて、常にインスピレーションだ。殊に、南區保育會會長南區長片山宇一氏も先年の講習以來の舊識であり、江田校長、石川校長、田中校長、原谷校長、大倉校長始め會幹部の諸君皆久しき舊知の間である。更めて此の三日間の高誼を深謝せざるを得ない。

濱寺、堺、岸和田、中大江

南區の講習を機會に、講習に先だつ十一日は濱寺と堺へ、講習中十二日は岸和田へ、十三日は中大江へ、それづゝよき時間をもつた。濱寺では吉田定次郎氏の双葉幼稚園を訪ねた。吉田氏は實業界の紳士であるが、特に幼兒教育に興味をもつて、此の幼稚園を開き、閑を偷んでは自らも幼兒の間に交り楽しんでゐる人である。殊に嘗て東京でお茶の水人形座の實演を觀て以來、幼兒のための人形芝居に多大の趣味を生じ、輕快なる小舞臺と、數十種の脚本に伴ふ器用なる舞臺セツトを工夫し、時に自ら人形をつかはれる程の、斯道(?)に於ける大フアンの一人である。舞臺背景は大道具と共に悉く吊り下げ式を用ゐ、至極簡便に要を得て居り、盛にレコートを併用せられるもの面白い。殊に示された新聞切抜によつて見ると、なか／＼盛に園外進出もせられるやうで、その景氣は、本家のお茶の水人形座の到底及ぶところでない。同氏に伴はれて濱寺公園の青松白砂道を一周、海水浴季に入らんとして採色準備中の海濱模様をも見、松深き某亭に畫餐を受け、堺市に赴いた。

堺市では市保育會主催の幼兒教育講演會が、午後一時から高等女學校の講堂に開かれた。堺市保育會は、市教育課長長井慶堯氏や吉田氏其の他諸君の熱心によつて、極く最近に結成せられたもので、本日は其の第一回の講演會といふことで

あつた。堺市の幼稚園は近く續々と其の設立を加へ、浸々として發展の途にある。その隆昌を祈つてやまない。

十二日は朝疾く、南海電鐵によつて、岸和田に赴いた。昨日も今日も御案内は高濱きみのさんであるが、今日の岸和田行は、昨年時から高濱さんとのプログラム中にあつたものである。但、私の岸和田訪問は去年やおとしからの計畫ではない。廻れば十五年前からのことである。當時、神戸幼稚園の望月園長の下に、寡黙溫和の若い保母さんが居た。意識型の反對の本然型で、本然のまゝの篤い信仰を基督教にに向けてゐる人であつた。望月園長からも厚い信頼を受けてゐられたが、その後身邊の事情で、神戸幼稚園を辭し、郷里岸和田に歸つて、舊城内の廣やかな自邸内の一部で幼児保育をはじめ、若い未亡人としての靜かな生活を、純真なる幼兒達の笑顔の裡にうち傾けることゝなつた。それが、今日訪問する佐藤満壽さんの鳩巢園であるが、創設後。まだ園名もなかつた間、子ども達に何と言はせませうかといふ相談を受けて、子ども達が實際そう言つて呼んでゐる通り、「おばさんの家」でいゝでせうと私が提案したことがある。そのなつかしい創設當時以來の希望でもあり約束でもあつた訪問が、今日やつと實現した譯なのである。鳩巢園の名は基督教の信仰から象徴されてゐるものと思ふが、實際、その名にふさわしい、どこまでもなごやかに、親しげな園である。私は、特に集つて來られた母の會の人々に、座談的なお話をした後、鳩の群れてゐる窓の下で紀念の撮影をした。私のやうな口數の多い生活には、斯ういふ靜かな教育生活がなつかしい。午後、南區講習。

此の夜、招かれて文樂を聴いた。私にとつて大阪と文樂とは必ず離れない。しかも、古軼の「陣屋」と、南部の「鳴戸」とが當夜の出來榮えは兎も角く、この夏の中で、いづれもう一度思ひ出すことにならうとは、その場になりてぞ、はじめてそうとは知つたりけるであつた。

十三日夜には、中大江婦人會のために家庭教育講演を行つた。此の婦人會は中大江小學校長田中熊市氏、同幼稚園主任米山えん氏等の盡力の下に、同區内の篤志なる婦人諸君によつて設けられたもので、非常に熱心有力なる婦人會である。

其の夕、會長關根夫人の心づくしによる毛馬關門畔鮎の茶屋の清興は、瀬波に映ふる夕日の色も美しく、都心を距る何里の思ひに、くつろぐことを得た。

十四日は講習終了。私の慰勞宴のために、特に趣向を選ばれた最尖端的餘興に、現代大阪の最後の幻想を残して、江田校長に送られ、築港から別府通ひの「みどり丸」に、久し振一人の自分を見出したのは夜の八時であつた。船内ではB Kからの歌澤が、さびた喉とねじめを聞かせて居た。

松山、道後、三津濱

瀬戸内海の夜の船は靜かな眠りを載せて滑り走る。伊豫の高濱へ着いたのは、翌朝九時四十分。早曉の驟雨に洗はれた四國の山が一段と冴えくしい。棧橋には保育會の船田操女史、田内芳逸氏其の他の出迎へを受け、直に松山を経て道後の宿に伴はれた。

道後は昔から天下に著聞する名温泉。旅館には一切内湯を設けず、町の中央に堂々たる御殿づくり三層樓の浴場があり、樓を振鷺閣と名づけ、靈の湯、神の湯、養生湯など、夫々の靈泉の儀容嚴かなるものがあつて、タルイ張り明るきモダン式でないところに、古き史感の豐なる一種の風格を具へてゐる。

松山市に於ける、愛媛縣保育會主催の講習會は十六日から二日間、濟美女學校の講堂に開かれた。愛媛縣は、先年宇和島の文化協會の講習に、同協會長二荒伯に招かれて來たことがあるが、保育會の諸君と相會して語るのは、今回が始めてである。しかも、四國の保育界に對しては、幾度か講習の機會をもつた香川縣（この夏も招かれたが、時間を繰り合はせ得なかつたのは遺憾であつた）以外、今年八月初めて訪ふべき徳島縣と共に、本縣の實狀を知りたいと豫てから希望にたえなかつたのである。蓋し、山陽道の保育界と共に、一衣帶水ともいふべき瀬戸内海を相抱いて、和煦暖々たる幼児教育の

一大樂園をつくることは、此の三縣が有する地理上の必然ともいふべく、又、風光明媚なる山陽道の南の濱から、同じく風光明媚なる四國の北の濱を望みては、年々歳々、私の想ひ禁じ難き願ひであつたのである。しかも、今年、親しく此地に來り、保育會諸君の充實せる熱心を見て、今更に心を強ふするものがある。幹部諸君の固き協力によつて、本縣保育界の愈々益々發展せんことは、私の期して疑はぬところである。

道後滞在の間、湯になじみて、折角く御案内を受けた松山城に登らなかつたことは、今にして思へば惜しいことをした。しかし、保育會の新名會長、船田女史、田内芳逸氏、佐伯芳子氏、宮本よしを氏、縣の汐見課長、荻野主事、松本熊衛氏等と共に、一夕の閑を與へられた松山市外の森林内の料亭の風趣は、忘れ難いものがある。其の翌日、船田女史の床軸に、「大いなる森にはいるやひやく」といふ虚子の句を見たが、恐らく此の森を吟じたものであらう。句といへば、松山が子規派の俳句の郷土たるは人の知るところ。子規、鳴雪、漱石その他の遺跡が少なくない。又、漱石の「坊ちゃん」の舞臺としても、探ぐれば興味深いものが澤山あるのであらうが、時がないので皆割愛した。但、時がないといひながら、今思ひ出しても實に楽しい休息の時をもつことは忘れなかつたのである。その一つは船田女史邸の晝寢である。女史は講習會場たる濟美女學校主として、その自宅を開放して、私達のために歡待をつくされたのであるが、私の知る婦人教育家の中で、女史ほど潤達に、私を、しかも新知の私を、心おきなからしめた人は尠ない。そこで、私もつい／＼、平生の地がねの無遠慮をさらけ出して、拜借の浴衣の袖口も寛々と、新らしい疊の上へごろりとばかり、作法もないが邪念もない晝寢姿を投げ出したものである。之れほど結構な夏の御馳走がまたとあらうか。ところで、此の潤達なる女主人は、二日御厄介になつた雅趣深い夏座敷に、軸も、床置も、活花も、一々ちゃんと取り替へて置くことを忘れない人である。私は實に胸の底から涼味を満喫した。その二日目の軸は、前日の古雅な小軸と違つて、表装も新らしい、故白川大將の遺墨の大軸であつた。因に、女史は其の白川大將の令妹なのである。

忘れられない休息のもう一つは、女子師範と松山の二つの高等女學校に奉職してゐる若い女先生、實は相變らずの昔の生徒達に誘はれて、月は東に、日は西にの夕方から、その月が、丁度満月のまんまるい光りを海上一ぱいに照りひろげた夜また、舟を三津濱の灣に漕ぎ出したことである。果ては、灣の向き側の砂磯に蘆を敷いて、さつき皆の釣つたのも交ぜて、(私の釣上げた大漁は三尾)船頭の手料理の夕食を共にし、月光を浴びて共に話しあつた。此の清遊には、三神女子師範學校長、新名同校主事も加はられたが、素より浴衣がけの非公式(?)で、そこには、昔の先生と昔の生徒との、打ちとけたくつろぎが、月下の海の波と共に、たゞ明るく、ひろく漂ひ流れた。それは素より、明るい月と廣い海との舞臺効果に負ふところが多いのであつたらうが、若い人達も、自分で先生になつて見てから、昔の先生に一層打ち解けて呉れることが出来るやうになつたのもあらう。

八幡濱、川之石、今治

保育會講習の後、愛媛縣の依頼によつて、家庭教育講演を行ふために、縣社會課の松本熊衛氏同行、先づ八幡濱に赴いた。八幡濱は伊豫西端の港で、汽車がまだ通じてゐないため自働車によるの他ない。行程四時間餘、しかも其の間には、九十九峠、夜晝峠の二つの難所がある。斯うなると社會教育も容易のことでない。しかし、途中、大洲^{おほ}を過ぎつたことは(松山から約十三里)、地理に暗い私として、全く豫期しなかつた獲ものであつた。此地は、中江藤樹先生が十歳から二十七歳まで居られたところである。詳かに其の跡を訪ふ暇をもたなかつたが、この八月、滋賀縣保育會講習の時、是非訪ねたいと楽しんでゐる近江の小川村と、之れに、九月、島根縣保育會總會の時、汽車で通るに過ぎないが、伯耆の米子とを併せれば藤樹先生の全生涯を、地理的に悉くすることになる。殊に、孝子藤樹の少年時の逸話として傳へられてゐる、故郷の母のためにあかぎれの妙藥を購はれたといふ新谷の村が直ぐ近くであると、松本氏に教へられた時、車上ながら襟を

正すのおもひに禁じ難かつた。

翌十八日、八幡濱町公會堂に於て講演。その後を直ぐ川之石婦人會と母の會の諸君に伴はれて川之石町に赴いた。川之石は八幡濱から尙南下して、宇和島に近い。先年宇和島の講習に來た時も前町長宇都宮氏に招かれて講演を行つたが、この夏の機會に於て、特に再度の懇請を受け、喜んで時間を割いたのである。此の地の婦人會は、婦人會々長兵藤夫人（現町長兵藤傳兵衛氏夫人）副會長菅夫人、及び母の會々長岡田夫人等を中心として、町の助役宮野常治郎氏、川之石尋常小學校長山下長一郎氏、同町職業紹介所の政所爲藏氏その他の熱心なる盡力により、地方稀に見る程に充實し、活動してゐる。婦人修養の工夫を勵むと共に、託兒所をも開設してゐる。上記の諸氏皆先年來の舊知、その篤實なる厚誼には深く感銘させられざるを得なかつた。

十九日。ゆうべおそく川之石から乗つた夜の汽船が今治市に着いたのは正午前であつた。棧橋には市の社會課長高田猛氏、豫ての懇意である昭安幼稚園の田阪雪子氏其他が迎へられ、殊に田阪さんは其の幼稚園の幼兒達を連れて來てゐられた。この思ひがけない可愛いらしい歡迎團の前に、私がどんなニコニコ顔をして挨拶したことか。田阪さんの心いれを汲むと共に、朝々のお茶の水の幼稚園で、おぢちゃん〜といつて飛びついて來て呉れる、あの私の幼兒達のことを思ひ出されずには居られなかつた。

午後、公會堂に於て講演、尾道への聯連船の出る夕刻までの時間を、諸君と共に語りつゝ、伊豫の旅の名残りを惜しんだ。その時、引つゞいて同行せられた縣の松本氏のために、色紙をよごした一句がある。

伊豫五日 いそも いでゆも夏の月

さらば、四國の月よ。といふところだ。聊かセンチにね。

京 都

尾道から夜汽車で京都へ着いた。二十日の早朝である。迎へられて本願寺前の宿で小憩。直ぐ山科の本願寺別院に向つた。そこで開かれてゐる、本願寺の日曜學校講習會で、兒童宗教々育の講義をする爲である。

山科は、蓮如上人の貴い遺跡であり、入寂の地である。夏草のやゝ生ひ茂つてゐる別院の奥庭に面して、法流興起の當時を偲んだ。私など、素より何も分らない。しかも、「蓮如上人一代記開書」などによつてほんの僅にうかゞひ知る此の上人の化風にも、平易簡單の間に機法一體の極致心境を想見せしめて、敬慕の念深からざるを得ぬ。憾むらくは、時を急いで、此の聖地に、ゆつくりと物を想ふことが出来ないのみか、理にかこつた宗教々育論などを説きすてゝ去らなければならぬとは。——午後一時三十九分京都發の「燕」に馳けつけて、その夜の中には東京に歸らなければならないのである。

東 京

二十一日を準備に費して、二十二日から、お茶の水で、文部省主催の保育講習と、幼稚園協會主催の遊戲講習とが始まる。それに引つゞいて、二十八日から、帝國教育會主催の保育講習で講義、その間、午後には、昭和保姆養成所主催の講習と、佛教保育會主催の講習とで講義。それを三十日ですつて、三十一日、長崎縣へ向け出發。此の十日間は、この夏の中でも一番忙しい時であつた。しかも、今にして思へば、此の間が、今年の夏の一番暑い絶頂であつた。午後一時乗り込みの寢臺車を、早速晝寢々臺にして仕舞つたことも、人間に、あはれや疲勞といふものがあることを、一度でも御體驗になつてゐる紳士淑女には、必ずや御寛容を願ひ得ることであらう。

平 戸

一三六

八月一日。特急「富士」の連絡する長崎線急行を早岐で佐世保線へ乗り換へ、午後二時十七分佐世保着。平戸尋常高等小學校長北川庄太郎氏と、北松浦郡教育會の江頭伊三太氏とに迎へられ、自動車で一時間餘、田平^{たへ}日ノ浦から發動船で五分足らず、そこが平戸島の平戸港である。海添ひの宿の三階から眺めると、入江を隔てた對岸に架つてゐる古い石の橋の形の、何んと情趣掬すべきであらう。後で聞けば幸橋といひ、元祿十五年、當時には珍らしいオランダ架橋法によつて造られたものであると。平戸の古い異國情趣が先づ私の目をひきつけた。

其の夕、涼風の座には、北松浦郡教育會長堀口太一氏、高等女學校長梅田廣治氏、並びに北川、江頭兩氏、私のために、交々平戸の景勝と歴史とを語り、感興愈々盡くるところを知らない。平戸の名は小學校の歴史科以來耳に親しみが多いが、それにしても、此の史的内容の豊富極まりなき地を訪ふべく、私の豫備知識の何んと貧弱なことであらう。旅は、人を賢くして呉れる前に、いつでも、先づ其の無知を恥ぢしめる。少くも歴史を詳らにしないで古い土地に來るのは、老人が眼鏡を忘れて書庫に入るやうなものである。私は、諸君の歸られた後、早速宿に命じて、平戸に關する手頃なるガイドブックを求め、「平戸しるべ」を得た。小冊子であるが簡明にしてよく要を得てゐる。去年初めて長崎を訪ふに先だつては、豫め數卷の文献を通覽する用意をもつたが、今年は、平戸に對し其の用意の暇を有せなかつた譯である。

しかも、史跡史論以外、先づ私の興味を強く惹いたものがある。それは、さつき發動船で渡つて來た、あの狭い、しかし随分深さうに思へた瀬戸が、昔から鯨の遊び通る通路だと聞いた時である。玄海に接するところとして、當り前へのことだが、其の壯觀の想像が私の目を見張らせた。更に翌朝、目の前の小さい入江のやうな灣で、此春十五六間の小鯨が捕獲せられたといふ話を、さも、事もなげに宿の女中から聞いた時、私の感興は、たしかに鯨以下の大きさに擴がつた。私

は平生から陸で象、海で鯨を愛好するものであるが、その棲み家に来てゐるといふことは、何だか一種威壓味をもつ象鯨の感（こんな熟語は何處にもない）にたえざらしめた。私は、鯨の繪葉書を取寄せさせ、其話を書いて、東京の娘のところへ送つた。すると——その返事を見たのは、もう平戸を去つた後であつたが——娘からも、流石に驚きましたといふ手紙をよこした。鯨級の大きいものゝ前では、親父も、高等女學校の一年生も、感激に差が無いらしい。

歴史に従つて平戸を語ることは、私の力以上であるが、二日から三日間の講習會の間、御案内を受けて訪ねたところだけでも、到底一々に記しつけ難い内容がある。曰く、鄭成功の碑及遺跡、曰くイギリス松。イギリス商館跡。曰くオランダ商館跡。オランダ井戸。オランダ堀、日蘭親交記念碑。曰く河内浦。而して之れ等の古き平戸以外、沖禎介記念館と、肉弾三勇士の一人作江伊之助氏の家とは、明治と昭和との二つの國家的壯烈史實として、後世の平戸に残る大史跡たらずんばあらず。

沖禎介記念館は平戸西久保、沖莊藏氏の邸内にある。陳列館と、圖書館とがあり、共に觀覽者のために公開せられてゐる。陳列館には、志士沖禎介氏の遺品、及、氏の英靈を吊ふべく普く江湖より寄せられた多數の詩歌文章が嚴藏せられてゐる他に、各種の蒐集品が陳列せられてゐる。私は初め之れを以て冲家が禎介氏を記念するの心に出でたものとのみ思つてゐたのが、禎介氏令弟冲三雄氏の語られし談によつて、之れが元來禎介氏その人の遺志であつて、嚴父莊藏翁、その令息の志を遂げしめんが爲に設けられたものだといふことを知り、更に新たな感慨を深うした。その談によれば、禎介氏は青年時代東京にありし時、常に圖書館によつて、その自學自習の便宜を體驗せられ、業成るの日は、必ず郷里の子弟の爲に圖書館を開設せんことを企圖して居られたのであるそうである。しかも、彼の日露戰役に際し、身を國事に挺して、同志横川氏と共に、壯烈の死を遂げらるゝに及び、嚴父莊藏翁によつて、その遺圖の實現せられたのが、此の圖書館なのである。私は、志士沖禎介氏の一面に、此の文化的志の濃かなるものゝあつたことに、更めて敬慕の思ひを深くし、又、

嚴父莊藏翁の貴き親心に對して、汲めども盡き難き恩愛を感じざるを得なかつたのである。

肉彈三勇士の一人作江伊之助氏の家は、平戸町の北端田助浦にある。氏が少年時在學した田助尋常高等小學校長磯本英一郎氏の御案内によつて、雨の日を其の生家に訪れ、御両親にも面晤し、新たに設けられた佛壇の前に英靈を吊した。三勇士の中、作江、江下の兩氏か北松浦郡の人なることは豫て知つてゐたが、此の講習會の機會に於て、斯く親しく其の家に吊し得ようとは全く思ひかけぬことであつたのである。旅の所得はどこにあるか分らない。因に、田助浦は、今は寂しい磯町に過ぎないが、往時は平戸瀬戸から玄海灘に出づる樞要港として殷賑を極めた土地であり、又、明治維新當時には、人目を逃れ易き港町として、桂、木戸、高杉、大久保、西郷、大隈等の名士が密に參集して、國策を談じたことのある志士多々良孝平の家のあつたところである。

さて、この夏の本題に歸つて、北松浦郡教育會の主催にかゝる三日間の家庭教育講習會と、平戸町及平戸小學校保護者の主催による、同一問題の公開講演會とは、此の未知の地方に、斯問題に對する同憂の士多きことを、聽講諸君の熱心なる態度に知ることを得て、最も快心の至りとした。斯くて、前記の郡教育會幹部諸君の外、町長岩井敬太郎氏、平戸小學校保護者會長森下富太郎氏、其の他諸君の懇篤なる高誼を謝し。再び平戸瀬戸を渡つたのは四日の午後であつた。

長 崎

佐世保から早岐で乗りかへた汽車が、トンネルと青い海のほとりとを過ぎて浦上の驛まで來ると、車窓には、なつかしい味の多い長崎の阪街の灯が、優しいまた、いきをしながら私を迎へて呉れた。私としても、何んとなく胸のどよめきを覺えた。そして、長崎驛のプラツトフォームには、縣保育會會長清水曉昇氏、同副會長田中得三氏、同顧問下川龍爾氏、同理事松尾利信氏、向井マユミ氏、伊藤ツル氏の笑顔があつたと共に、同じ縣保育會の講習の午後の部の講師として、いつの間

にか一足先きに着いてゐられた戸倉ハル氏のシックでスマートな洋装があつた。それから、直ぐ誘はれた夜宴の打ちとけたくつろぎと、去年と同じ旅館上野屋の三階の好ましくつろぎと、——長崎はなぜ、かう私をいつも嬉しく、くつろがせて呉れるところか。尙ほこゝに、前記諸氏の外、縣學務部長小山三郎氏、市學務課長道田間平氏、磨屋小學校長市川庄二郎氏、新町小學校長武富正次郎諸君の滞在中の高誼を深謝する。

五日から三日間の縣保育會主催の講習は、女子師範學校の講堂に開かれた。今年は幼稚園關係の諸君の他に、女子師範の卒業生講習に集つてゐた若い女教員諸君が多數加はられたので、昨年より一層盛であつた。又、私としても、昨年よりも實際的な問題に入らうとして、計畫を擴げて小學校低學年の實際へまで多く話し込んで行つた。今度のことは、或は偶然の好機會といふことであつたのかも知れないが、幼稚園の人と、小學校の人といつしよに幼児教育の話を聴き、いつしよに考へて貰へることは、私の常に熱心に希望してゐることである。殊に、昨年の講習筆記が會の手によつて整理され謄寫されて居て、聽講者が必ずそれを豫め讀むことになつてゐた周到さと、講習中、問はんとする問題を記して提出せらるゝ人の多かつたこととは、私の不十分な講義を多少とも効果あらしめるに、どの位有効なことであつたらう。但、今年の講習會に於て、最も多くの満足を供したものが、午後の土倉氏の遊戲實習であつたことは勿論である。

去年の私は、食るやうにして長崎を見物した。去年の「この夏」へ長々と書いた通りである。今年の私は、じつと長崎の裡に座つてゐて、去年の感興を味ひかへし、深めもし度いと思つた。などいふと少々きざ臭く聞えるかも知れないが、二日目の夕方から夜は、ひとり宿の藤椅子にゐて、木立の籠つた徳大寺あたりから、あの「日本の聖母」の像の立つてゐる大浦の天主堂の方へなびいてゐる、なだらかな丘の町の美しく暮れてゆく色を見たり、星のない雨もよいの空に、うるみを帯びて蒔き散らされてゐる阪街の灯に、なぜとも知らぬ淡い胸苦しさを感じさせられたり、秋の祭の稽古を市のあちこちでしてゐるのだといふ、太鼓ばやしの遠く近い音の合間に、しめつた夜氣の中を港の方から傳つて来る船の汽笛のや

るせない溜め息きに耳を寄せさせられたりしてゐた。

しかも、長崎の趣味内容の豊富と、舊知諸君の歡待プログラムとは、こんな勝手なフアンタヂヤ式獨居を許さない。その中でも、舊友武藤長藏氏の同行を得た稻佐のオランダ墓地は、昨年惜しくも訪ひ残したものゝ一つで、殊に深く心を惹いた。武藤君は長崎高等商業學校の教授で、長崎研究の最權威として世に周知せらるゝ篤學の士。舊識のよしみを以て、特に雨中、東道の勞を煩はし得たのであるが、私のやうな長崎一年生ともいへない程のものゝ見學にとつては、甚だ勿體ない譯なのである。説明せらるゝまゝに聽いてゐると、そこに靜かに横はつてゐる墓石の一つつに、どれだけ詳しく、どれだけ廣い史論が引き出されるものか測り知り得ない。私は歸途の車の中で、武藤君と並び座してゐて、そつと一人で考へた。私などが平戸や長崎を味ふとか、感興をもつとかいふのは、猫が小判を嘗めてゐるやうなものだと。否、紙に包んだまゝの小判を前に、その包み紙に書いてある、味の説明を嗅いでゐるに過ぎないと。無知ほど憐れなものはない。

長崎の三日は、特別に早く過ぎた。その終りの日、夜十一時の汽車までの時間を、雨の丸山で過させやうといふ下川氏のいつも乍らの心つくしは、私の長崎情調學にとつて、まことに嬉しい趣向であつた。たゞ、天の方で、そうく安くは卸して呉れない心か、合憎と其日になつて、前日までの雨がやんだが、降つても晴れても、丸山の夜の灯は軒の簾に艶かしい。しかも、座には、去年も富貴樓で古い唄を聴かせて貰つた老妓愛八が、特に私のために呼んでゐるではないか。下川老の心づくしは、まことに極まるところを知らぬ心にくさである。私は丸山節を所望して見た。

親は他國に子は丸山に　櫻花かや散りくゝに

古い隆達小唄のわびしさ、が座に流れる。愛八はやがてまた三味線を取り上げた。

戀ひの唐船、錨をまけば　沖の鷗もしのび泣き

去年の「この夏」に、どうも變だなとは思ひながら、聞き覚えのまゝ、此の唄を間違つて記してゐた。上を「沖の黒船」

下を「すゝり泣き」と、飛んでもない大間違ひをしてゐた。間違ひも斯うなると、記憶力の問題ではなくて、情感性の缺陷を示すものである。愛八に其の通り白狀したら、「野暮なお方」と手きびしくやられた。私の野暮を當然承服すると共に、此の好ましい古い長崎小唄の名譽のため、特に再録して訂正して置く。

岡 山

八日夕岡山に着いて、九、十兩日、女子師範學校で講習した。吉備保育會主催である。岡山の幼稚園教育に就ては、更めていふまでもない程有名である。私としても、もう書くことがない程、いろ／＼の機會に於て多く語つてゐる。又、私として、静岡と共に、子どもの時からの個人的關係の密な土地であり、幼稚園に關しても、招かれ訪づることの最も多いところで、殆んど歳々に相見る人々は、皆、舊知中の舊知たる關係上、更まつた推賞の辭をいふべく、餘りに親し過ぎる間である。殊に國富吉備保育會長、片岡同副會長、その他幼稚園の諸君は素より、縣の齋藤視學、市の今西教育課長等當路の人々の、幼稚園教育に對する熱心が、益々強く、益々周密に、幼稚園の岡山をして、更に／＼充實せしめつゝある意氣込は、斯界のために欣快の至りといふべきである。よき幼稚園は他にも澤山ある。しかも、市として、又縣としての此教育に對する理解に於て、随一ならずとするも尤なるものである。アメリカの幼稚教育の進展が、セント・ルイスの視學ハリス氏と、その地の教育者諸君によつて貢獻せらるゝところ偉大であつたことは人の知るところ。後世我國の幼稚園發達史を編するものにとつて、岡山が、我國のセント・ルイス、それも澤山あらはれるであらう中の、少くも主要なる一つたらんことは、私にとつて楽しい聯想でなければならぬ。願はくは、折角の此貴重なる歴史と現在とを基として、斯教育のために益々自重、進展の實の擧がらんことを、親愛なる岡山に對して期待して已み得ないものである。

岡山から、私用を以て一旦東京に歸つた後、十六日より五日間の放送のため、再び大阪に赴いた。此の放送は、大阪中央放送局の計畫になる、約一ヶ月の兩親再教育講座の、序論的部分として委嘱せられたもので、兩親再教育の眞意義と家庭教育の中心問題につき、「親と語る」の題下、毎朝六時半から三十分づつ放送した。「親と語る」のであつて、親に語るのではない。そこに、私としてのいつもの心もちがある。曰く、親の苦勞。曰く、親の喜び。曰く、親らしき失敗。曰く、我子の理解者。曰く、親の祈り。皆親と共に親の心を語りあはんとしたのである。A・K管内を除きたる外、殆んど全國中繼であつたが、此の早朝の放送に耳を傾けて呉れる人が、數十萬の加入者中、假りに一人であらうとも感謝すべきである。しかも、之れに對して、各地の舊知未知の諸君から寄せられた、多數の懇篤なる書狀を讀んだ時、人の言葉の空に向つて消えてゆくものでないことを、今更の如く思つた。私は比較的屢々マイクロフォンの前に語るものであるが、常に此の心を以てしてゐるのである。

放送時間の後、十六日は足立勤氏に伴はれて、大和郡山在の阿禮祭に參列した。

稗田阿禮命ひたらあれは天武天皇の朝に仕へて、古事記を傳誦せられた人である。現代の言葉でいへば、古事記の口述著者である。

現在、奈良縣添上郡平和村稗田の賣田神社に祀つてある。僻村の小神社として、永く特に著聞さるゝところもなかつたが、奈良縣童話聯盟の人々が、巖谷、久留島、岸邊諸氏の熱心なる賛同の下に、之れをお咄の神さまとして祭ることとなり、昭和五年八月十六日、盛大なる第一回阿禮祭を舉行するに至つたのである。其の時は右三氏の他、安倍季雄氏や天野雉彦氏等も特に西下してその祭典に參加し、私も招待を受けたが差支へを以て行かず、今年初めて、第三回阿禮祭に列することが出来たのである。午前參拜、午後平和小學校に於て、奈良縣童話聯盟の京橋彦三郎氏、中村易一氏、崎山惣太郎氏、

仲川明氏、中井勘氏、森本葆氏及び神戸より特に参列された塚田喜太郎氏等と共に語り、記念講演をなしたる後、再び寶田神社の社前に於て、村の女子青年團員諸嬢の阿禮さま踊を見た。祭典にも講演會にも踊りにも、村總出の熱心である。しかも、どこまでも素朴、篤實、青田を越して一方に奈良の若草山を眺め、一方に畝傍山、天香山、耳無山の三山を望む、大和の國平和村の一日は、私として近來稀れにもつことの出来た楽しい一日であつた。此日恒例紀念として阿禮祭の三字をすかし、張りにした美しい奈良團扇が配られたが、求められるまゝに、それへ書きつけた一句。

語りつぎ言ひつぎ古し涼み臺

夜の盆踊も見て呉れといはれるのを辭して、大阪の長野校長に伴はれて堂ビルホテルに歸つたのは夜に入つてゐた。

十七日は宿約によつて須磨の母の會に赴いた。此の母の會は、前會長伊丹武司氏、次會長西村茂市郎氏その他幹事諸夫人の熱心によつて、最もよく整うてゐる會である。須磨は今大神戸市の一部となつてゐるが、さすがに閑雅、朗晴の勝地區で、會場たる西須磨小學校の如き、隅から隅まで知的明るさが行亘つてゐる。講演後、伊丹氏は其の編著するところの「須磨吏蹟」を惠與せられて、語ることに詳かである。すぐ大阪に歸る積りでゐたのを、そのお話に促し立てられ、伊丹氏及び會の後藤、安井兩氏、西光、堀兩夫人に伴はれて久し振りの須磨見物を試みた。一の谷で思ひ出したのが七月の文樂だ。

十八日は、T君に招かれて、箕尾の晝寢と、打ちくつろぎ、夜涼に入つて、寶塚へ連れられた。私は、此の現代人(?)にも似合はないお話だが、本場の寶塚劇場へ來たのは、實のところ、今日が初めてなのである。大阪へ來る度びに研究心(?)の動くことはあつたが、いつも其の時が無かつた。そして、今夜は大分得るところがあつた。レビューだけは東京でも見ることが出来るが、所謂大衆娛樂としての此の大仕掛けの原理と實際とは、來て見ないと分らない。お蔭でりこうになつた。

十九日は、O君にひつばられて、丁度來合せたNさんと共に堺の濱に遊んだ。此の土地の古い銘酒醸造家の若旦那であ

る。O君は、特に店から取り寄せて、私を酔はせようとかゝつた。その癖、自分は一滴もいらない君は、堅くるしい幼児教育論ばかり持ち出して、それで勝手に酔つてゐる。私を呼んで先生といふ人だが、理學士で文學士の此若旦那、野暮にかけては確に出藍の方だ。そこへゆくとNさんは熱心な遊戲の實際研究者だけあつて、私が得意に持ち出す、一夜づけの寶塚ダンス論に、然るべく調子をあはせて呉れて、ゆうべの唄うたひの名なども澤山教へて呉れた。O君もNさんも、私にとつて最も遠慮のない人達だ。私の心も身も此の有名な料亭、の大廣間以上に、ひろく風吹ぬける涼しさであつた。

近江八幡

二十日朝放送を終つて、すぐ滋賀縣八幡町へ行つた。滋賀縣保育會主催の三日間の講習が、午前十一時から始められるのである。

滋賀縣の保育界に接するのは初めてである。たえず通過してゐる地でありながら、今まで訪問の機會を逸してゐた。保育會長一谷軍治氏が、七月大阪へ來られて此の計畫のお話のあつた、私は、豫定の日程も變更して、その招きを喜び受けたのである。

此の講習中、涼しい雨の日がつづいた。そのため、琵琶湖周遊の船を用意して置いて下さつたのを楽しむことも出来なかつたし。近い安土城の遺跡に、史實は素より、舊友小山内薫君の名作「吉利支丹信長」の舞臺面などが、あり／＼と思ひ出されたが訪ふことも出来なかつた。其の代り、宿で名物の鮎料理や鮎ずしを賞味しつゝ、一谷氏から、所謂江州商人立志傳物語や、近江ミツシヨンとして有名なボリス氏のことなどに就て、豊富なお話をゆつくり聞くことが出来た。また夜は、學校から「藤樹先生全集」を借りて靜かに讀むことが出来た。

二十二日、講習を了り、私の切望によつて、一谷校長及び長濱聖徳幼稚園園長護雅亮氏と共に藤樹先生の遺蹟を訪ふた。

實に永年の宿願であり、「この夏」としては、愛媛縣以來の重要プログラムになつてゐたのである。大津から江若鐵道により、湖邊に沿ふて三井寺下、志賀、堅田、近江舞子等を経て一時間十五分餘り、安曇驛あづまで下車、そこから自働車五分程で、小川の里滋賀縣高島郡青柳村大字上小川に着くことが出来る。先づ藤樹神社に詣で、少し行くと、玉林寺があり、其の側に先生の墓塋があり、母堂と息子との墓が近く並び立つてゐる。其のあたりから、昔の小川村の地形が思はれる。藤樹書院趾は、そこから直ぐ近い。路に面して大きな藤の古木が、葉を繁らせて、昔のまゝにある。先生の邸宅と書院とは、明治十三年類焼の厄にかゝり、門と倉庫とが残つたのみであるが、後に假りに建てられた祠堂があり、こゝで年々儒式祭典が行はれることになつてゐる。又、先生の遺品を陳列してあるが、慈母孝養のため、官を棄てゝ大洲から歸られた當座、知行を離れた一村民として、生計の資を得るために酒盃を出された時の酒壺も其の内にあつた。屋敷路は二十間と二十一間の四角くで、舊い圖によつて、當時の建物の配置を知ることが出来るが、聖人の靜居を、まのあたり見ることの出来ないのは誠に遺憾の極みであるが、屋敷の四方を流れてゐる。細流は、貴い藤の木と共に昔のまゝの面影を偲おもはしめてゐる。祠堂を守る淵田竹次郎翁、特に先生の遺筆を取り出して示されたが、其の態度頗る慇懃。昔此の郷を訪へる一士人が、案内の農夫が、先生の墓塋に入るに當つて、特に潔服に更めて禮容厚きものあるに敬嘆したといふ、あの有名な傳へ話なども思ひ出される。

徳島

また大阪へ戻り、夜十時天保山棧橋發の汽船で、徳島に向ひ、翌、二十三日早曉小松島に着。富田小學校校長澤田兵三郎氏その他に迎へられ、徳島の旅館に入つた。

徳島縣保育會主催の講演が、此日から二日間、富田小學校の講堂に開かれ、一般家庭婦人を交へて、甚だ盛であつた。

徳島市は板東富根氏の私立幼稚園を先驅として、富田小學校始め各小學校に私立の幼稚園が設けらるゝに至り、それが數年前に於て一齊に公立に更められ、今日の六公立幼稚園となるに至つたのである。市小學校と市幼稚園とが、よく系統立てられてゐる點、岡山市に似るものがある。此他、二個の私立幼稚園の他、女子師範學校の幼稚園あり、更に男子師範學校の卒業生團體が幼稚園を經營せるは、斯界のため喜ぶべき新例となすべきである。前にも、松山の條にて記した通り、四國保育界のために、此の進展の勢にある徳島の幼稚園の充實を祈りてやむことが出来ない。幸に保育會長、市視學厚見萬司氏、女子師範學校附屬主事の堀米次氏、前師範國校長矢島喜源次氏其他澤田氏ほか各小學校長諸君の斯教育に對する熱心は、極めて有望なる將來を約束するものといふべきである。

さて閑談に入つて、徳島へ來たからには、阿波淨瑠璃を聴きたいものだが、人形芝居の源之丞一座は七月に忠臣藏を興行したが今日は居ないとのことで、何とも仕方がない。しかし、もう一つの希望の、人形作者天狗屋事吉岡久吉老を訪ふことは出來た。こんな名は芝居人形に興味を有しない人は知られないであらうが、此の道に於ける今では唯一の名人なのである。谷輪氏の「蓼喰ふ蟲」を讀んだ人は、あの人形芝居の好きな通人の老人が、徳島で此天狗久に會ふことを楽しんで居る條のあたりに、「ほんたうに腕の出來てゐる天狗久は、もう六十か七十になる爺さんで、もし此人が死んでしまへば、永久に此の技術は亡びるであらう……」と書いてゐるのによつたら覺えてゐられるかも知れないが、此の名人が即ち久吉老である。

その家は、徳島市在の國府町和田といふ處にある。私は、その仕事場の光景、老人の風貌、平淡でゐて味の深い談話などを、こゝに簡單に書いて仕舞ふのは惜しいやうな氣がする。又、こんなことは、誰れにでも興味のあるものではないかも知れない。そこで、案内役の澤田校長が時計を氣にしては見られた程、私が長く坐り込んだことゝ、その時注文して置いた由良之助の頭の、早く出來上つて届けられて來るのを待ちぬいてゐることだけを言つて、此の、もの好きの段を幕に

するとうしよう。それから、十郎兵衛屋敷跡を見、その墓に詣でたが、私の頭の中では、あの七月の文樂の南部の「鳴戸」が「この夏」としてこゝへ連絡して來るのである。しかし、之れ亦皆さんには、何の興味もない、それだけのせりふに過ぎないであらう。

歸途は、徳島驛から汽車で小松島へ出て、大阪への汽船に乗った。こゝまで澤田氏その他、及び小松島高等女學校校長關谷複吉氏と奥さんとの見送りを受けた。

靜岡

二十六日から三日間の靜岡縣教育會保育部研究會主催の講習は、一昨年の「この夏」の時と同じに、宿は與津、會場は靜岡の教育會館。その時の保育部長峰女子師範學校長が名古屋に轉ぜられて、新會長に同じく女子師範學校長山東善之進氏が代られたわけで、他は皆舊知の人ばかり、元來が配里のこともあり、私はもう旅の人ではない。しかも、元老の宇式かん氏相變らず雙樂であり、新會長の非常なる熱心の下に池田壽太氏、吉田やつへ氏、金原のぶ氏、鶴殿はな氏、林成子氏、松岡しづ氏、相田きく氏、太田民次郎氏、大山てい氏等理事として活躍、東海の斯の教育のために、大に人意を強うせしめるものがある、たゞ女子師範學校に附屬幼稚園のないことは、此の縣らしくもない缺陷である。前校長も此點に盡力して居られたが、再び新校長の新計畫となつてゐる。必ず實現を期したいものである。

與津の濱はいつ來てもいい。但、そう悠然として海を見てゐる暇も少なかつたが、一と朝、曉起してひとり清見寺の石段を登った。

山門に秋先づ涼し清見寺

見よ脚下の秋は澄めり清見渚

富士郡大宮

二十九日からの三日間、静岡縣富士郡教育會主催の兒童心理學講習。會場廣岡小學校。會員は甚だ多數であつたが、天は涼を惠んで、三日間、珍らしく汗のない夏期講習であつた。

きのふ午後。静岡から富士驛に着、會長渡邊榮作氏と幹事山田幸作氏とに迎へられて、すぐ大宮の宿に向つたが、先づ目を突いたのは、此春の大火の難に遭つた、痛々しい町の光景である。素より街道筋の商店は既に賑はしく復興してゐるが、富士表口らしい蒼然たる古味は見られない。宿は淺間神社の森に近く、焼失地域からも離れて居り、此の町の誇りとするところの清泉滾々として家を廻つて流れてゐる。

此の大宮から峠一つ越へた芝富村は、私の父が壯年血氣の頃、官選戸長として來り住み、大に土地開拓の志を試みた、私の家としては由緒の深いところである。少年時代、一度、父に伴はれて、銃獵旁々訪ねたことがあつたが、此の機會、大宮小學校青山於菟氏と教育會の山田氏の東道を得て、今も残つて居る屋敷跡を訪ひ、又當時の舊識の家の襖にある、父の筆になる四季の詩を書き取つて來たりしことは、私ひとり知る感慨の半日であつた。

有名な白絲の瀧も訪ふたが、恐らく私の今まで見た瀧の中で、最も優美なるものと言つてよからう。雄壯はないが名にふさはしき繊細美は、自然の最も巧緻なる傑作である。但し。それも亦、くに、自慢に近きものとして、多くいはぬ。更に一と朝、眼前一ぱいに展開した裾野の富士の壯大美に至つては、郷土の美として語るべく、餘りに偉大である。

と、ぐつと大きく見得を切つて、「この夏」の筆を、一と先づ措くことにする。一と先づといふのは、今夜立つてゆこうとしてゐる島根縣保育會總會が「この夏」のプログラムの大切な一つとして残つてゐるからである。(八月六日夕)

濱 田

大宮までの原稿を、読みかへす暇もなく編輯の方へ渡し、私はすぐ島根縣へ向つた。濱田で開かるゝ縣保育會總會と濱田町母の會總會とが待つてゐるからである。

汽車はきつちりと二十三時間。六日の夜濱田驛に迎へられた親しい顔は、豐田女子師範學校が前校長に代はられ津田主事が新らしくなつた他、井口町長、田邊婦人會長、濱田幼稚園の藤村たね子氏その他皆前々からのなじみである。一旦宿へ小憩してといはるゝのを辭して、すぐ車を新町の山形薫氏の家へ急がせた。今夜そこで開かれてゐる母の集りを訪ふためである。こゝで一寸説明の必要がある。一昨年九月、此地で同じ縣保育總會が開かれた時、私はその機會を以て、盛大な婦人會で家庭教育の講演をしたが、その話の中で、母の教養のためには、小人數の母の會が最も有益であることを語つた。ところが、それが、會長田邊德子女史その他幹部の夫人諸君と、參列してゐられた當時の女子師範學校小學校主事片寄卯三郎氏その他小學校方面の諸君とに、強い感銘を惹き起したのだそうである。私の講演後すぐその會場の廊下や控室で實行の相談が始まり。その十一日に早速出來たのが此の新町錦町母の會なのである。爾來、老會長の強大なる實行力と、藤村、山形兩副會長の熱意と、二つの小學校の先生方の理解ある協賛協力とによつて、次から次へと各町内の母の會が作り上げられて、本年春に至つて、濱田全町に行き亘つて、十二の會が出來上つたのである。それで、皆さんが私を生みの親だと言つてゐて下さるのであるが、決してそうではない。生むのはいつでもお母さん方なのである。

私の所謂「小人數の母の會」は、會員を二十人位、多くて三十人以下に限る。そして、規則正しく集つて、濱田町では隔月一回、教育家を座長とする母の座談會を開くのである。即ち講話を聴くのでなく、母の實際の苦心を語り、具體の問韻を質するのである、今夜の會は、此の趣旨が誠にその通りに實現せられてゐた。私は會の平常をみださない爲に邪魔にな

らぬやう黙つて座つてゐたが。次々に母の口から語り出さるゝ親の言葉と、それを、學者としてではなく、自らも親心になり切つて應答してゆかるゝ先生方の言葉との裡に、私が、どんな感激に充たされたかは言ひあらはしやうがない。

翌八日。此の十二の小さい會の第一回聯合總會が、庭園の古く美しい公會堂に開かれた。午前總會、私の講演午後懇親會といふ終日のプログラムであるのに、五百に近いお母さん方が朝から集まられたには、私に第二の感激を與へずにはなかつた。之れこそ、たゞの數ではない。それぐにみつちりした質を有する十二の母の會の總集なのである。更にその夜、有志夫人方數十人は私のために晚餐を共にして、母の會の將來、各自の問題につき相談をせられたが、初秋の夜は更くれども談盡くる時を知らず、私の來たために、少なくとも此全一日、家庭教育のために却つて家庭教育を、かにさせたのではないかと、心中すこぶる危惧恐縮にたえないものがあつた位である。呵々。

九、十兩日、女子師範學校に於て、島根縣保育會總會につゞき、講習會が開かれた。島根縣の幼稚園は、その數に於て未だ必ずしも盛なりとはいへない。しかも、年々、松江と濱田の兩地に交替に開かるゝ總會は會員諸君の熱心を示し、將來の發展を約束するもので、殊に之れで三回目の列席である私としては、特に多大の關心を山陰の保育界に寄するものである。

濱田には兩總會の他に、もう一つ總會があつた。それは保育會、婦人會、母の會の皆さんの、私に對する懇篤なる厚情の總會である。斯くて私は頭も、胃も、胸も一ぱいに充たしつゞけられて、十日午後、私の今年の「この夏」の終りである濱田を辭した。

往きがけには雲に曇つてゐた宍道湖が、明るい夕日に、あでやかな紅を染めて、たつたひとりで、うつとりと寝臺車の窓に倚つてゐる私を、もの言ひたげに迎へ、又見送つて呉れた。(九月十一日午後東海道特急車中にて)

定 規 文 注

告 票

- 一、幼稚園及び小學校、家庭、育児、看護等に關する論說調査研究等の寄稿を歓迎いたします。
 - 一、寄稿は一行二十四字詰に記して下さい。但改行は一字下げること、また句讀點は一字あけること。
 - 一、寄稿並に本誌の編輯に關する通信、紹介及び寄贈の新聞書、交換雜誌、入會手續、更に
 - 一、本誌の購讀及び廣告に關する通信並に照會等一切左記編輯兼發行所宛に願ひます。
- 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内
- ## 日本幼稚園協會
- 一、本誌御注文の方は凡て前金（郵税共）で願ひます。（郵便代用の場合には總て一割増）
 - 一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。
 - 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし。
 - 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。
 - 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。
 - 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

告 廣

特等面一頁 金參拾圓
 一等面一頁 金貳拾五圓
 一頁以下御斷
 神田區南甲賀町八品田奥松に御申込下さい。

發 行 所 日 本 幼 稚 園 協 會

振替口座東京一七二六六番

製 複 許 不 載 轉 禁

編輯兼發行所 倉 橋 惣 三
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内
 印刷者 柴 山 則 常
 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
 印刷所 合資 杏 林 舍

價 定

一ヶ月分一冊	金參拾五錢	送料壹錢
半ヶ年分六冊	金貳圓拾錢	送料共
一ヶ年拾貳冊	金四圓貳拾錢	送料共

（外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい）

昭和七年九月十二日印刷納本
 昭和七年九月十五日發行
 幼兒の教育 第三十二卷 第八・九號

昭和幼年唱歌

小松耕輔・梁田貞
葛原茲生共著

清水良雄
畫伯裝釘

第一輯目次

園長先生
人參食べてる兎さん
猿はひつかく
鸚鵡のお家
蟲がはねた
ペンギン

第二輯目次

驢馬がにげる
野原はひろい
ワクノボリ
鐘を著たい
家鴨を數へませう
毬がつきたい

伴定送
奏價料
附四各
美十二
本錢錢

昭和少年唱歌

小松耕輔・梁田貞
葛原茲生共著

清水良雄
畫伯裝釘

第一輯目次

お宮とお寺
柿の種と握り飯
やねの上の雀
はまへの子
私の箱庭
ラヂオ體操

第二輯目次

お家にあかりがつきました
ベリカン
夕立やんで
牛と馬
めえ／＼親山羊子供山羊
日暮山霧

伴定送
奏價料
附四合
美十二
本錢錢

廣島高師教諭 山本壽先生著
音樂教育の三大方面
菊判美裝函入
定價 四、五〇

小松、梁田、葛原先生著
文部省 認定 **小學歌曲選集**
四六倍判美裝
定價 一、二〇

小松耕輔先生著 自第一集至第三集
小松耕輔歌曲集
四六倍判美裝
定價 各五十錢

梁田貞先生著 自第一集至第五集
梁田貞歌曲
四六倍判美裝
定價 各五十錢

小松、葛原、梁田先生著
大正少年唱歌 合本
菊判クロース製
定價 二圓五十錢

小松、葛原、梁田先生著
大正幼年唱歌 合本
菊判クロース製
定價 二圓五十錢

◇ 東京市神田區 目黒書店發行 振替口座 八二〇 東京番 ◇

東京高等師範學校教授 文學博士 小野島右左雄先生著

菊判全一冊洋綴紙數四百五十頁
定價金三圓五十錢送料金十八錢

刊 新

最近心理學概說

上卷

學界の要望
せる最近心
理學概說漸
く茲に成る
見よ!! 斯學
の最高峰!!

文檢要書

拾數年高等學校、高等師範學校、專門學校、大學等に心理學を講じ、所詮、何等かの體系化的考察を強要せられる立場にある。その意味に於て過去を清算は將來に延び様とする著者の一つの念願がこの書によつて滿されやうとする博士が書の有る居る如く實に本書こそは博士が學の生涯の前半生を劃された最も苦著者の述である而して博士は我心理學界に於てもその最高峰と目された伯林心の體論に通曉せらるゝ隨一人者、即ち其所説は從來の心理學に猶幾多の新派形體論を齎らし之を極めて體的に記述し、讀者をして如何に心理學に深き興味を與ふるか計り知れざるものがある。一般心理學の愛好者は勿論高等程度さ教科書及文檢受験者等にとつては絶好の參考指導書である是非御必讀を乞ふ。

劣等兒
低能兒

心理と其教育

錢七十金料送

學童保健

菊判全一冊洋綴
定價四圓十五錢
送金料二十錢七

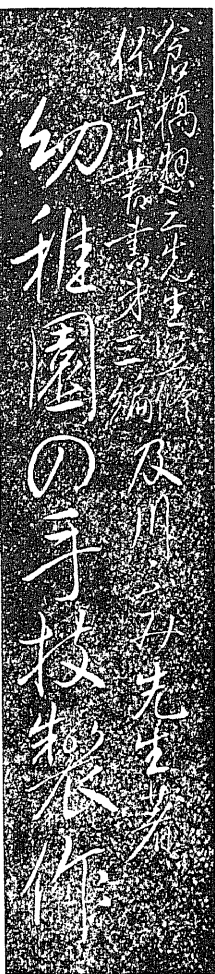
醫學博士 三田 谷 啓 著

學的統計的施設等的各方面より限なく詳説し、猶ほ其の實際問題、現狀に基立して懇切に指導するから學校教育家は勿論各家庭に於ても本書に依つて學童健康の萬全を期し得る良書である。

讀。家も教育の基本の準備として先づ本書の一覧必

店書館文中區込牛市京東行所發

振替 東三 京八 二七 番
電 話 牛 込 三 三 番



四六判全一冊
ボプリン布厚
表紙本綴美本
原色版單色版
等插繪頗多
定價金 一圓
送料金 二錢

著者は東京女子高等師範學校教諭として、同附屬幼稚園に於て實際指導し來たれるものを各學期各月に配當し之を統整し、以て各幼稚園託兒所等に於ける最も緊要なる手技製作の指導保育を遺憾なからしむるやう、直接手をこりて導くが如く、親切に叙述してゐます。一般に幼兒保育の任にある方、竝に世の幼き愛兒の母君に捧げます。

倉橋先生監修保育叢書

既刊

(各冊金二錢圓)

保育叢書 第一編 幼兒の 人形芝居脚本 ため乃

菊池ふじの先生共著
脚本十種、此の人形芝居は常に幼兒に新しい歡喜を以て迎へられる。巻頭寫眞オフセット七度刷舞臺裝置、及び同じく各種人形を収め、ボプリン布厚表紙本綴、體裁瀟灑。

保育叢書 第二編 自然物おもちゃ

膳 眞親子先生著
幼兒保育上大切なお細工に於て、あるゆる自然物を利用し巧みに種々の形態を模せしむ。その數實に四百八十有餘種、敘説亦簡明、寫眞繪畫頗る多數。

株式會社 貝館

東京・神田・教育會館内 電話九三三(二) (註文專電) 振替東京一六〇四〇

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可
(毎月一回十五日發行)

昭和七年九月十五日印刷納本
昭和七年九月十五日發行

臨時定價七十錢